図解 捕縄術

藤田西湖 著

捕縄術目次

絵　藤田西湖

はしがき

昔　末だ天下が治らず　盛んに戦争が行われていた頃は　武士は戦陣の功名を立てる上にも　敵を生捕りにする業の一として他の武技と共に捕手捕縄の術をも大いに学んだようであるが　世が大平となるに及んで　捕縄術が専ら犯罪人捕縛のための警務用術技として用いられるようになってからは　上位の武士はこれを下役人のする業として漸時縄をも手にしなくなった

徳川時代には　捕方同心以下の者は務めて学んだが　与力以上の武士は学ぶ者も少なかった

明治以降　仮之犯罪人であるにせよ関係なき民間人が乱りにこれを捕へ縄を掛けることは違法であるとされるようになってからは、これを伝え学ぶ者がますます少なくなり　武術家の一部と犯罪人逮捕拘禁護送に当る警務官が　その必要上の捕手早縄と護送用縄の数手を学ぶのみとなった

曽ては、武芸十八般中の一に数えられ伝えられた捕手捕縄術も　今はその術技と共に　その奥儀を伝えた文献資料さえ漸時亡失されつつあるこの時に当り、この術技を学んだ者の一人として　この態を黙

視するに忍びず　せめてその術技の一端と故実古伝だけでも残して置きたい念慮から　過去数十年間に亘って蒐集した古伝の文献資料の一部をまとめて　世の研究者のために上梓した次第である

昭和三十九年　秋

藤田西湖

例言

図解捕縄術は　武術としての捕縛用縄法を主として書いたもので　刑罰用処刑縄まで書くのを目的としていない　従って　処刑用首斬縄　晒縄は　他の縄法にも仕用されている関係上載せたが　磔縄火焙縄　拷問用各種責縄　試剱用各種仕様縄等の類は　本書には一切省略した
又　棒縛　梯子縛　柱縛等他の器具道具を用ゆる縛術法も大小刀縛の外は凡て　これをはぶいた
これらの縄法はいずれ折を見て　拷問用各種責縄　刑罰用処刑縄　試剱用仕様縄　器具道具仕用の各種縛り方　其他変形変態の縛り方一切はまとめて別冊として上梓する心算である

捕縄術とは

捕縄術とは

捕縄術とは、人を捕え縄を以て縛る術で、一名、取縄術、捕縛術、縲繋之術、伽術、俰術ともいった。支那ではこれを綿縄套索といい、略してただ索ともいった。

この術の初めは、戦場において、敵の捕虜を拘縛したり、乱棒狼藉を働く者を制禦拘禁するために行われたものであるが、後には、専ら犯罪者の捕縛拘禁脱走逃亡を防ぐために用いられるようになったのである。

縄掛方法も、初めは只単に敵の自由を拘束し、乱棒狼藉脱走逃亡の出来ぬような縛り方だけであったのが、後には、大将には大将縄、士卒には士卒縄、下郎には下郎縄と一見その身分階級の見別がつくような縄掛方法を用いたのがいつしか定法となり、ついにはその身分階級ばかりでなく、職柄によっても縛り方が定められ、武家には武家、庶民には庶民、僧侶には僧侶、神官には神官、山伏、行者、婦人、子供、盲目、非人等々、みなそれぞれ一定の縄掛方式によって施縄方法を違えると共に、犯罪の事項、

罪の軽重等まで一見判別できるような掛け方をするのを定法とするようになった。従って定法通りの縄をかけるのはよいが、定法違いの縄を掛けるのは、掛ける者の落度、掛けられる者の恥辱ともなった。

徳川時代一般に用いられた縛縄法としては、

侍には　二重菱縄
庶民（雑人）には　十文字、割菱、違菱、上縄
出家（僧侶）には　返し縄、鷹羽
社人（神官）には　注連縄、鳥居懸
山伏には　笈攝縄
婦人には　乳掛縄
子供には　稚児縄
座頭には　座頭縄
対決には　羽附縄
剛力者には　足固縄
縄抜けの巧みな者には　留縄
罪人追放請渡には　介縄、贈縄、渡し縄
晒物には　晒縄
軒罪には　首切縄、切縄、斬縄、剪縄、落花、捨縄、伏縄

火付には　　火付縄

非人には　　非人縄

等々をかけるのを定法とした。もっとも流派によってその名称、縄縛法に相違はあった。

各流で行なわれた捕縄術

荒木流

早　縄　一寸縄　有髪縄　鋏　縄　鑰　縄　夜　縄　以上五筋

堅　縄　常之縄　位之縄　釣之縄　論之縄　切　縄　以上五筋

御家流

本　縄　片手縄　追置縄　襟　縄　渡し縄　防子縄　羽織下　以上七筋

気楽流　本流派は戸田流より出　戸田流も同

早　縄　本　縄　盗賊縄　女　縄　牢入縄　首切縄　坊頭縄　社人縄　士　縄

山伏縄　渡　縄　羽付縄　馬上羽付　御前縄　追放縄

志真古流

柳縄の由来ト申ハ天地開闢ヨリ天神第七代伊弉諾　伊弉冊尊ニテ渡ラセ玉フ其時　天照大神顕シ玉フ其御代ヨリ子安ノ縄初リタリ　天神七代地神五代以来血脉六筋ノ縄出来タリ　天ヨリ不動鎖傳ノ縄渡レリ　一筋ノ縄ニ七筋宛子縄ヲ附親縄共ニ四十八筋ト申縄ニハ九曜七曜ヲ奉表候流ハ万流師者ハ近ト申セ共我等渡ト申ハ越前國櫻埸釆女正ヨリ以来血判令傳授者也

山伏縄　坊主縄　羽飼〆縄　武者縄　国越縄　対決縄　争ノ縄　指出シ縄　晒シ縄
払　縄　掛解縄　渡シ縄　追放縄　百姓縄　女早縄　乳隠縄　手房留縄　てんほこ縄
夜ノ縄　番不入縄　重罪人晒縄　縄手錠　大巻縄　居責縄　釣　縄　花曼縄　海老縄
落花縄

常慎流　当流縄法八夢相流ト同

白洲縄　七　曜　乳　割　腰　縄　腰小手留　渡シ縄　追払縄　大　縄　トイ縄
トウ縄　マワシ縄　ツユカケ　早縄トイ　ケサカケ　ケマン　小手カヘシ　芝居縄
番イラズ　ツメ縄　早　縄　早　縄

心外無敵流

早　縄　四寸縄　さげをしばり　女しばり　ちごしばり　ちや坪しばり　棒しばり
以上七筋

真之神道流

真之神道流は　早縄　本縄　体中縄の三つに別け
道中縄　腰　縄　翅〆　僧　縄　女　縄　の以上五法とす

関口新心流

両手ノ早ククリ　羽カヒ緊（手ノ大指結様伝書両ヒジニテ止ル）
番不入（足カカマリ下ニテトメリ）　忍　縄　倒　縄　片手掛
腰　縄（胴ヲ一重マハス）　田　掛（小手チキリ）
三尺縄（是大指ニテ止ル）　以上の外縄法トシテ
早　縄　二つかきくわん　四寸縄　番無縄　切　縄　侍　縄　（以上五）
お家縄　山伏縄　高手縄　羽がい付縄　巻　縄　児女縄　ほたし縄　胸刀之縄
小手縄　また縄　（以上十）
棒しばり　はしごしばり　はしらしばり　はた者しばり　すかきしばり　たゝみしばり
立しばり　俵しばり　二人しばり　片手しばり　（右十）
木馬しばり　からしばり　縄無しばり　二つ声しばり　小脇指しばり　かけきよしばり
てんびんしばり　もつこふしばり　さかしばり　てかね　首かね　（右十）
籠　すまき　筋たち（以上三条極意）

直至五傳流

一、早縄之事
最初蛇口の処を右の手首へかけ夫より左の肩より首へまはし左の小手を右の小手にそへ縛る
一、不入番之事
玉二つたて縄足へもかゝる
一、下緒縛之事
両方の手首を袂へ入れ両方の肘へ鞘を通し下緒にてとめること
一、武士縄之事
咽へ紙をあてること
一、本縄之事
玉二つ拵て腕へかけ印付にし縄の両端を合せ菱の如く結び夫より小手を留るなり
一、羽骸付之事
右の手を切付に縛り右の腰へつけ左の手も同様に縛り左の腰へつけ後帯の結目の処にて縄の両端をいぼ結にし帯へ引通すこれは途中など連行時の縄なり
一、番不入之事
本縄の如く縛りて足へかけること

夢雙神鳥流

一寸縄　カラナハ　ナカナハ　アラソイ縄　イタマス縄（坊主　女人）　ハマナハ（二尺五寸）　カキナハ（三尺二寸）（以上七ケ条）

藤原流

早之縄　鑰縄付鎵縄　論縄　有髪縄　位之縄　常之縄　真之縄　一寸縄

夜之縄　釣縄　伏縄　切縄

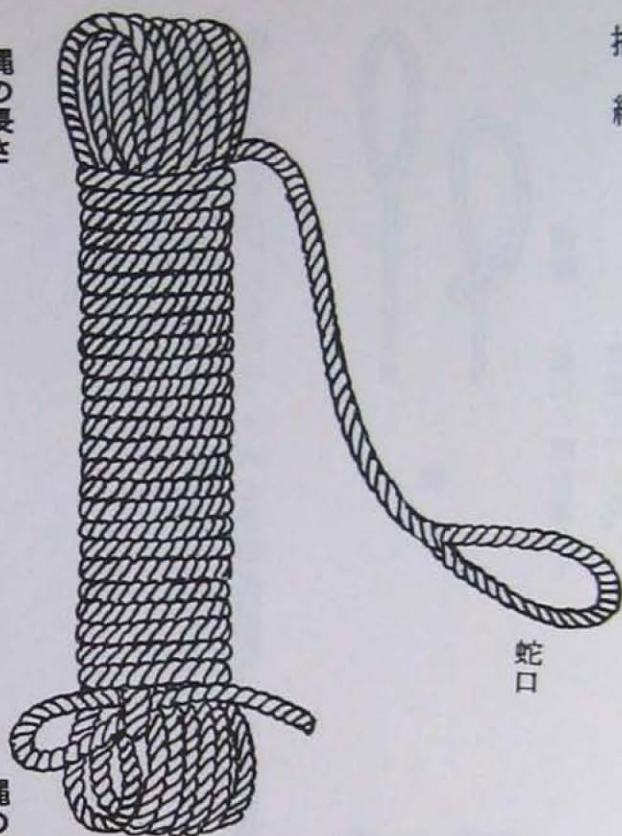
山田新心流

早縄　番不入　本縄　棒縛　短尺（以上五筋）

捕縄

捕縄

蛇口

捕縄は、もっとも良質な麻を極めて柔かに打ち、これを三操編の細目にしたものが良いとされている。そしてこれを血で染めたいわゆる血染縄がもっとも良いとされた。血染縄は永年使っても塩気がつかず腐ることがない。また縛るにもすこぶる締りが良い。渋染縄は腐りが早くかつ解け易い。絹縄は丈夫で締りも良いが解け易い欠点もある。江戸時代捕縄は参州宝蔵寺で製した縄がもっとも珍重された。

縄の長さ

縄の長さは流派によって、その縄縛法の繁簡あり、一定しないが、

本縄は三尋半から十一尋
早縄は二尋半から三尋半
鈎縄は早縄の長さと同じか、またそれよりやや短いものが用いられていた。鈎には一個鈎、二個鈎、塀乗鈎等の別があった。

その他三寸縄、五寸縄、七寸縄等がある。

縄の色

縄の色は、古くは四季によって色を違え、またそれに相当する方位に向って縄をかけた。

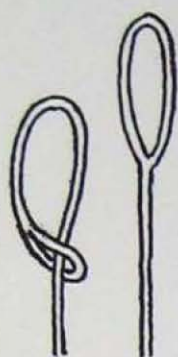
春は東に向って、青色の縄を用い
夏は南に向って、赤色の縄を用い
秋は西に向って、白色の縄を用い
冬は北に向って、黒色の縄を用い
土用は中央で、黄色の縄を用いたが、後には罪の軽い者には白縄、罪の重い者には青縄、位のあ

る者には紫縄、下人には黒縄、その他赤、黄、浅黄色の染縄を、それぞれの身分階級に応じて用いた。

旧幕時代、江戸では染縄を横目縄、印縄といって、北町奉行所掛り同心が召捕って来た場合は白い縄、南町奉行所掛り同心の場合は紺縄、勘定奉行所は三操白縄、牢屋敷縄は紺染をかける定めであった。

明治時代になってからは染縄は使わず、針縄、鈎縄も用いられぬようになり、逮捕用捕縄、昔の早縄（速縄）押送用護送縄、昔の本縄の二種となった。そして縄縛法もほぼ一定し、長さも押送用護送縄は長さ七米(二丈二尺一寸)太さ直径約四・五粍（一分五厘）逮捕用捕手縄は長さ五米（一丈六尺五寸）太さ直径約三・五粍（一分一厘）のものが用いられるようになった。

縄先

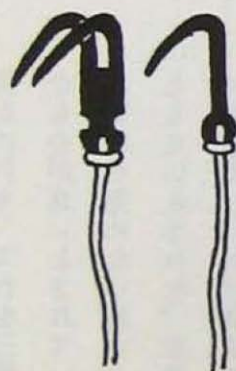
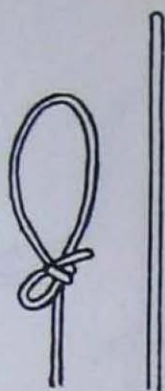
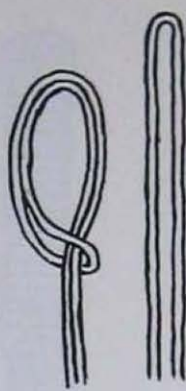
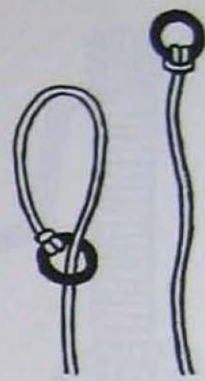
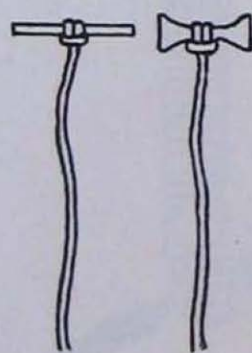
捕縄の先端に蛇口を付けるのは捕縄の定法の如きもので、大抵の流派はこれを付けている。針、鈎、鐶、分銅等を付けたものは、すべて早縄用捕縄で、本縄用捕縄には付けない。

蛇口

捕輪　蛇口に縄を通して捕輪をつくる。

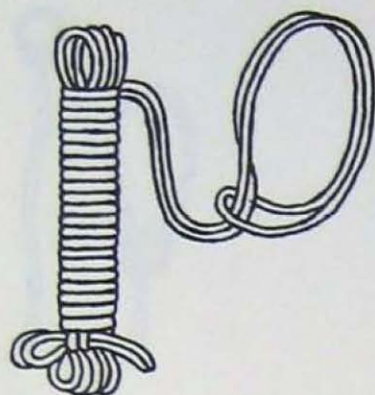
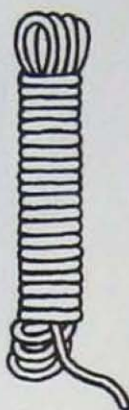
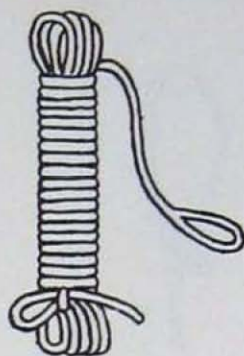
鈎縄

假蛇口

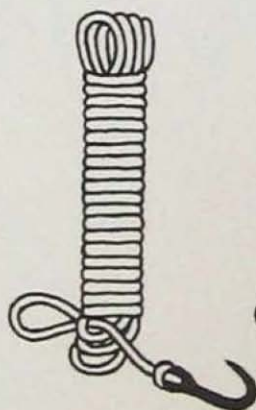
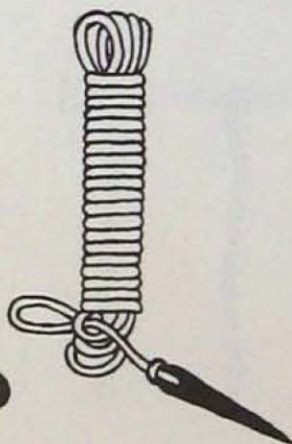
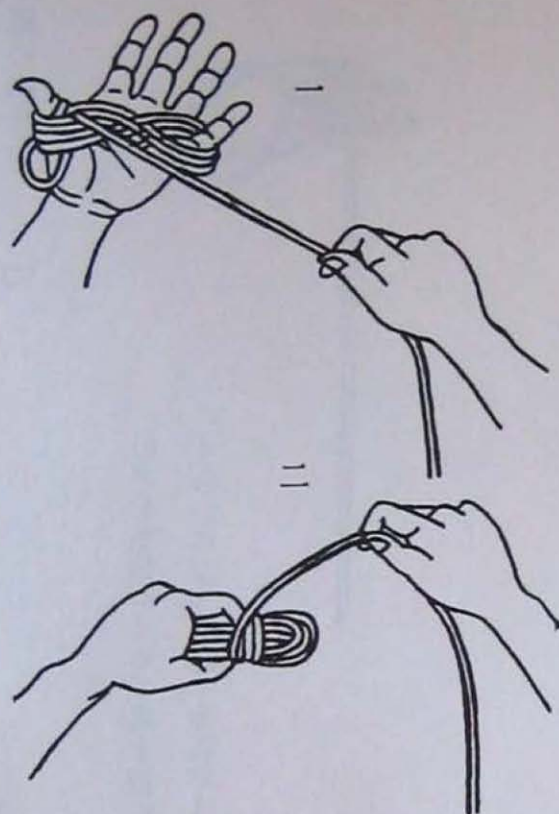
折掛縄

鐶縄

鐶縄は縄走りよきを調宝とす。

分銅縄
早手錠

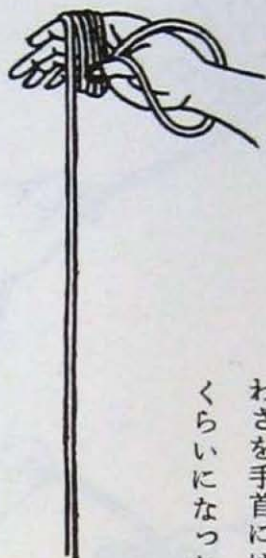
針縄

針縄は具足の威毛を針にて縫通し縛るためなり。

捕縄畳様種々
本縄用
本縄用
本縄用
早縄用
早縄用
早縄用
早縄用

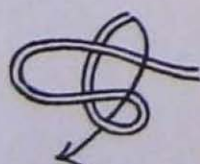
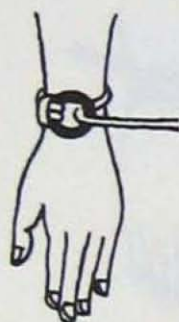
早縄用

早縄用

捕縄の巻き方　㈠　(早解縄という)

左手親指に蛇口を一巻してかけ、縄を小指に回しかけ、次にまた親指に回しかけるようにしてかけ、縄の余端が約五尺くらいになった時、これをはずして縄を胴体に巻きとめる。

捕縄の巻き方　㈡

わさを手首にはめて縄を指に巻き込み、残りの端が片腕の長さくらいになった時、それをはずし、胴体を巻きとめる。

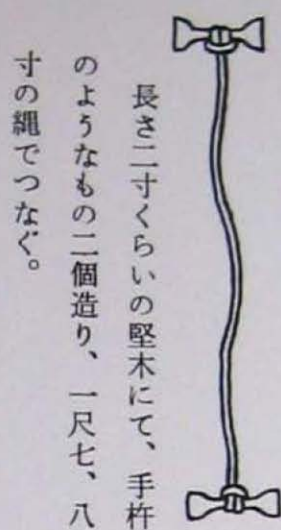
手首留縄の例

折掛縄

鐶縄

雲雀結び

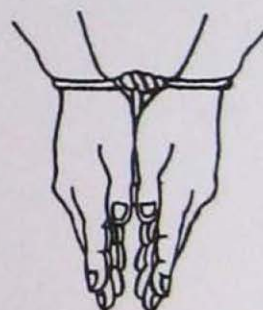
雲雀結びを相手の指にかけると容易にはずれない。

雲雀結び

早手錠

長さ二寸くらいの堅木にて、手杵のようなもの二個造り、一尺七、八寸の縄でつなぐ。

早手錠

引立用器　早手錠ともいう。

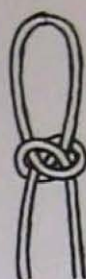
真鍮か竹で長さ二寸二、三分径三分くらいの棒状の物をつくり、それを長さ六寸五、六分の縄でつなぐ。

早縄同様小手を巻き、両手の間へ割込みを入れて締めた後を幾回も捻り、分銅を小手の間へ挟んで置く。

手首に図の如くかけて引き立てる。

結び方

男結び

別名　をろ結び　もろ結び　垣根結び　籬結び　疣結び　庵結び　技折結び　蠅頭

いがら結び　ろ結び

結び方　一　二　三

男結び　垣根結び

結び方　一　二　三

女結び

一名　めなご結び

結び方　一

二

三

片結び

左片結び

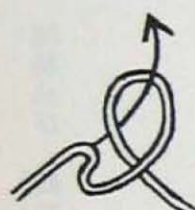
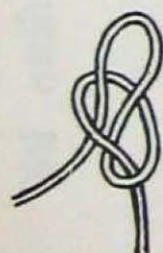
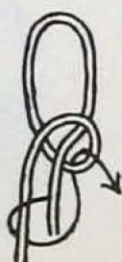
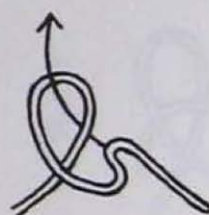
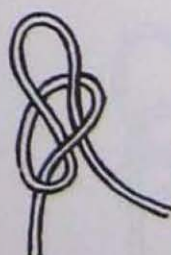
結び方　一

二

片結び

右片結び

結び方 一

二

相生結び

結び方 一

二

露結び

一名　諸結びともいう

結び方男結びに同じ。この結び方を左にしたものは女結びなり。

結び方　一

二

三

鳥の首結び

結び方　一

二

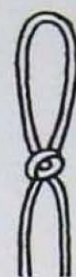
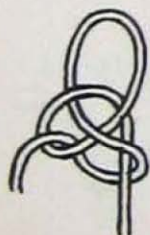
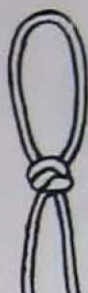
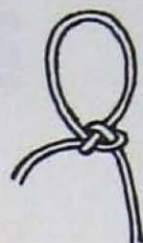
兎頭結び

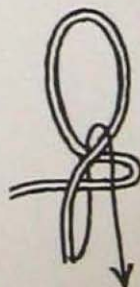
結び方　一

二

叶結び

結び方　一

二

五行結び　一名　機（はた）結び　つぎ結び

結び方　一

二

鵜の首結び　一名　かけ結び　かめくぐし　かもくぐし　かもさげ　わさぎかしつけ
かまがくし　印付　亀の輪

結び方　一

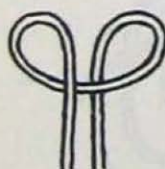
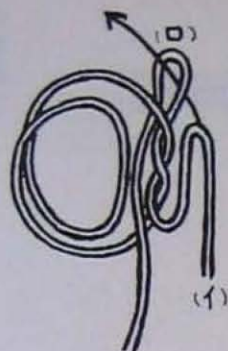
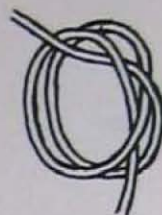
二

かもさけ

鎌がくし　鴨数

結び方

引解ひとえ結び

結び方

(イ)を(ロ)のわさに入れて引締め、さらにまた(イ)のわさに(ロ)をわさにして入れ、残りの縄を男結びにして引き留る。

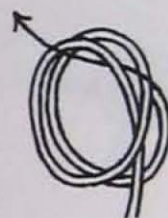
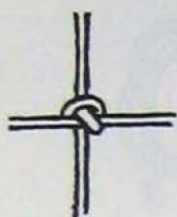
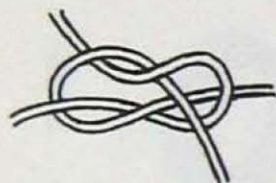
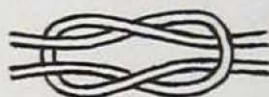
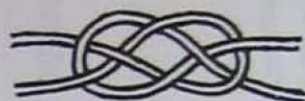
こま結び

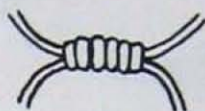
女結びともいう。

たて結び

男結びともいう。

機（はた）結び

結び方

真結び

こま結び　玉結び　こまか結び　結びきり　細結び　末結び　女結び　結びかけ

宝珠結び

思い結び　六頭結び

結び方一

二

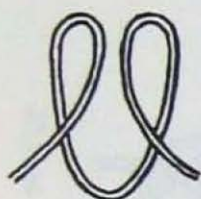
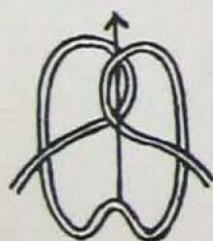
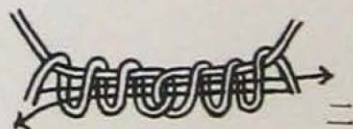
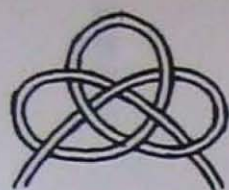
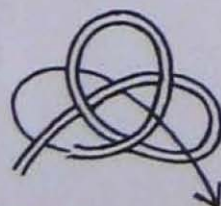
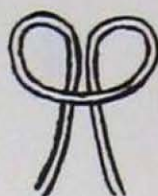
鳥の首結び

結び方一

二

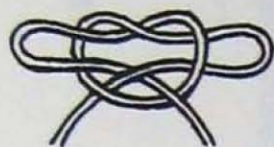
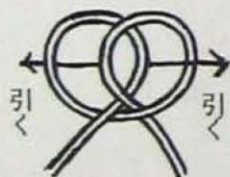
三

蜷結び（にな）

鎖結び

雲雀結び

掛結び

一名　異掛帯結び　思結び　二つ華曼　結び方一　二

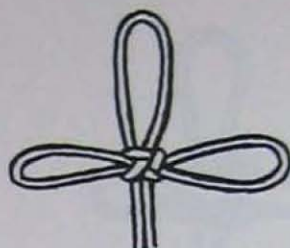
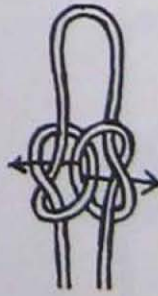
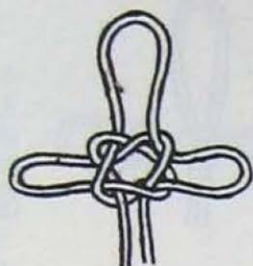
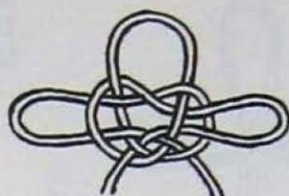
結び方一

二

総角結び

一名　とんぼう結び　襖結び

中の結びなるのでこれを入形総角という。

総角結び

中の結びなるのを人形総角という。

華曼結び

別名　入紐　道心結び

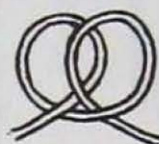
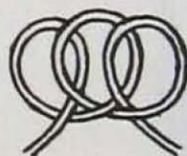
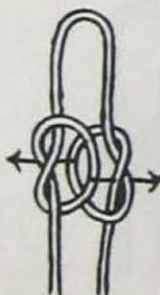
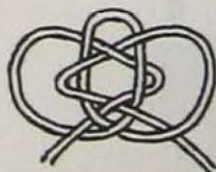
結び方　一

二

三

掛帯結び

結び方　一

二

手錠縄　**連鎖結び**

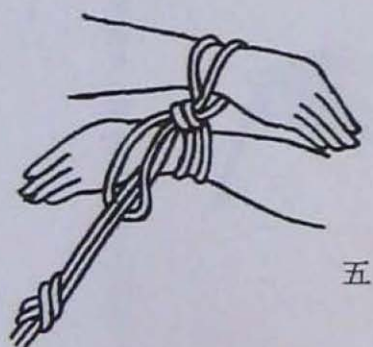
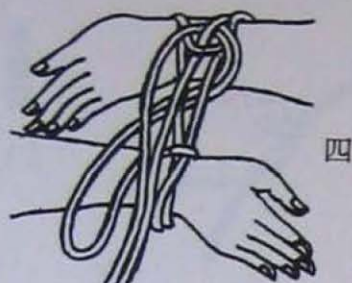
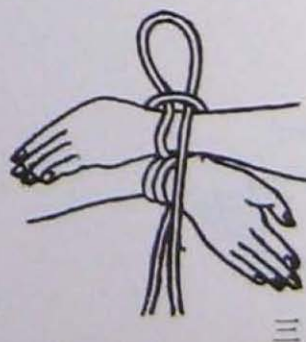
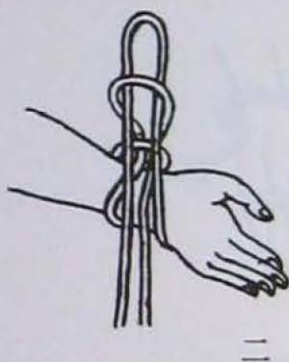
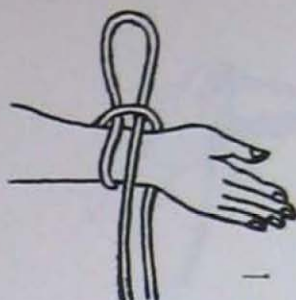
左の順序によってかける。

一

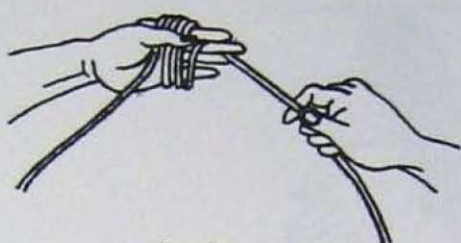
二

三

四

五

手錠縄 (一)

(蜻蛉結びともいう)

一二三の順序で四の結びを造り、両方のわさに両手を入れて締める。

一

縄を指先に三巻くらいして

四

二

両端の縄の中央を両方に引出す。

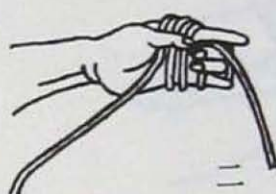
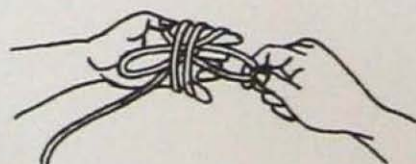
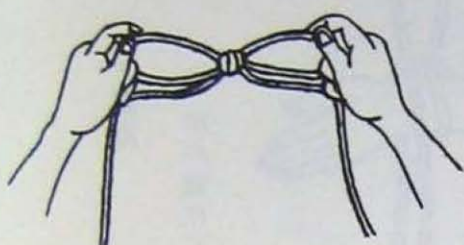
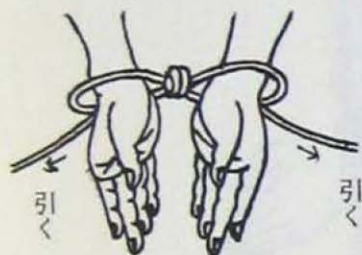
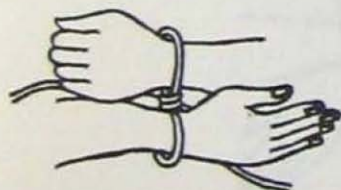
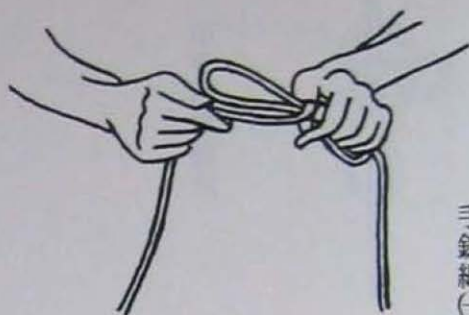
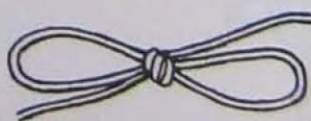
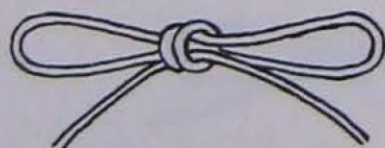
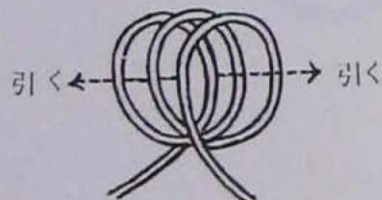
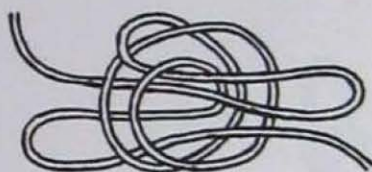
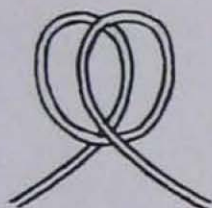
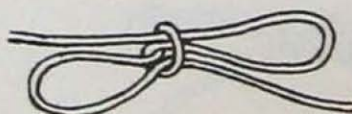
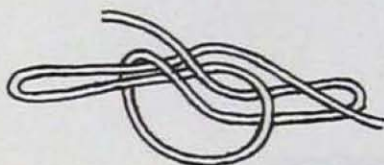
片手ずつ入れて両端を引く。

三

手錠縄

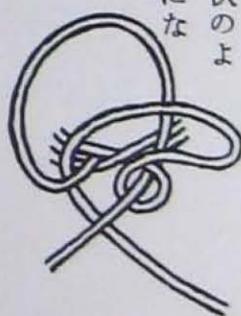
手錠縄㈠と同じ。

手錠縄

瓢結び

引き解き結び

男結び

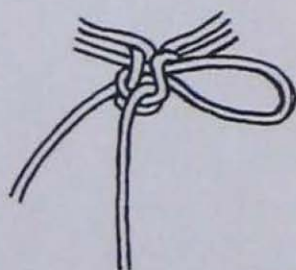
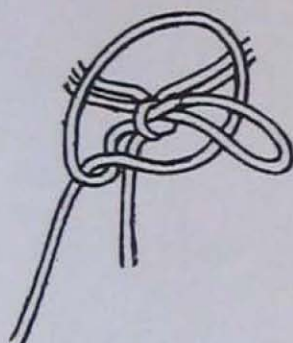
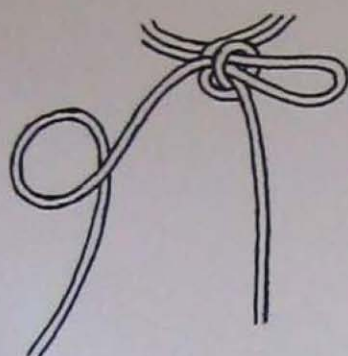
蜻蛉結び亀の輪等で縛ったその結び目は、その後の結び目の緩まぬように結び止めをする必要がある。それには男結びを用いる。

その結び方はどこでも締めた両端の一方を輪にして

輪にしない一方を輪にした方に締めて差し込み、輪にした方の一方を引くと次のようになる。

このようにしただけでは左の縄を引くとほどけるから、この縄を輪にして

右方の結び目にかけおさえて左方に引くと

このように結ばり、縄の両端いずれを引いてもほどけないようにする。

早縄 逮捕用 捕手用 掛様

捕縄術には、早縄と本縄とがある。

早縄は速縄ともいい、また、仮縄、仮縛ともいう。乱棒狼藉を働く者を速時制禦拘禁したり、犯罪人をとりあえず逮捕する場合にかける捕縛縄で、一名捕手縄ともいう。

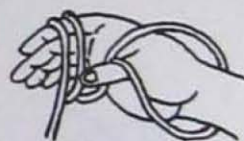
本縄は本式縄の略称で一名、本縛ともいった。すでに捕えた犯人を押送する場合、一定の縛縄方式によってかける縄縛法で、護送縄とも、っている。

この早縄、本縄を、流派によっては早縄本縄といわず、早縄は早縄でも、本縄を堅縄（かため）といっている流派もある。また、真行草に別け、真は本縄、草は早縄、行は本縄早縄いずれをも兼ねた縄縛法としているものもある。また、縄法に陰縄、陽縄というのがある。これはその縄掛けの方法を縄表より見て、上になるよう上からかけるのが陽縄、下になるようかけるのが陰縄である。

なお、縄形名称は流派によってそれぞれ違った名称が附せられ一定していない。同じような縄縛方法でも名称は多分に違っている。

捕方

敵の右手先を掴み、腕の節に左手を添えて組みふせ、直ちに我が右腕にかけて置いた捕輪を敵の右手に移しかける。

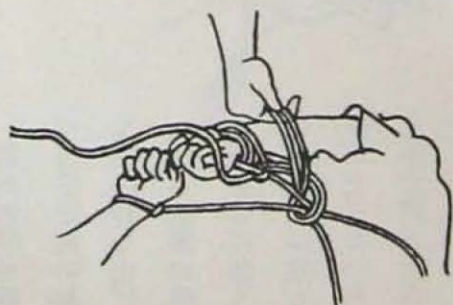
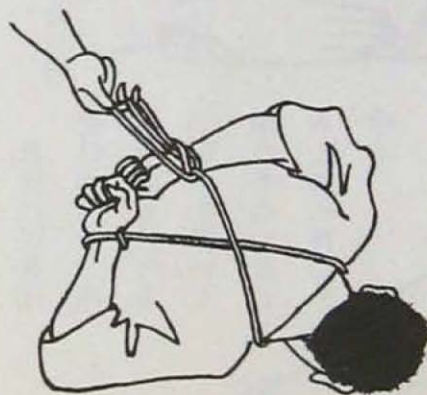
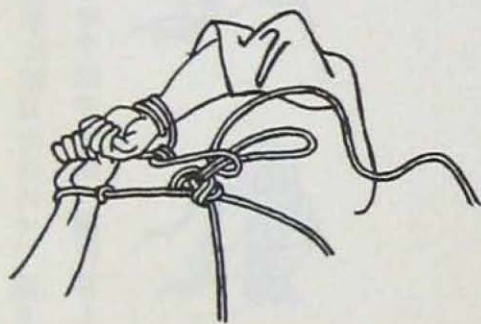
自分の右手に蛇口をはめて、残りの縄を掌中に束ねて持ち、縄をかける時すばやく敵の腕に移しかける。

捕われる者

捕える者

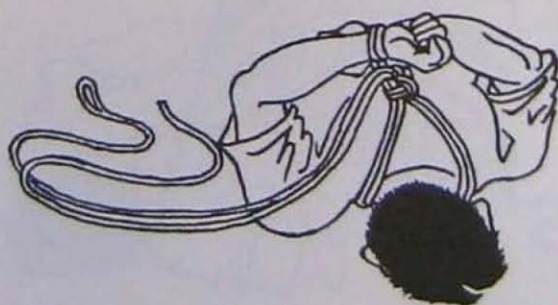
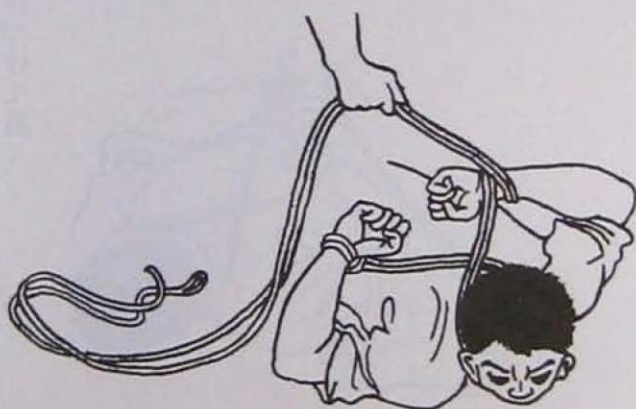
自分の手首に蛇口をかけ、残りの縄を袂の中に入れて置いて敵の手首を捉えると共に移しかける。

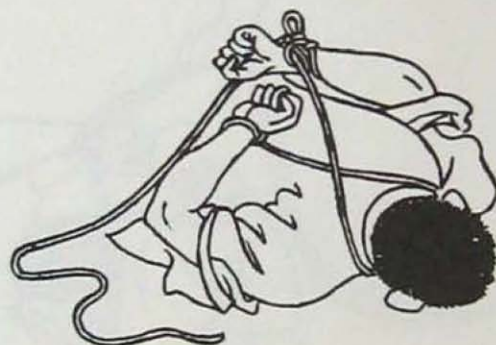
我が右手で敵の左手を図の如く逆に持ち上げると敵の体は左前方に傾く、我れは右手逆を締め上げながら左手で敵の肘を押えつつ前方に押倒し、縄をかける。

真蔭流早縄

捕輪を敵の右手先にかけたら、その縄端を直ちに左方より右方へ咽を一回りしてかけ、次に左手を折り曲げ、左手首に二巻きして結び、その縄端を一束して襟元七、八寸下で引き締めて結ぶ。

関口流早縄

捕縄を折半した真中を手首にかけ、縄端を左方より右方に首を一回りさして引き締め、左手を曲げて縄を手首に巻き付け、襟下八寸くらいのところで結ぶ。敵を倒し、その上に馬乗りに股がり、暴れる時は右耳下の急所独古を親指の先にて強く押し付け、左手を曲げて捕縛す。

立身流早縄

敵を俯伏せに倒し、左足にて二の腕を強く踏みつけ、左手首にかけた縄端を左肩口より咽へ回して引き締め、左手を曲げてその手首に二巻回して結ぶ。敵穏かなる時はそのままにしておいてよいが、もし乱暴をなす時は直ちに縄の残りを以て左右の内の足の親指一本を結びつけて置く。

早縄

元結留または紙捻留め

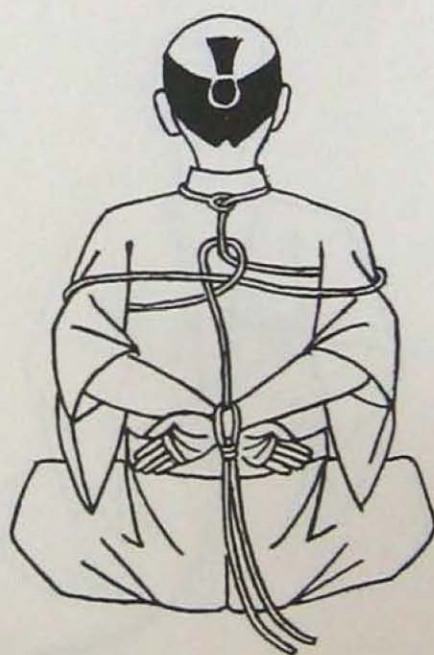
三寸縄、五寸縄というはこれなり。

紙縒留め

紙縒また元結を以て拇指二本の附根を縛る。

十文字

菱ともまわし縄ともいう

腕のところにかける縄の上よりかけるを陽菱といい、下にするを陰菱という。

籠手釣

鈎縄

襟の処に鈎をかける。

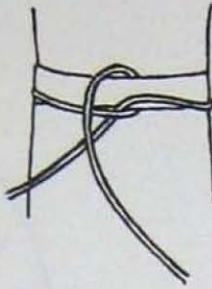
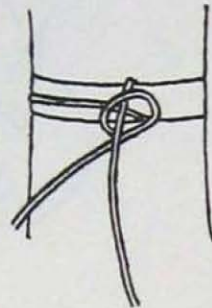
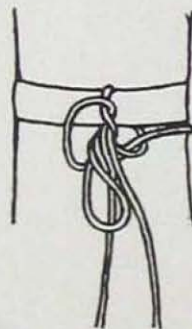
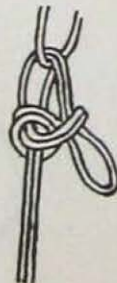
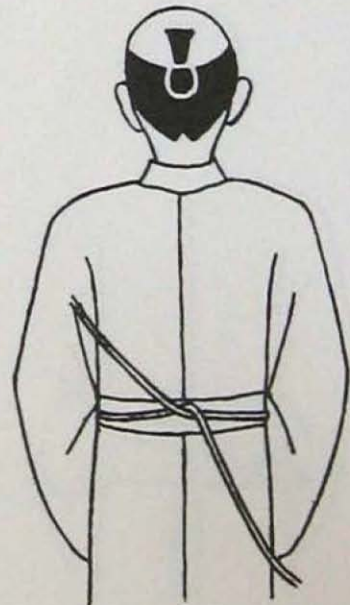
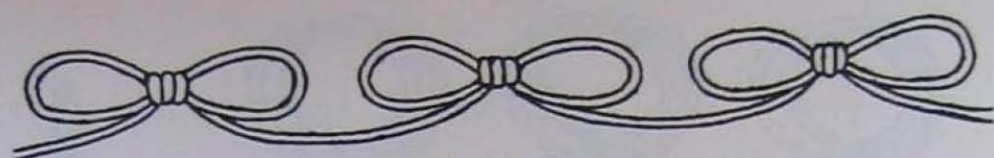
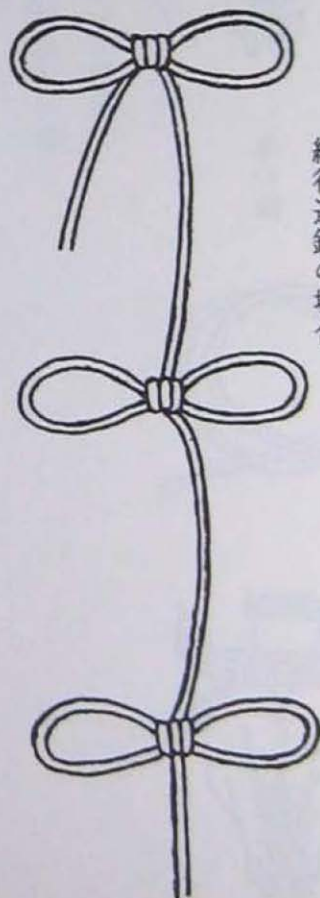
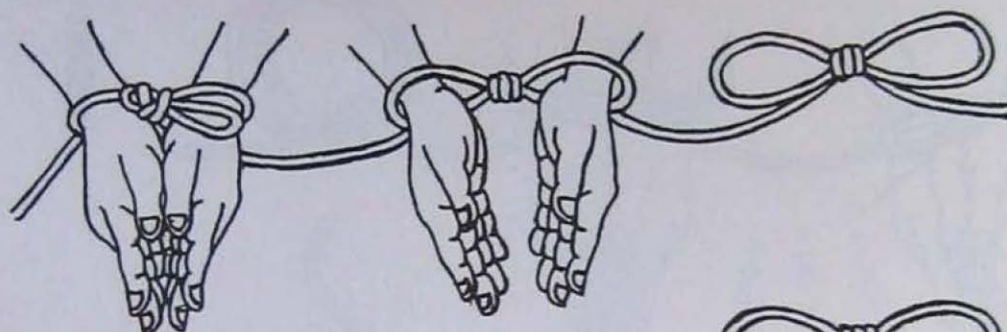
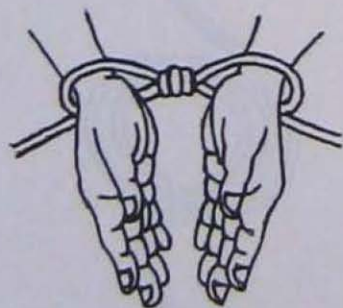
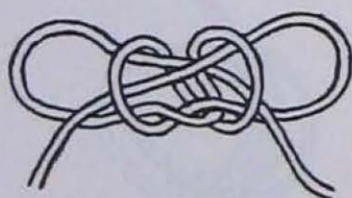
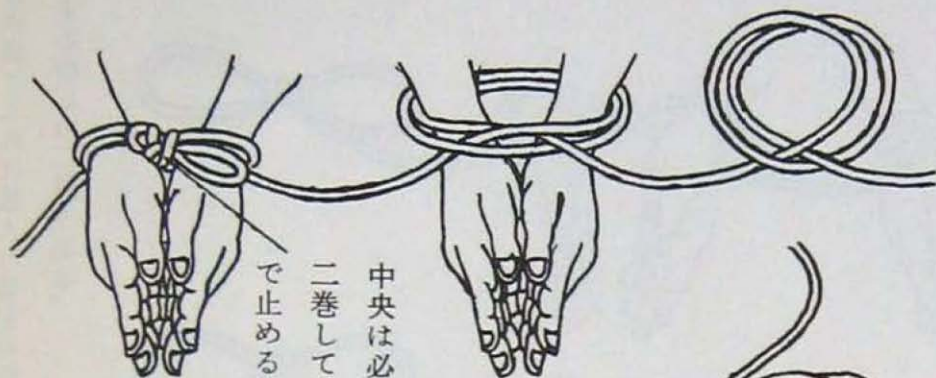
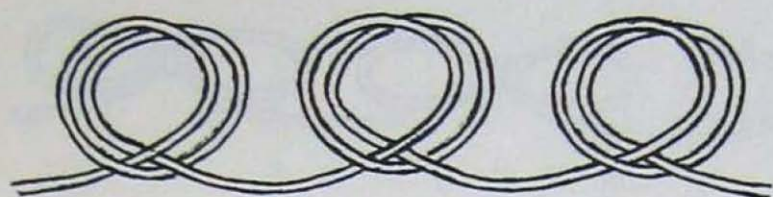
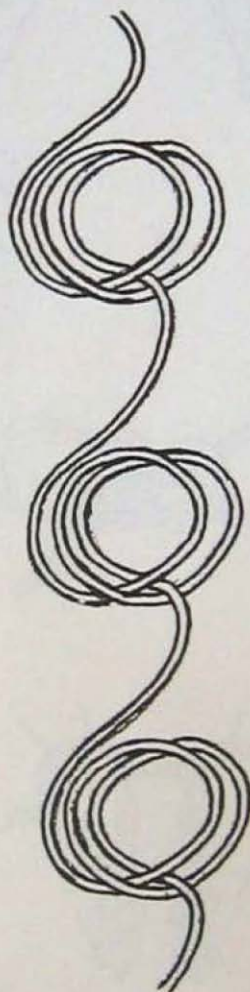
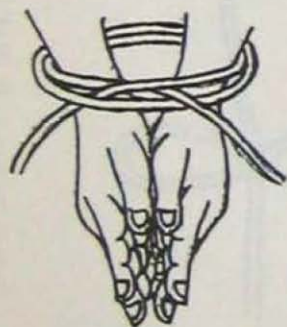
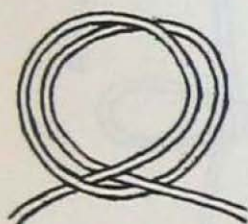
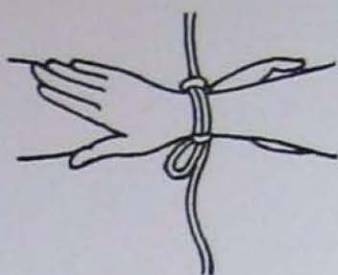
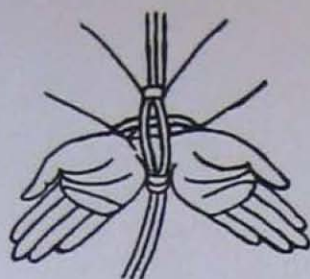
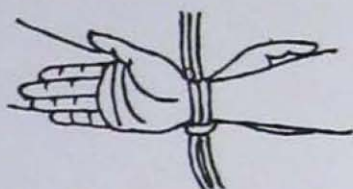
小手返し

襷捕

崩し両手捕り

後片手縄

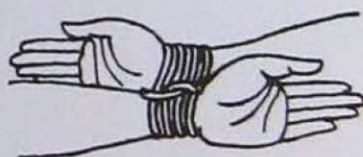
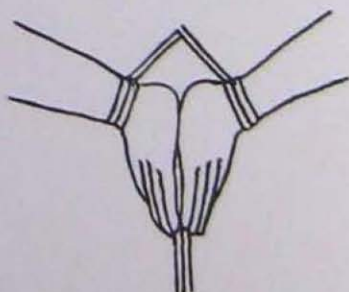
後手錠縄

腰縄

引致縄（連鎖縄）これは数人の者を同時に制縛する連鎖縄の方法で、これには蜻蛉結びを利用するのと、亀の輪を利用するのとの二通りある。

蜻蛉結びを用いて一人ずつ縛する場合でも、亀の輪を用いて縛する場合でも、一連ごとに必ずその中央を一巻二巻してしっかりと締め、これを男結びで止めてから、次々と施縄するようにせねばならない。

亀の輪による連鎖縄

手の留め方

手を抱きあわせにして留める。

前後に重ねて留める。

上下に重ねて留める。

合掌体にして留める。

十字態に留る。

本縄 押送用 護送用 掛様

十文字縄　これは雑人に掛ける縄なり。
七尋の縄を折半し真中を首に掛け、垣根結びに結び、その縄を引き揃え背の中程にて結ぶ。それよりその縄を左右一筋ずつに分け、先ず一筋で左上腕を鎌がくしに縛り、次に右一筋で右上腕を同じく鎌がくしに縛り、左右両縄端を一束にして上の輪に背に面した方より通し、帯の上にて一束にして乳をつくり、乳の方を下にして縄の端を小手の上にして手の甲と節との間に回し、乳を引き締め、夫より縄を一筋ずつに分け、一筋を左右合せた手の間に引回して下の方にて垣根結びに結ぶ。

上縄　これも雑人に掛ける縄なり。この縄の形上の字に似たる故に上縄と名付けられた。
七尋の縄を折半して真中になるところを咽にかけ垣根結びに結び、その縄を左右に分け、一筋を以て先ず左上腕を鎌がくしに縛り、次に右上腕を同じく鎌がくしに縛り、その縄端を互い違いにとって咽と腕との間の縄へ引き掛け腰にて一束にして引きくくりの乳を造り、この乳へ縄の端を一束にして通し、乳を引き締めて小手を留る。

割菱縄
九尋の縄を二つに折り、その折った中央のところを左手に持って右手で二重のところを一束に持ち、被縛者の右脇下より後へ回し、左の肩に出し、内一筋を以て右脇の折り目の輪に通し、輪を胸部へ引き揚げ、残りの一筋は肩をはずし、被縛者の左脇下へ後の方より通し、その縄端を背中へ筋違いにかけて右肩へ執り、左折返しの輪へ通しこれも胸部へ引き揚げて左右を締め寄せる（後は襷を掛けた如くになる）。偖胸部に括り寄せて垣根結びにしてその縄を抜き通さず乳を造り、乳になしたる縄を一重巻いて締めれば乳ずれることなし、それより縄を左右に分け腕に掛け、左右の縄を束ね裡より外へ一束に通し

て小手を留る。

この縄は常は雑人に用うるが、旅押国渡にも用ゆ。食事の時小手を解き縄端を乳に結んで置く。

違菱縄　この縄も雑人に掛ける縄なり。

七尋の縄を折半し、その中央部を咽にかけて垣根結びに結び乳を造り、縄を左右に分け、左右の順に腕を縛り引揃え乳に通し、腰にて一束に引括りの乳を造り小手を留る。

下廻縄　この縄は剛力者に掛ける縄にて常人には余り用いないが、両足を縛って歩行を止むる縄であるから、時によって常人に用いてもさしつかえはなし。

七尋ないし九尋の縄を用う。掛け方は折半せる縄の真中を首に掛け、前にて垣根結びにして乳を造り、縄を左右に分けて左右の腕を鎌がくしに縛り、その縄を臍のところにて一束に結び、引括りの乳を造り、左右の足を組ませ、上なる縄を一束に乳に通し、組んだ両足を締め小手を留る。そしてその縄を股間を後へ引貫き、腰にて一束に結び、縄を分けて左右の脇の下より腹部に回し、また一束にして乳へ引き通し小手を留る。

返し縄　出家にかける縄なり。

掛け方は割菱と同じく脇の下より襷掛けにして括り乳を造り、縄を左右に分け、左腕右腕と鎌がくしにして左右の縄端を一束に乳の裡より外へ引き通し、帯の上にて小手を留る。

出家は袈裟を外して縄を掛けるのが定法である。また衣も脱がせる方がよく、袈裟を脱すれば僧衣も共に脱するものと心得るべし。

塵の羽返し縄　これも出家に掛ける縄なり。

返し縄の如く腕を縛りその縄端にて前腕を縛り、その端を乳に通し小手を留るなり。

注連縄　この縄は社人に掛ける縄なり。その形が注連に似ているので名付けられたもの。

掛け方は返し縄の如く、まず襷に掛けそれを襟に括り寄せて、垣根結びにして乳を造り、次に縄を左右に分け、一筋にて左の前腕を鎌がくしに縛り、また一筋にて右の前腕を鎌がくしに縛る。そしてその前腕の縄を似て左の上腕を鎌がくしに縛り、また右も同じく鎌がくしに縛り、この縄を一束にして乳に引き通し、小手を留める。

笈擢縄　これは山伏に掛ける縄なり。

掛け方は前の如く縄を襷に掛け乳を造り、縄を左右に分け、左右上腕を鎌がくしに縛り、左右共に乳を造って置いてその縄端にて左右の前腕を鎌がくしに縛り、左の縄端を右の上腕の乳に通し、右の縄端を右の上腕の乳に通し、これを中の乳へ一束に裡より外へ引き通して小手を留るなり。

羽付縄

対決等の場合に掛ける縄で、小手を留めない。これは時に貴人の前に出し手を突き挨拶させねばならぬこともあり、また食事の場合自由に双手を動かしめたり、縄付のまま馬に乗せねばならぬ時、鞍の前輪に取り付かせるためである。

縄の掛け方は前と同じく襷に掛け、肩に括り寄せて垣根結びに結び、それより左右の腕を鎌がくしに縛り、それを腰にて一束に結び左右へ分け前へ回し、打ち違えにより後口へ回し腰にて垣根結びになし、縄端を腰に引き通して置くなり。

乳掛縄　この縄は貴賤に寄らず婦人に掛ける縄なれば乳掛けと名付けたのである。

七尋の縄を折半し、その中央より少し片々へよったところを採って前方より婦人の右腕を鎌がくしに縛り、大振(おおぶり)の乳を造り、次に長い方の縄を婦人のうしろへ一文字に回し、その縄で左腕を同じく鎌がくしに縛りこれにも乳を造り、次にその双方の縄端を脇の下よりうしろへ回し背中にて打ち違いにとり、肩より双方の乳へ通し一束に結び、三寸くらい下にて一束に引括りを造り小手を留る。

足固縄　この縄は船中に用うる掛け方で、また剛力者にも用いた。

被縛者のうしろより彼の左上腕を鎌がくしに縛り、長い方を咽にかけそれを右へ回し、右上腕を鎌がくしに縛り被縛者の前へ回り右の一筋を採って左の股を鎌がくしに縛り、また左の一筋をとって右の股を同じく縛り、次に足を立てさせ締付け双方の縄を前にて打ち違えに採りうしろへ回し、そのまま咽へ掛かりたる縄へ通し背中にて一束に結び、その端に一束の引括りを造り小手を留るなり。

斯の如く縛る時は下廻縄と同じく立つ事も叶わざれば剛力者に用うるも大いによし。

二重菱縄　この縄は士に掛ける縄なり。

九尋の縄を折半し、その縄の真中を後襟に掛け、垣根結びにして乳を造り、縄を左右に分、右腕を鎌がくしに縛り、乳を造り、次に左腕を同じように縛って乳を造る。そしてその左右の縄を一束にして引括りを造り、左右の手を合せ鎌がくしに留め、それより縄を左右に分け、臍下より腰部のうしろへ回し、打ち違えにとり、前帯の上部で垣根結びにしてそれより左右の腕の乳に通し、縄端を一束に胸部の乳に通し、その乳に掛けてからげて置くなり。

この縄法を後に掛けるのも同じことである。途中連行の時は衣類の背に穴を明け縄を貫し、乳にからげて連行することもある。

留り縄　この縄は縄抜けの巧みな者にかける縄法である。

九尋の縄を折半してその中央を咽に掛け、垣根結びにして乳を造り、それよりその一筋を以て左手首を鎌がくしに縛り、次に右の手首を同じく縛り、一束にして乳に引き通し、帯の引にて一束に引括り、被縛者に左右の指を組ませ、輪を掌の方にして縄を組合せたる指の節の間より掌の方へ回し、輪を通してそれを括り、その輪を左右に分け、指と手の甲の間へ上より割回し、下の方にて垣根結びに縛り、帯へ通してからげる。

斯の如く前より掛けるもよし。

切　縄　この縄は首を斬る時に掛ける縄なり。

九尋の縄を折半し、一束のままにて咽を縛り、三寸ほど下ったところで一束に結び、その縄端を引き抜かず長目の大きな乳を造り、その乳を左右の上腕に掛け、脇の下より出し、その乳を背中にて一束に合せ、そしてその引き残した縄をこの乳に通し、その輪より鎖に組みその端にて小手を留るなり。

首を斬る時は咽の縄を解いて首を斬らせ、小手を解き縄を引けば鎖は解けて、一度に縄が外れる。

なおこの切縄は、囚人を入檻させる時にも用うることがある。

介　縄　この縄は囚人の受渡し追放放免等の場合に掛ける縄なり。

九尋の縄を折半し中央輪の方を左手に採って咽に掛け、右手の持つ方を一束の輪に通し、一尺余り引き出し（引抜くにはあらず　輪にして引き出すなり）それより輪になったところを左右に分け、上腕の上より前へ回し、その端を脇の下より後へ出し、この輪へ背に残した一筋の縄を通し、一重の鎖を三ずつ組み、端を一束に寄せ、背中へ二重の鎖を三つ四つ組み、その端にて小手を留るなり。

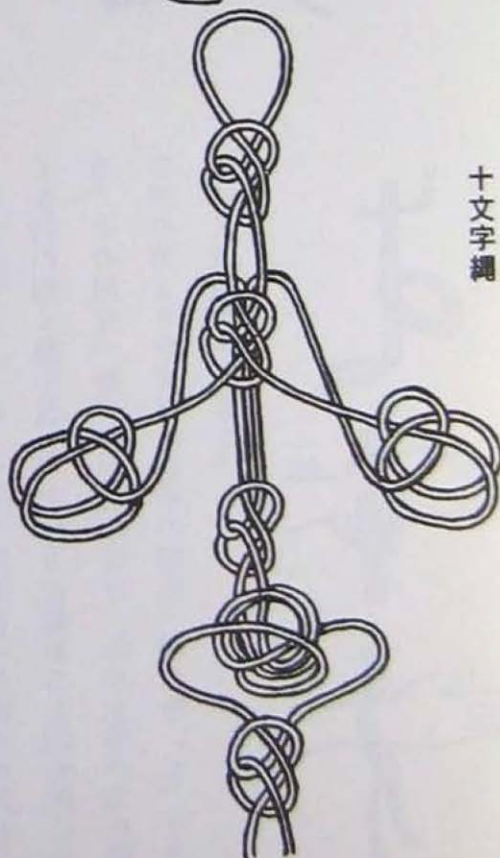
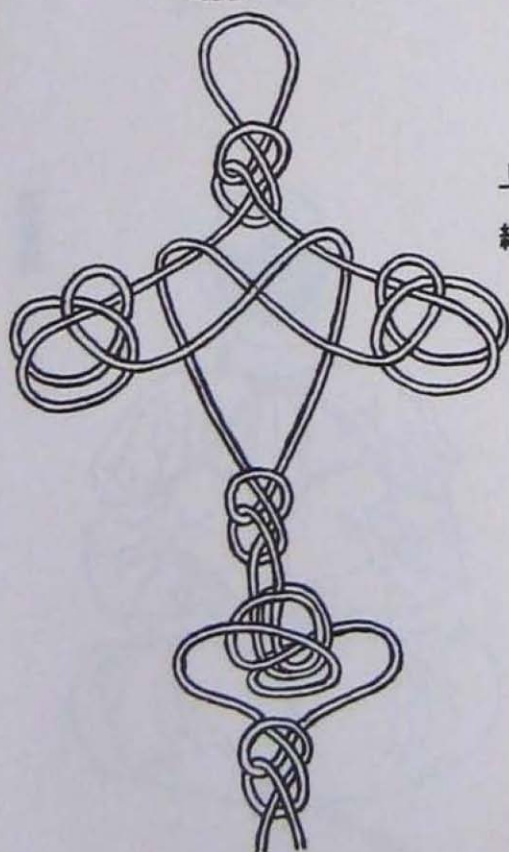
縄を解く時は小手を解き縄を引けばずるずると咽の輪まで解ける。

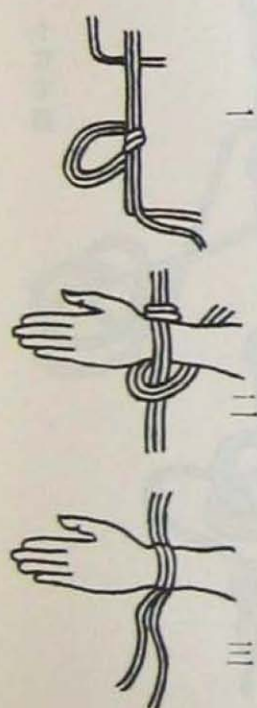
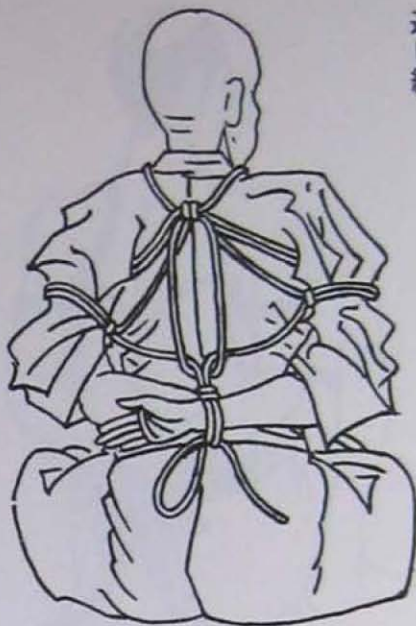
縄抜けを企む者は、縄にかかる時全身を固くし、四股とくに肩肘等に力を入れて縄を掛けさせ、後ち全身の力を抜いて柔かにして縄に緩みを造り、どこか一ヵ所抜くようにする。そして一ヵ所抜けることができると後は容易に抜けられるものなれば縄を掛けるものはその点をよくよく心得るべきことである。

上縄（かみなわ）
十文字縄
上縄（かみなわ）
十文字縄

割菱縄（わりびしなわ）

下廻縄（げかいなわ）

違菱縄

小手の留めよう

小手の留めようは、すべて図の如く引括りの乳をつくり㈡の如く縄を通し、引括りを締めると㈢の如くなる。その縄を一筋ずつ左右に分け、わが右手の方の縄を左の方より合せたる双手の間に一回し巻いて、下の処にて垣根結びに留る。

返し縄

注連縄（しめなわ）

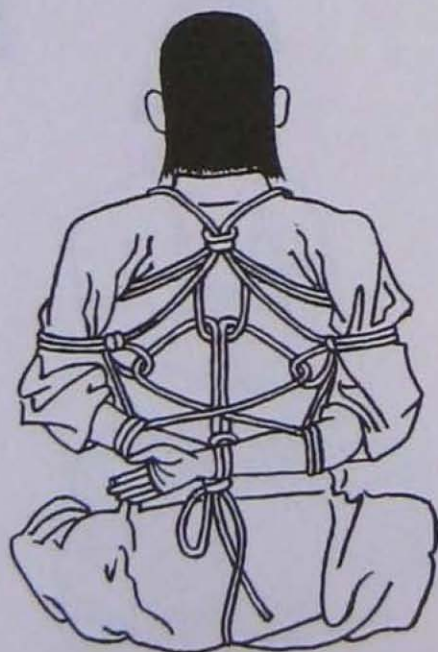
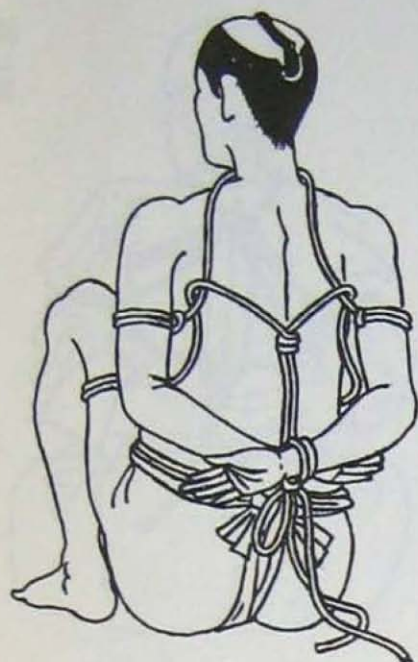
鷹の羽返し縄（たかのはがえしなわ）

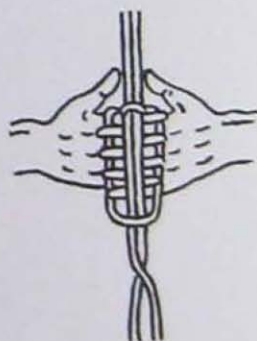
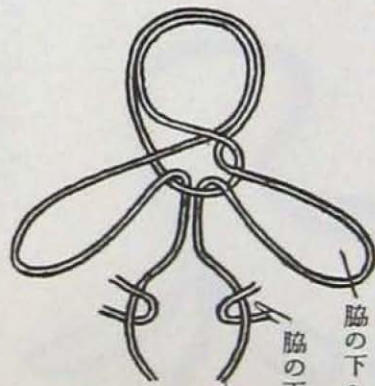
笈摺縄

羽付縄

足固め縄

乳掛縄

二重菱縄

この輪を左右の腕へかけ、脇の下より引き出し、背中にて一束にして縄端を図の如くして通し、鎖あみとし端にて手を留める。

介縄（たすけなわ）

これを片々ずつ鎖二、三を組み、また真中にて一束にして鎖三、四を組み、その端で小手を留める。

一達流

一達流

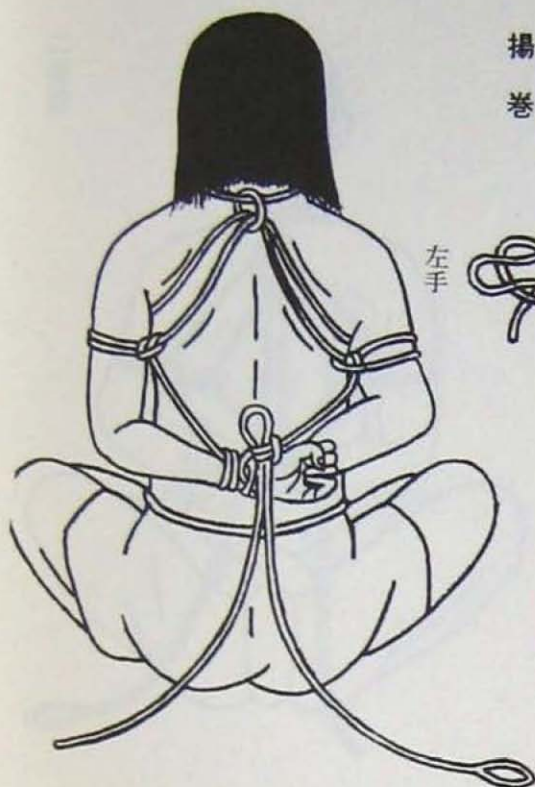
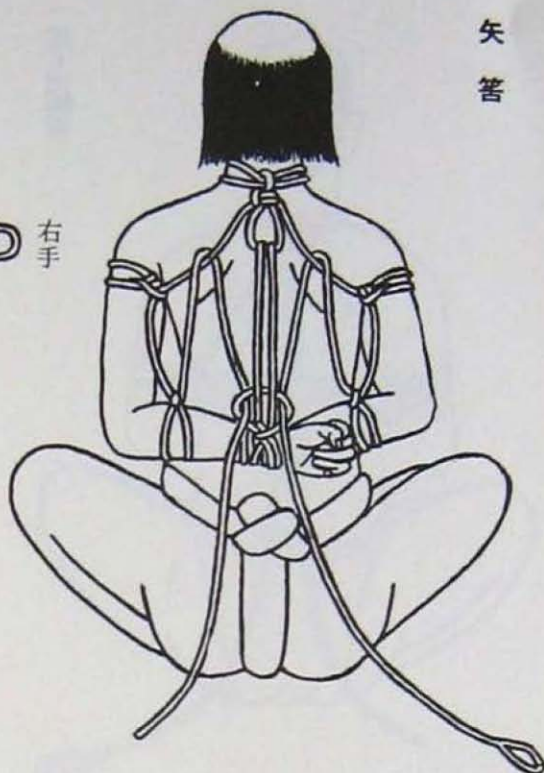
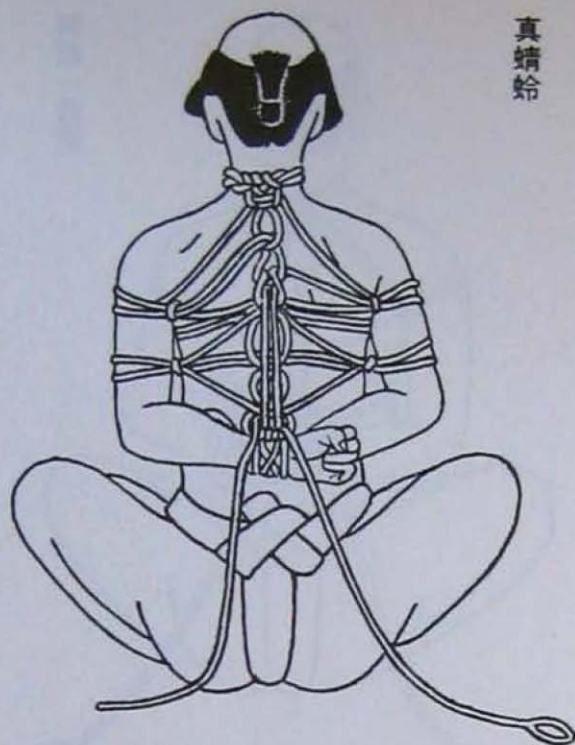
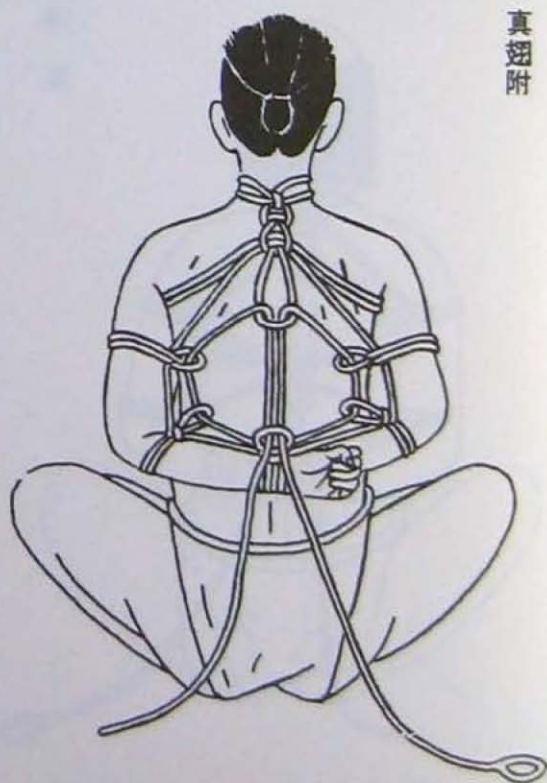
一文字早
翅付早
一重菱
真翅附
矢筈
角違
真蜻蛉
八方搦
櫓菱

菱早
菱
十文字
馬上翅附
蜻蛉
真二重菱
真亀甲
櫓菱

十文字早
十文字
二重菱
亀甲
揚巻
真翅附
胸割一重菱
切縄

十文字
一文字
小手留口伝
翅附
菱

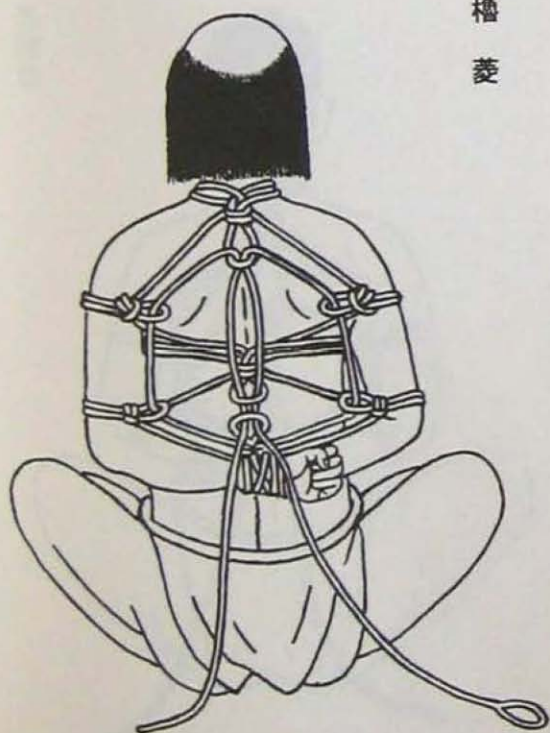
菱
一重菱
十文字
十文字

馬上翅附
二重菱
亀甲
直翅附

揚巻
左手
右手
矢筈
角違
蜻蛉

真蜻蛉
真二重菱
真亀甲
真翅附

胸割一重菱
八方搦
胸割一重菱
櫓菱

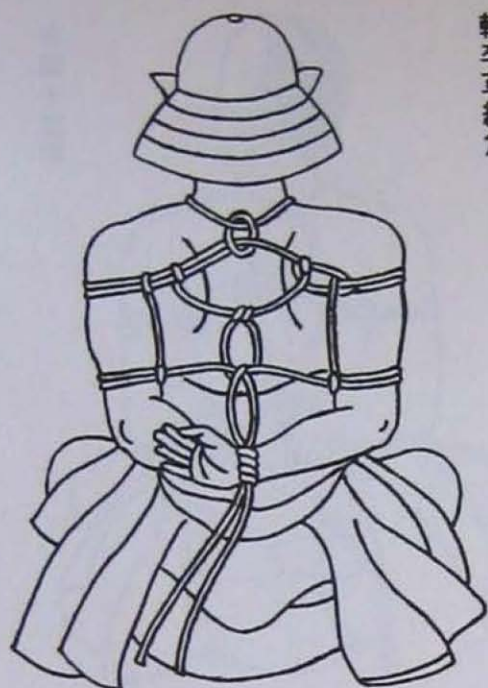
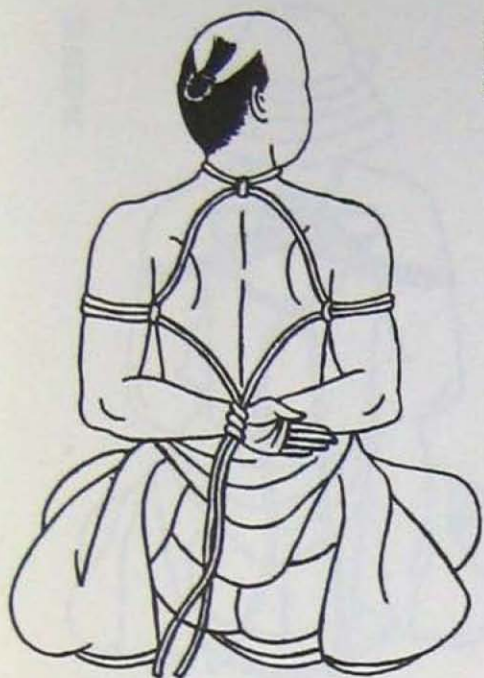
切縄

櫓菱

方圓流

方圓流

将真総角
本陽十文字
木陰菱
早陽菱
早猿結
引渡鎖掛

士行総角
本陽十文字陽
早陽十文字
早陰菱
早蜘蛛絲
長袖鱗形

軽卒草総角
本陽菱
早陰十文字
早蟹緘
先生形仕込
女五方

軽卒草総角
将真総角
本陽十文字
士行総角

本陽十文字
本陰菱
本陽菱
早陽十文字

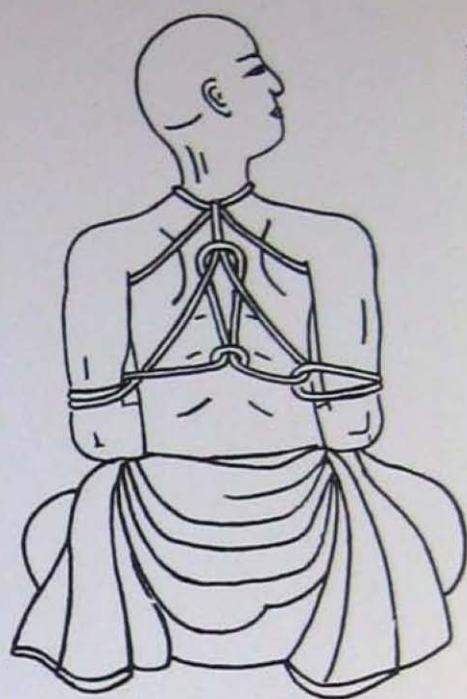
早陰菱
早陰十文字
早蟹縅
早陽菱

早猿結び

先王形仕込み

早蜘蛛絲

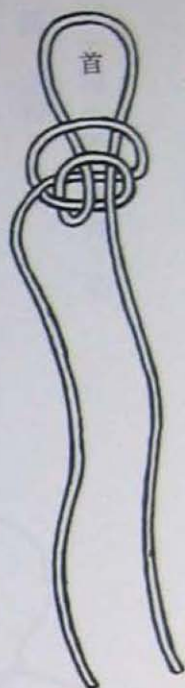
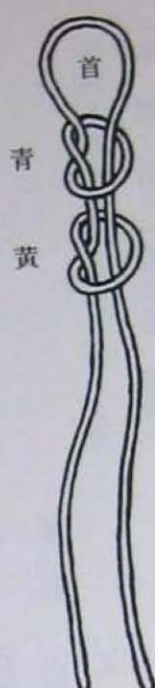
引渡鎖掛け

長袖鱗形

制剛流　梶原流

制剛流縄之巻又玄集

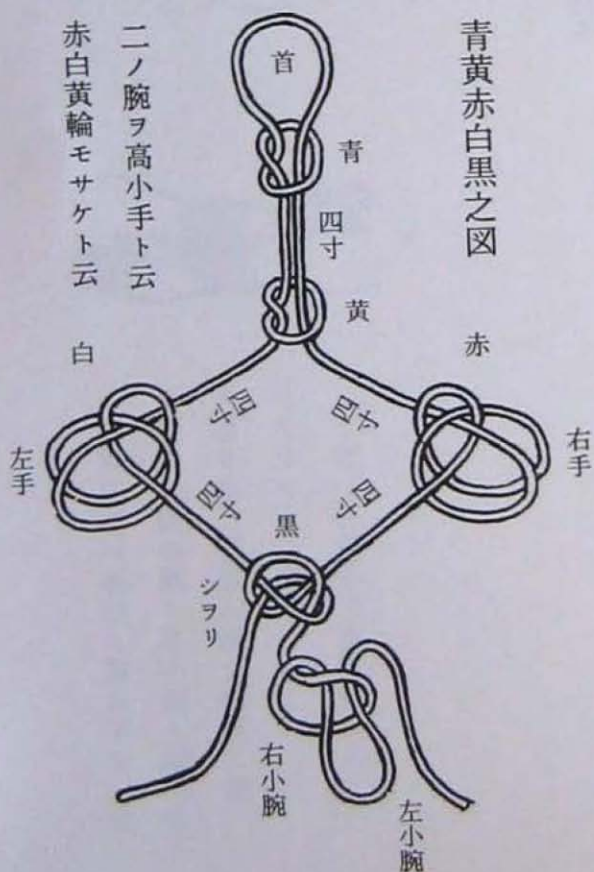
五法
十文字
籠破
羽替付

落花
村雲
船中
微塵

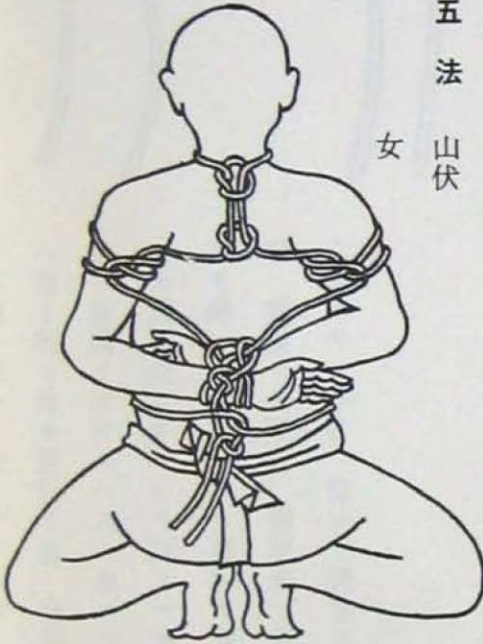
千鳥
六道
四海

下図　縄ノ図中四寸トアレドモ　普
通ノ者ニハ強過ギル故五寸位ガヨイ
四寸ニテ一時程置ケバ死スト云

本縄ハ長サ一丈八寸　太サ　コノ如シ　余太キ
ハ締リ悪ク細キ程締リ吉　血縄上々也　白縄ニテモ不
苦　血縄ト云フノハ人ノ血ニテ染メ能シゴキ置クモノ
ニテ是塩気ツカズシテ弱リナキ故上々ノ縄ト云也　渋
ニテ染メシ縄ハコハク解ケテ悪シ　血白ノ縄ニテ縛ル
時ハ赦免シテ不苦　極悪者ハ青縄ニテ之レヲ縛ス但血
之縄ニテモ不苦一筋ニテ幾度モ用ヒラル

青黄赤白黒之図

首　青　四寸　黄　赤　右手　四寸　四寸　四寸　四寸　黒　左手　シヲリ　右小腕　左小腕

二ノ腕ヲ高小手ト云
赤白黄輪モサケト云　白

五法

百姓
町人
中間

上図五法ハ赤白ノ縄余リヲ　黄ト赤トノ間の縄ノ下ヘ図ノ如ク取テ黒ヲ結ビ二重に廻シ割縄ヲ懸上ヲシヲリニ結ブ

下図ハ二重回シ割縄裏ノ図

下図五法ハ赤白ノ縄ノ余リヲ直ニ取　黒ノ結ビ一重宛廻シ割縄ナクシヲリニ結ビ其余リヲ腹ヘ廻シテ置ケバ　手上ヘ揚ラズ　長袖ノ類　比縄ガヨイ

下図ハ割無縄裏ノ図

五法

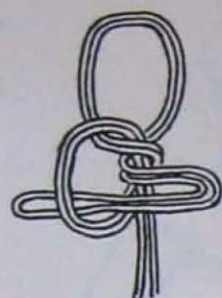
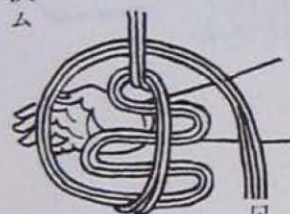
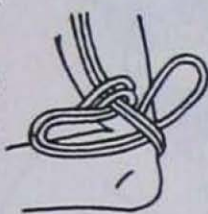
坊主
山伏
女

落花

落花斬縄

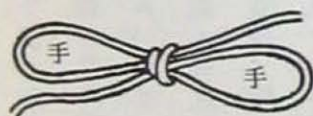
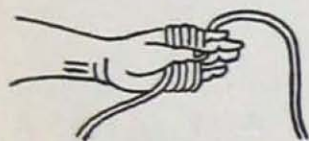
是下前如図

是ヨリ下前如図

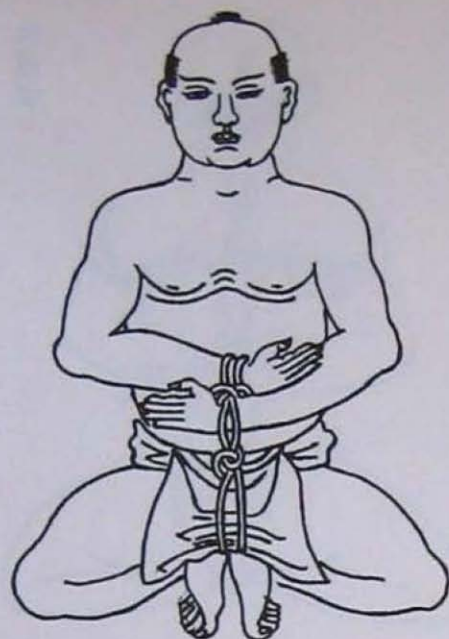
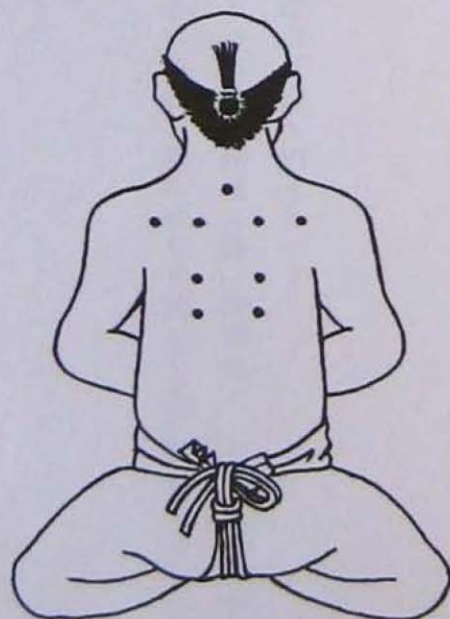
落花首シヲリ高手小腕

此前ヲ丸合紋ノ所へ挾ム

落花ヲ渡ス人ニモ之ヲ用ユ　其節ハ血縄カ白縄ニテ縛渡ス　但侍ハ咽ニ紙ヲ當ル也　請取人ノ前ニテ咽青ノシヲリヲ解キ赤白小腕ノ三ヶ所〇印ノ所ヲ右ノ手ニ持チ引時解ル其時衝放シ渡ス請取人取外シテモ渡ス者ノ不調法ニハナラザルモノナリ夢々青縄ニテ縛ル可カラズ　斬縄ニモ之レヲ用フ其時ハ青縄ニテモ苦シカラズ　落花成敗ノ時ハ首青ノ縄丈解キ首ヲ切縄先ヲ中間ニ持テ両足トモニイカシ膝節ノ先ヲ一鍬堀テ置ク首切レバ前へ伏シ血カ、ラズシテ吉　其時赤白小腕ノ三所ヲ解ク　縄払イ切縄ハ侍自身払フ可カラズ是ハ雑色ノスルコトナリ但家来ナドニサセルハ不苦　青縄デ縛ル可シ又血白縄ニテモヨシ　五法デ縛リ成敗スル時ハ縄ハ切捨テ不苦　切縄ハ危キ縄デアル故切節掛ルガヨシ　若前ヨリ懸ズシテ叶ハザルトキハ縄ノ外三尺手拭カ短縄ニテ腰ヲ緩ク結ンデ置ク　若走ル様ニ思フ時ハ両足ニカケルソレハ引倒スタメデアル

千鳥

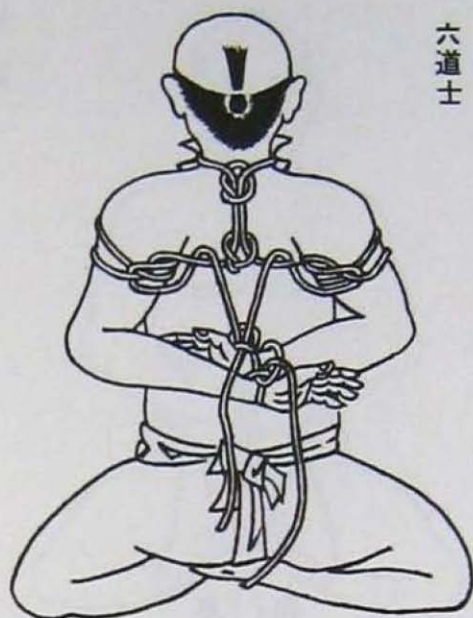
十文字大秘事

小腕縛様何れも同事なる故
略之

早縄懸様右ノ手へワナヲカケ置懐ノ内ニテ右袖へ納
置右ノ手ヲ項へ当　彼右ノ手ノワナヲ首へ掛ル也

早縄仕舞置様図

村雲縄サハキ図

上図　村雲　後ニテ縛ル時ハ前ヘ廻スニ及バズ　褌ヲ能シメ三ツカラミニ能結ビ付テ置ク　褌ヲシメル儀口伝ナリ

次村雲　前ニテ縛ル時ハ股ヨリ後ノ方ヘ廻シ褌ニ結ビ付ル　後ヘ廻サズニオケバ口ニテトクカラデアル

六道士

六道士ハ赤白ノ縄ノ余リヲ黄トノ間ノ縄下ヨリ上ヘ取リ黒ノシヲリ仕咽計ニ紙一帖程当ル　是レ縄目ノ恥辱ユヘ如此五法ノ内ト云ヘリ

籠破

籠破ハ小腕ヲ縛腹ヘ廻シ赤シヲリヲ結其縄ノ余リヲ後ヨリ股ヘ通シ前ノ方ニテ帯ヘ通シ扱畳能真中ニ穴ヲ明縄ヲ通シ下ニテ留ル或ハ後ヨリ直ニ下ヘ通シ留テモ吉　何縄ニテモ如斯ナル故ニ図を略ス

船中

右船中何縄ニテモ腹ヘ廻シ船張ヘ結付置也依図ヲ略ス

四　海

四海ハ早縄ナリ　足ノ大指ニ如図結付ル　両足結テモヨク又縁の端ニテモ結付ルナリ

羽替付

右羽替付ハ戦中ニテ以弓弦縛早縄也秘事

微　塵

右微塵夫〻ニ縛分扐返シ縄ニ如図仕然モ急成時ハ青黄ノワナヘ不及通直ニ返シテ吉大秘事

猪谷流縄縛図

一　早　縄　長さ六尺四寸　天二十八宿　地三十六儀を表せり　不動縛りの縄より初云掛様　蜘蛛の口伝
一　五　法　常に掛る縄也　寸法七寸　但縄の長さ一丈二尺八寸　陰陽結口伝
一　千　鳥　下臈に掛る縄也　寸法七寸　高手に口伝　首陰陽結　七曜の星を表す口伝
一　村　雲　児法師に懸也　寸法の伝　首根に陰陽結　高手に口伝　首根に紙巻口伝
一　十文字　諸囚人に懸る也　四方四寸海を表せり　但陰陽結東西南北口伝
一　船　中　船中にて掛縄也　小手前後口伝
一　籠　破　極意の縄也　陰陽結　高手小手に口伝　尤小手縄に返縄口伝
一　六　道　侍に懸也、寸法六寸首に紙を巻へし陰陽結有高手習　是地獄　餓鬼　修羅　人天を表す
弓の弦にて懸る口伝
一　微　塵　是は甥懸武者鎧の上より懸縄也　八曜九字十字十戒を表す縄也　弓弦二筋にて懸る也　第
一紫縄とは弓弦を云也　縄の付所に習有神前にては注連の縄　仏前にては前の網甥にては
胞衣を表せり陰陽結　東西南北口伝多し
一　落　花　是は切縄也　首根引解にして高手に口伝　但　荒縄

猪谷流縄縛図

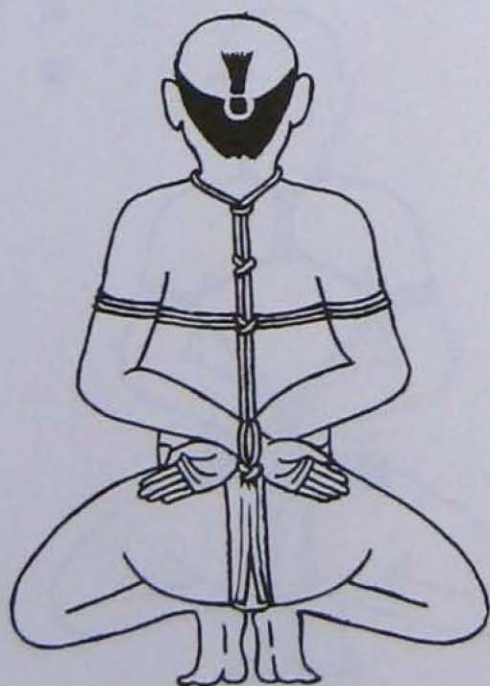
猪谷流は制剛流より出た梶原流より伝承の流派である。

五法
村雲
籠破

十文字
六道
船中

千鳥
落花
徴塵

五法

十文字

六道

千鳥

落花

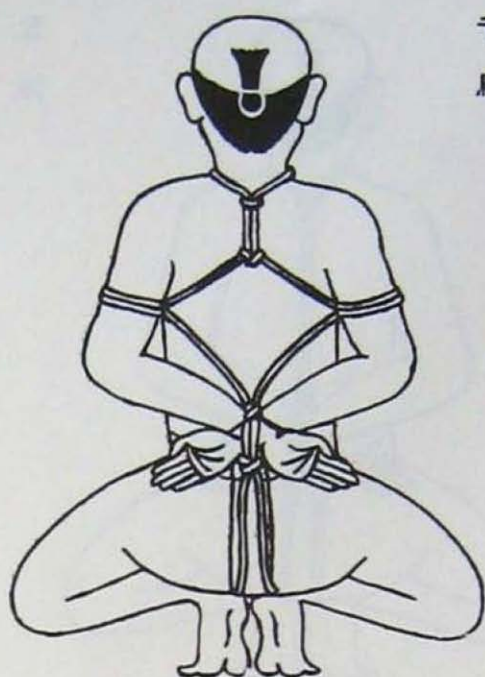
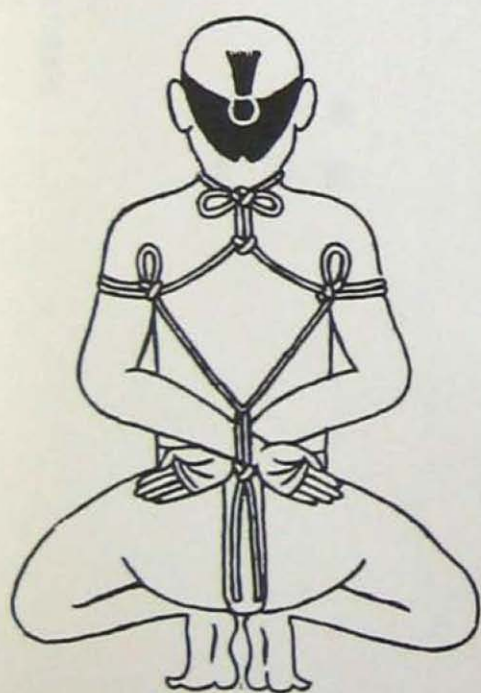
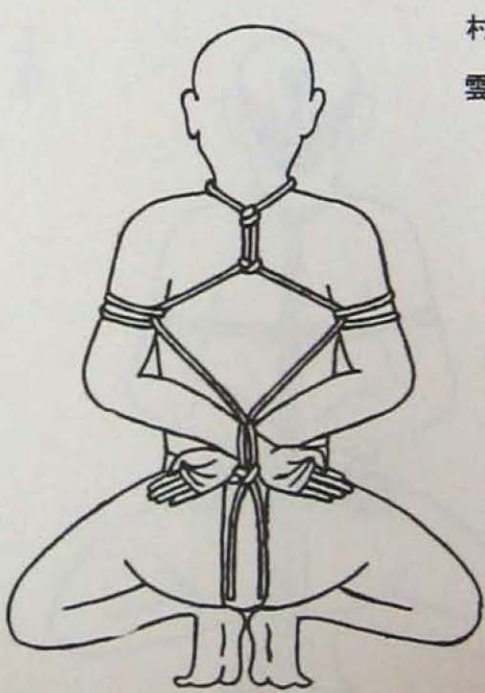
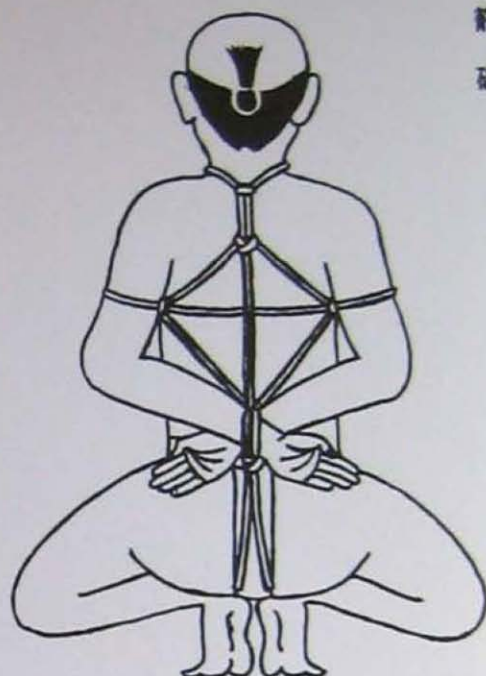
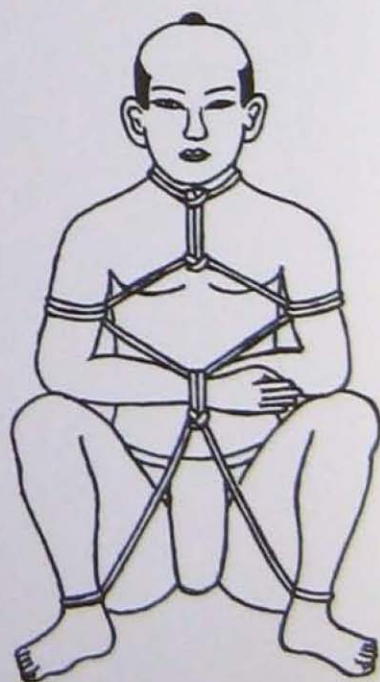
村雲

微塵

籠破

船中

武衛流縄縛図

縄之次第

早　縄　くはへ縄右の手へ移し首へ廻し小手斗縛る　大事の囚人には早くはり縄をかくるなり　口伝
御　法　さし合の縄なり　寸法七寸五分 侍にても下人にても苦しからず 侍は首に紙を巻くべし　口伝
落　花　籠より引出す時荒縄也 首の根は引通し又切る所にて掛様口伝有 侍は首に紙を巻くべし　口伝
千　鳥　下郎の縄なり　寸法七寸　首の付根より結び二ッ小手にも結びあり　口伝
村　雲　法師又は女人などに掛る　寸法八寸高手に口伝　大事の如くうとにはわり縄を掛留二ッ　口伝
六　道　侍を縛る　寸法六寸四方高手にかける手首に紙を巻き　二つには神前又は親兄の礼有るは結び
　　　　に紙を付べし　いたずら者には割縄を掛る留め二つ　口伝
微　塵　免の縄なり　結び九つあり　九品の浄土を表す　又九字を結びこめるなり　神前にて志るしの
　　　　縄とも云へり　鎧武者　母衣武者いずれも同前　但し首に紙を幣にして四方に付　弓の弦三尺
　　　　三寸留めにかける結び二つ何れも侍は首に紙を巻き　弓の弦にて留めてしぼる　口伝
十文字　詰籠者の縄也　寸法四寸四方ひしの内にたつ縄有　侍は首又は小手にても紙を巻くべし　口伝
船中縄　前にて縛る　小手の縄左右のひざへかけ　小手内へ出し留るなり　口伝

　制剛流縄目録

早　縄　蜘之掛　四海羽返　胴縄　竹縄　下緒
本　縄　五法　落花　千鳥　十文字　村雲　六道　山嵐　船中　微塵

武衛流縄縛図

武衛流は制剛流より出た梶原流より伝承の流派である。

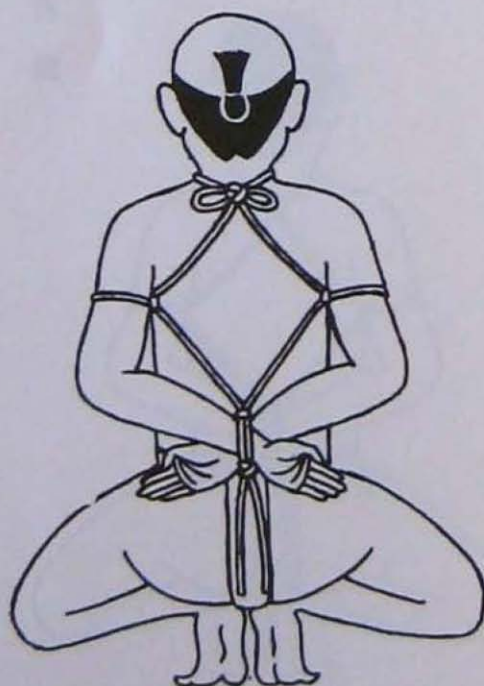
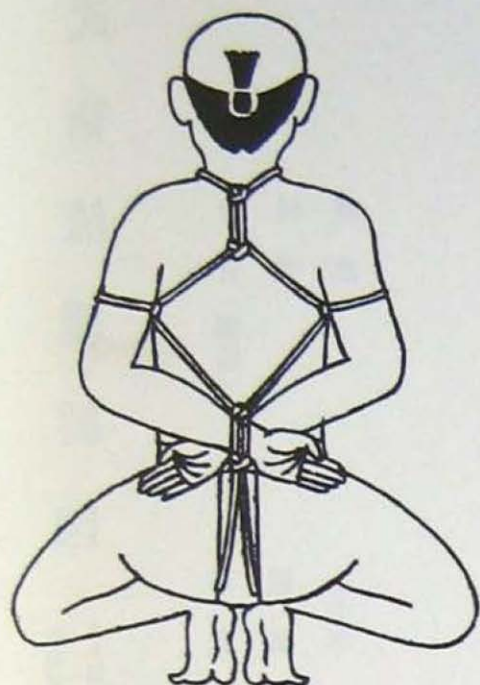
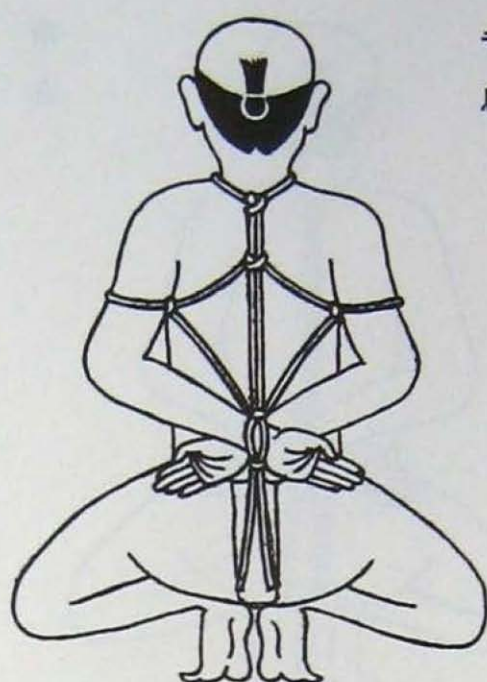
指合（御法）
村雲
微塵

落花
籠破
十文字

千鳥
六道
船中

指合

落花

千鳥
籠破
村雲
六道

船中

微塵

十文字

理極流

五方
十文字
微塵

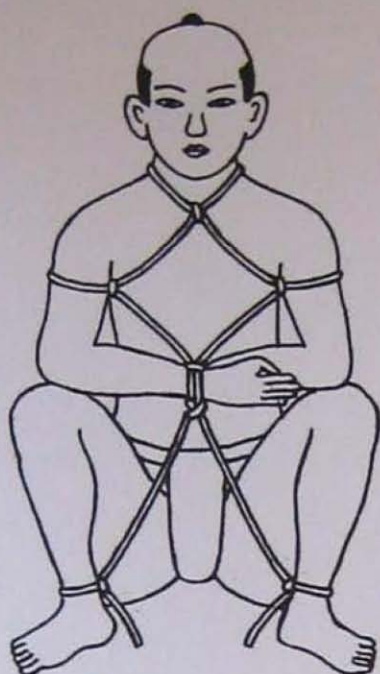
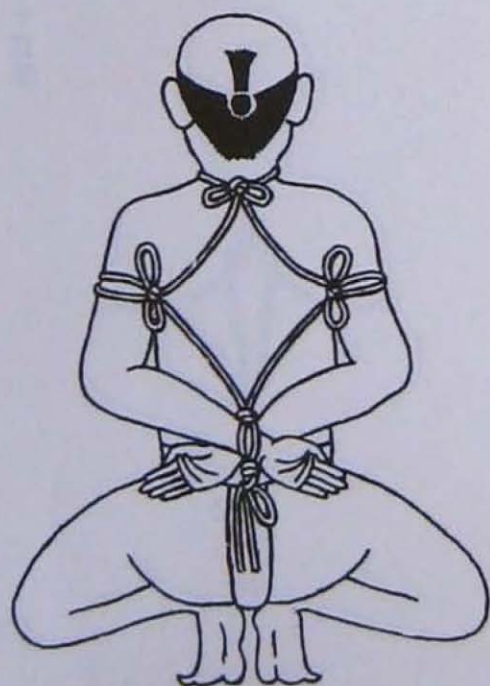
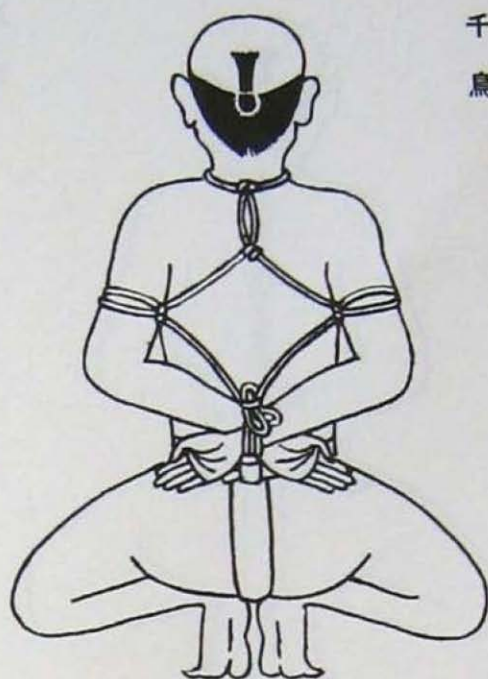
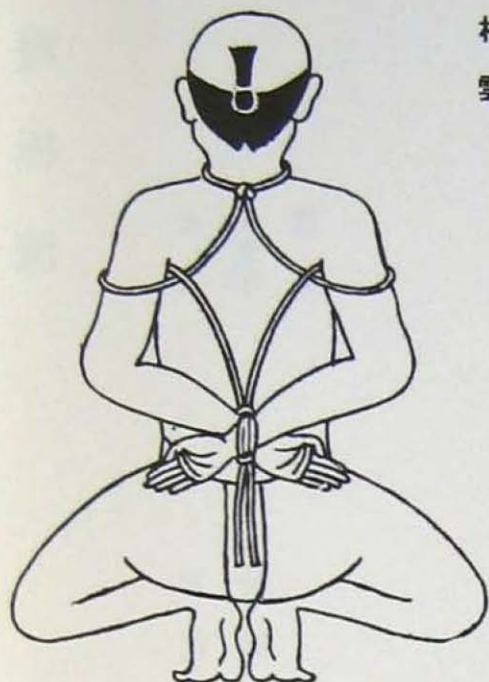
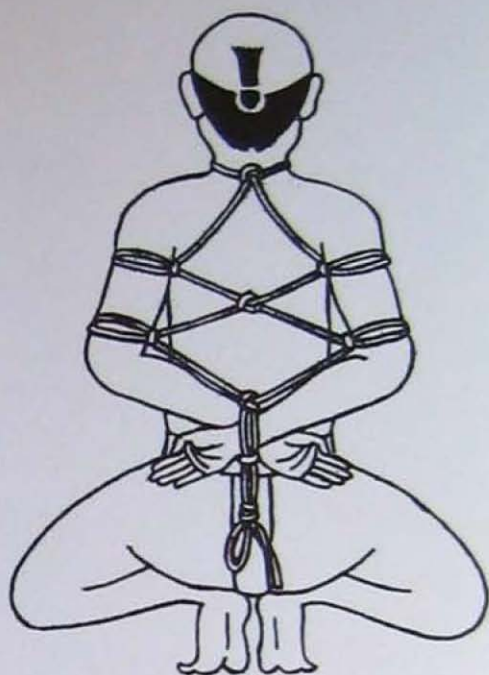
落花
村雲

千鳥
六道

五方

落花

千鳥
村雲
十文字
六道

微塵

荒木流　清心流　心極流

常慎流　夢想流

荒木流清心流心極流

本流は心極流より出て荒木流、清心流と伝りたるもの。

口伝

一　早　縄　図の通り

一　五　方　五ヶ所（首　胴　高手　両方の小手）ヲ戒シムルユヘ五方ト云フ

但シ　真　行　草アリ

真ハ　菱　二ツ　胴縄　二ツ　行ハ　菱　一ツ　胴縄　一ツ　草　胴縄　無シ菱斗リ

一　十文字　強力ノ者ニ掛ル縄　十文字ニ成故十文字と云フ　小手ニテ三ヶ縄タルミナシ

一　村　雲　ムラ〳〵ト出ル雲　サラリトキヱル理ナリ

一　落　花　命ヲワルト花のチルコトシ　切縄ナリ

一　位　上総(アゲマキ)具足ノ背中ニ下リタル緒ニテ首小手折返シニフサ引通ス大将ノ類等縛ル故ニ位ト云フ

一　微　塵　縄ノアマリ引ト塵ニシマル故ナリ

一　早　縄　早縄ハ右ノ小手ヲククリ首ヘ廻シ左ノ小手ヲトリ両小手ノ上ヲカラム

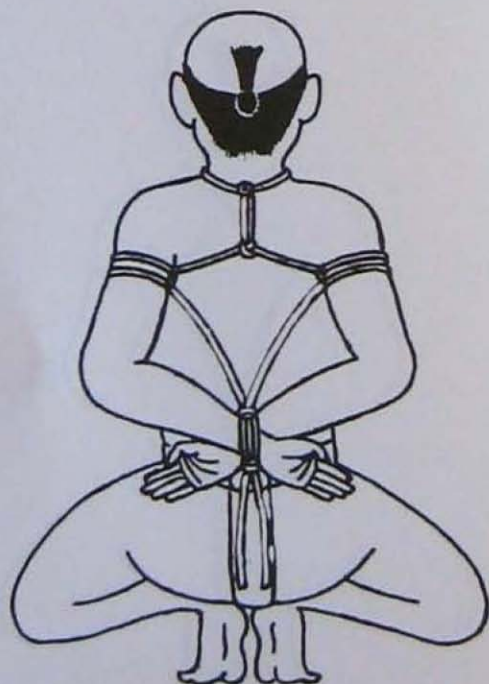
一　五　法　五方ハ首ヘ一重廻シヒシヲ結ヒ高手二ツ廻シ小手ノトコロ男結其下同断但シフシノ間三寸

一　十文字　十文字ハ強力者ニカケル縄ナリ　初メ五方ノ通リニカケ小手ノ余リタル縄ヲ高手ヘ通シヒシノ所ニテ男結ニスル

一　落　花　落花ハ首ニテ男結ニシテ高手ヲ上ヨリ廻シハサケ小手男結上下首ヲトケハ高手モトケル也

一　村　雲　小手男結上下

荒木流　清心流　心極流

早縄　落花　微塵

五方　村雲

十文字　位縄

早縄

五法

村雲

十文字

位縄

落花

微塵

常慎流夢想流

小手返
小手縄

早縄
芝居縄

マワシ縄
早縄問

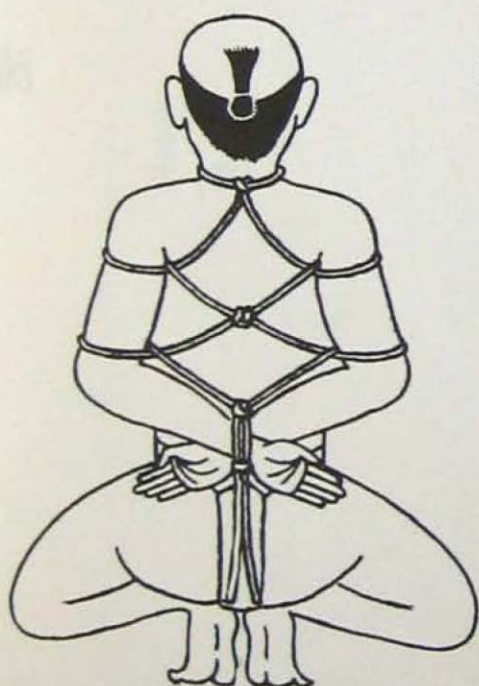
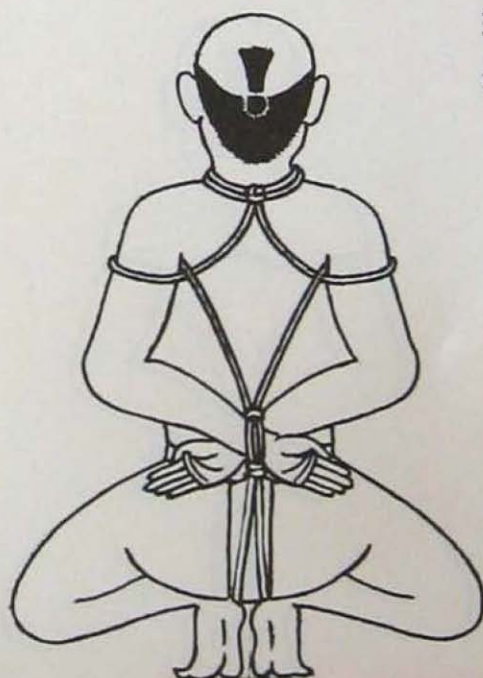
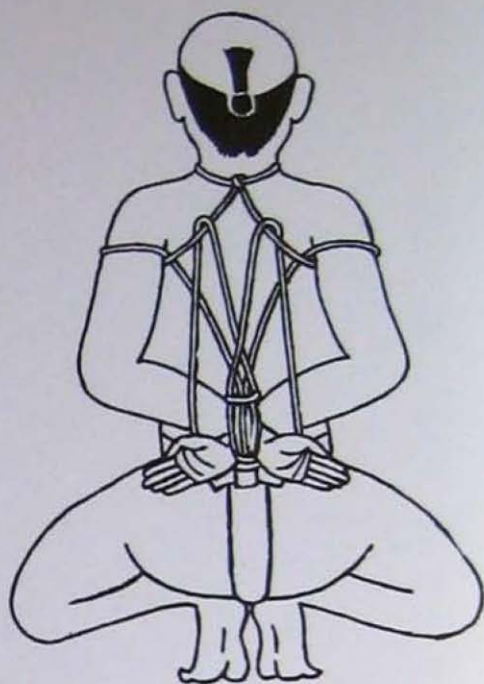
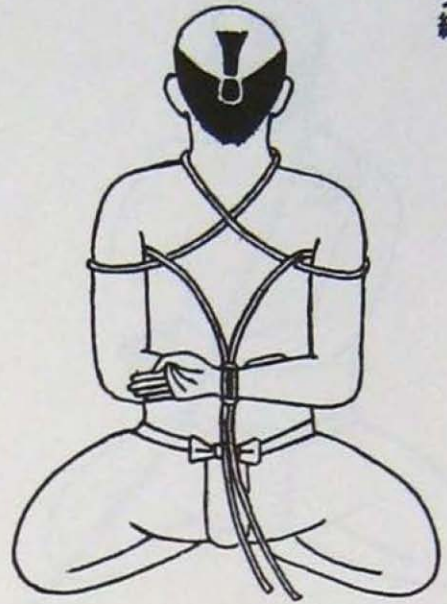
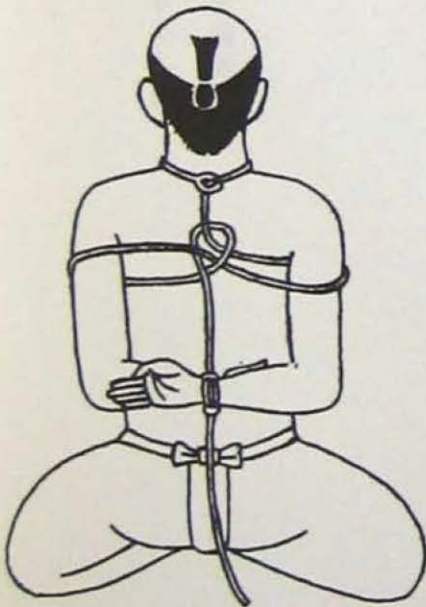
小手返

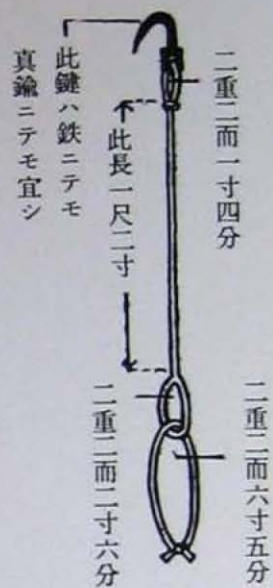
早縄

マワシ縄

芝居縄

小手縄

早縄問

常慎流極秘取縄

コノ縄ハ夢想流ニテモ用フ

右ニテ左ニテモ小手ニ⬯ヲ通シ片方ノ手ノ親指ヲ
アヲノケニ通シ左右ノ手ノ間ヲ通シ鍵ハ髪ヘデモ衣類
デモ畳ヘデモ通シ置クナリ

難波一甫流

難波一甫流

七曜
番不入
括索
六道縄
禁縄

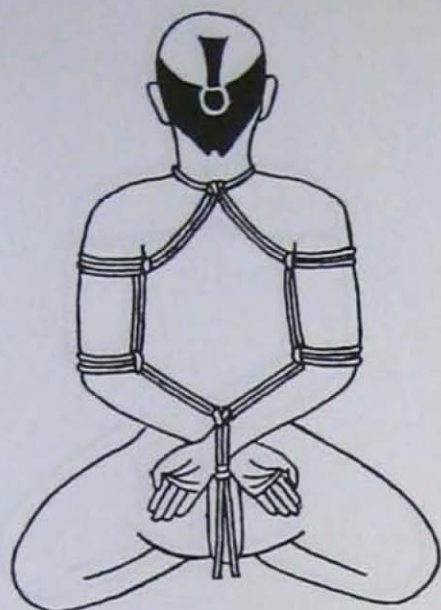
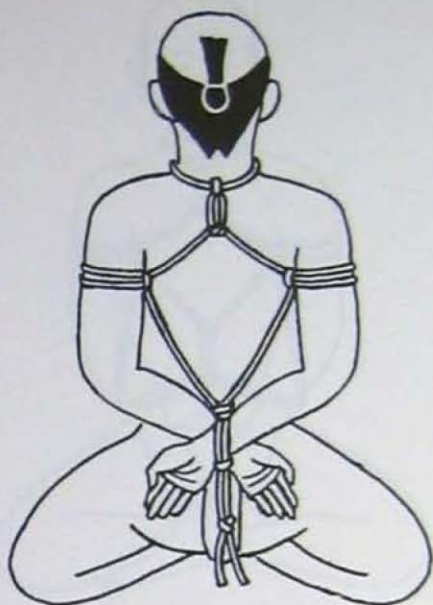
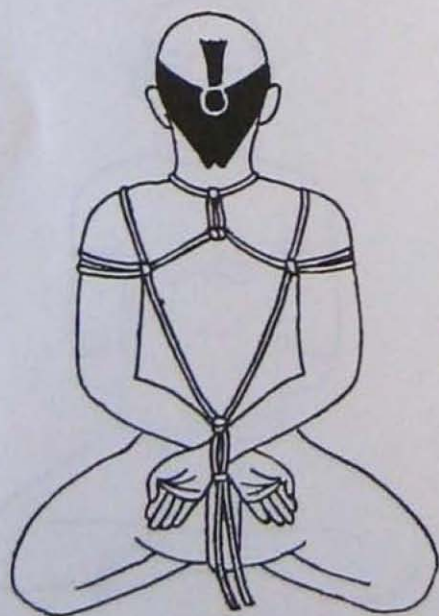
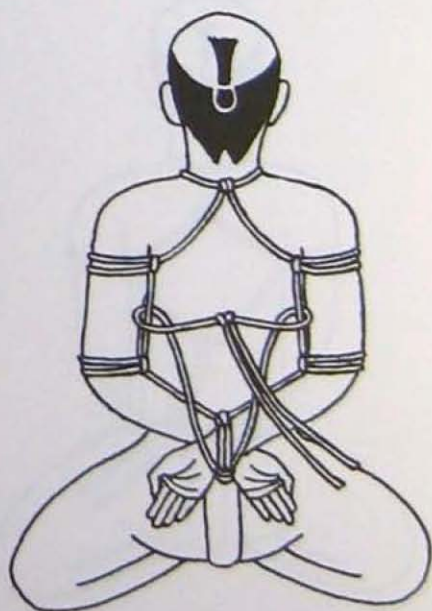
火責
不動加羅縛
手組縄
早縄
手擾索

二重菱
胴搦
真之胴
天狗縄
口伝

七曜

二重菱

火責

番不入

不動加羅縛　後

胴搦　前

不動加羅縛　前

胴搦　後

括索　前

手組縄　後

括索　後

手組縄　前

真之胴 前

六道縄

真之胴 後

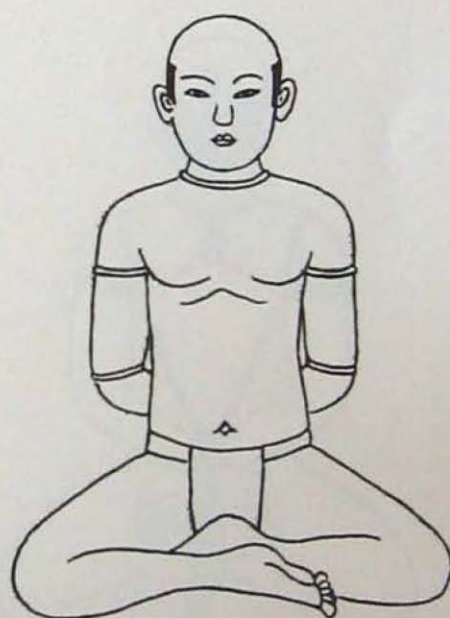
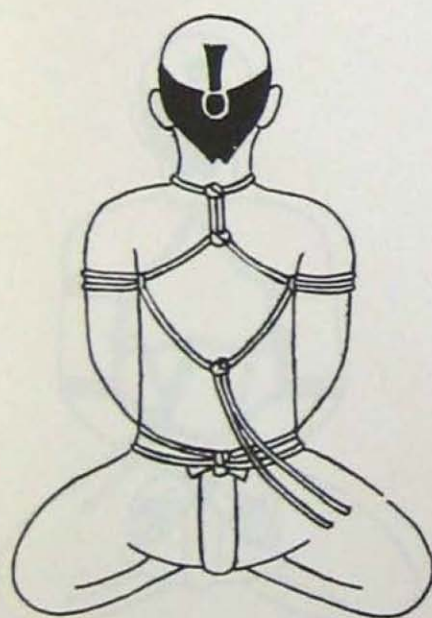
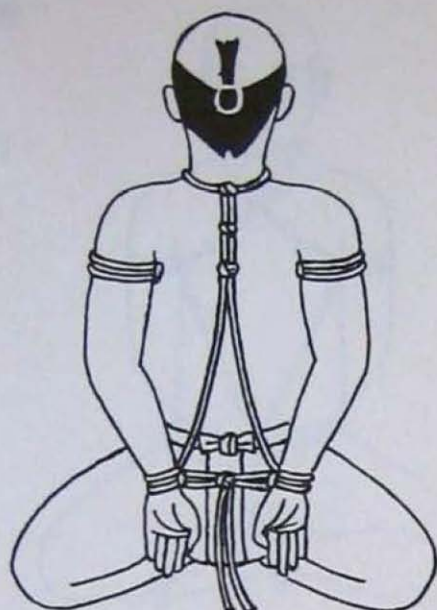
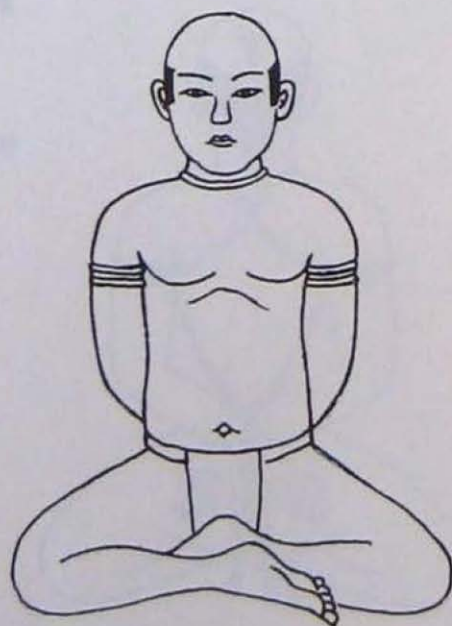
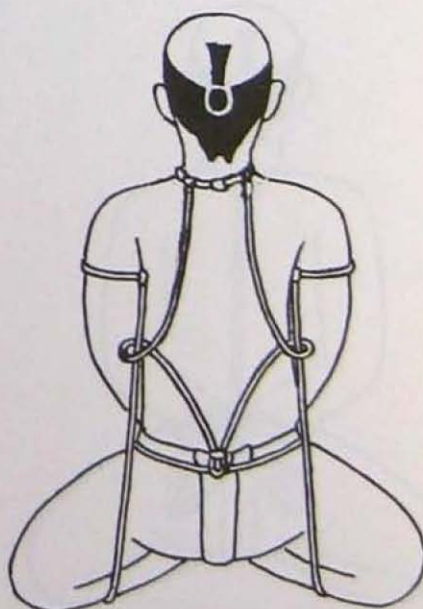
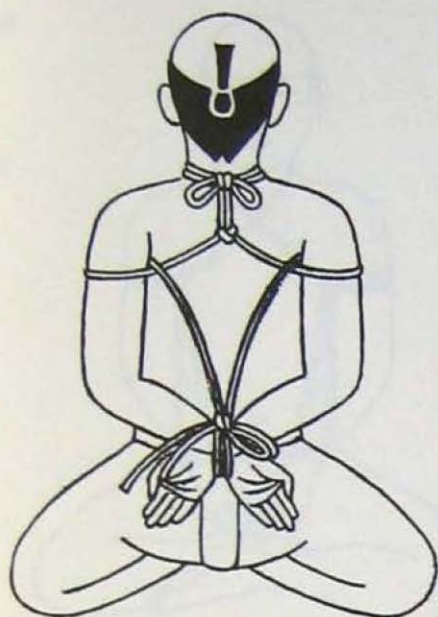
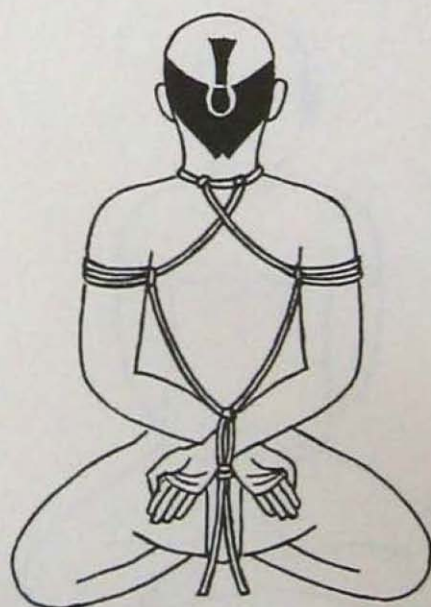
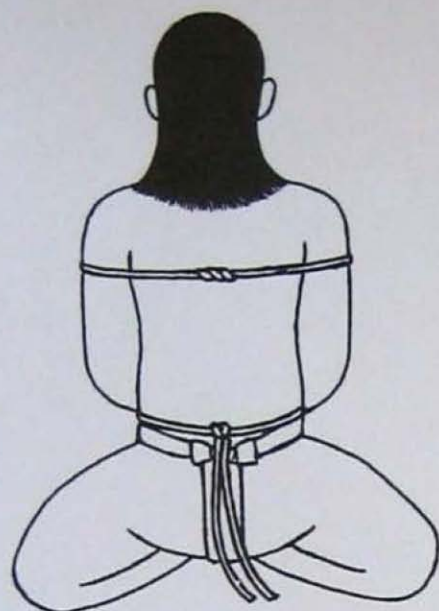
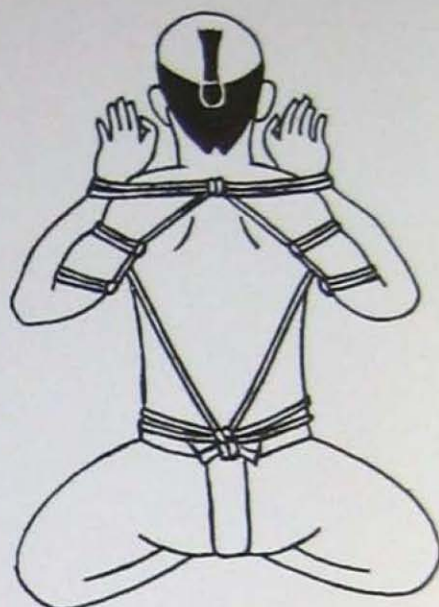
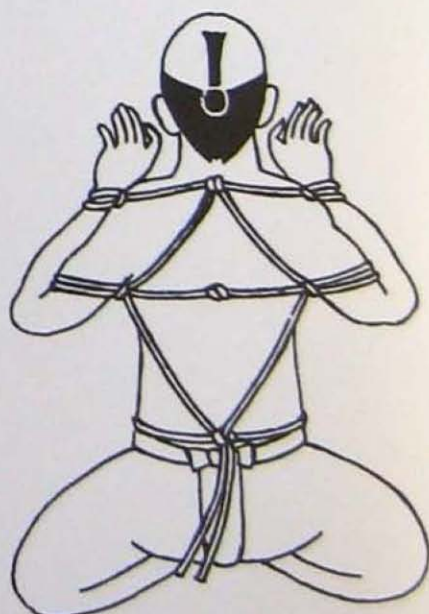
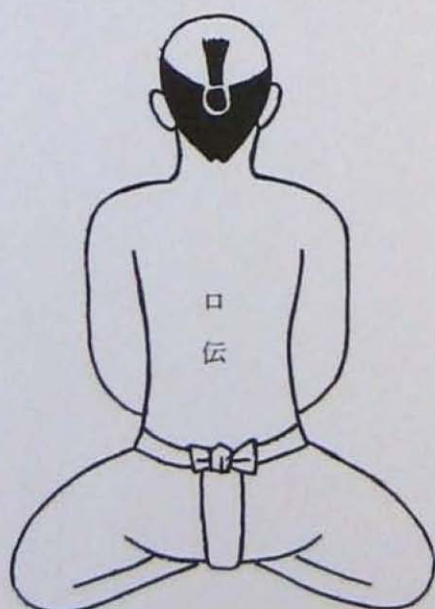
早縄

天狗縄

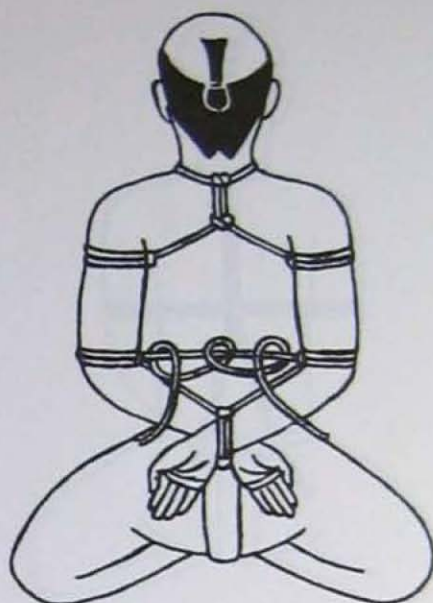
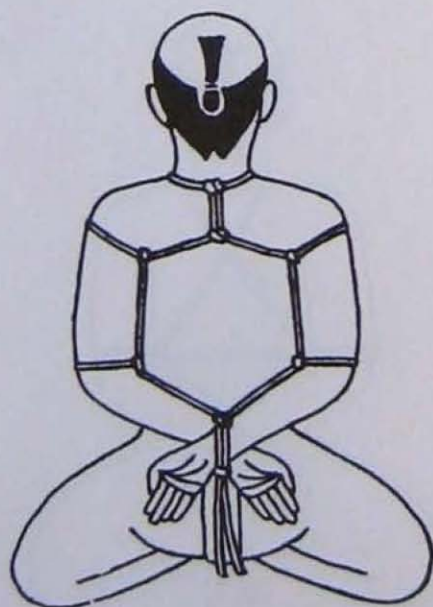
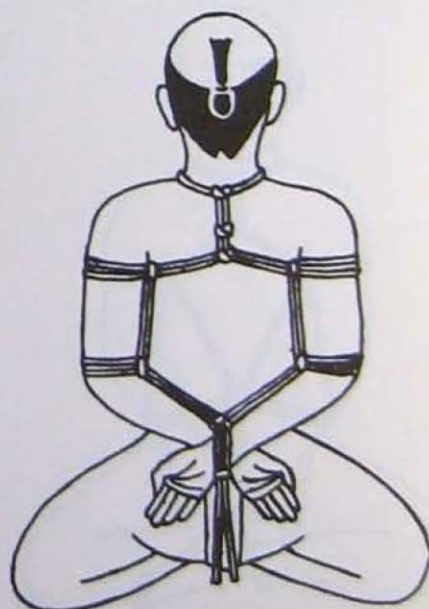
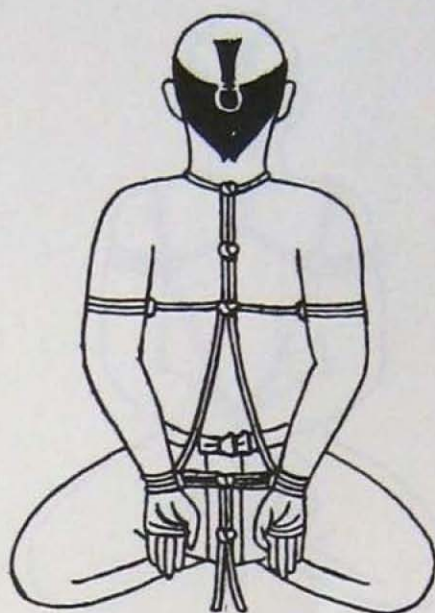
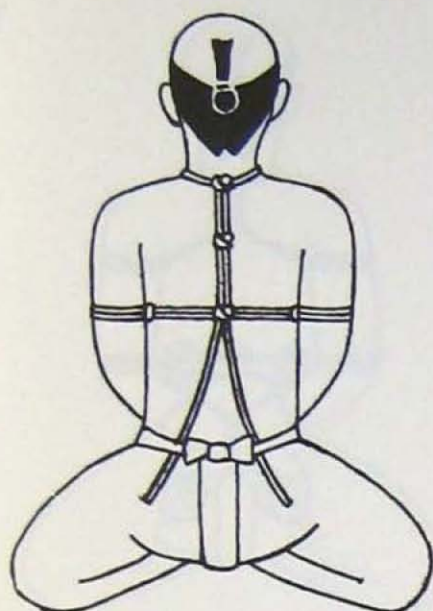
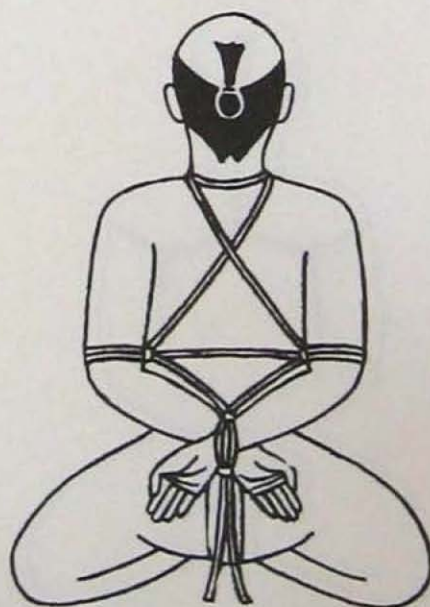
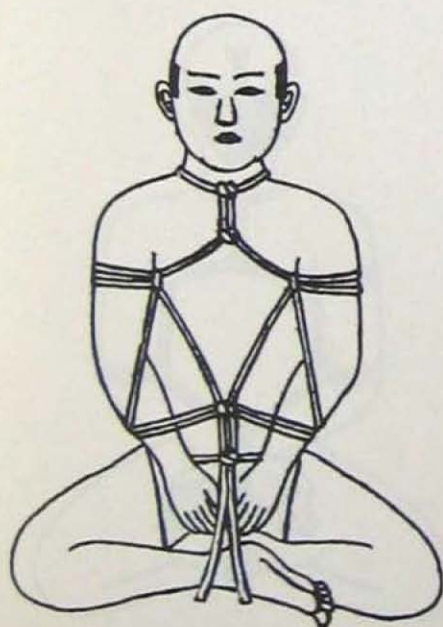
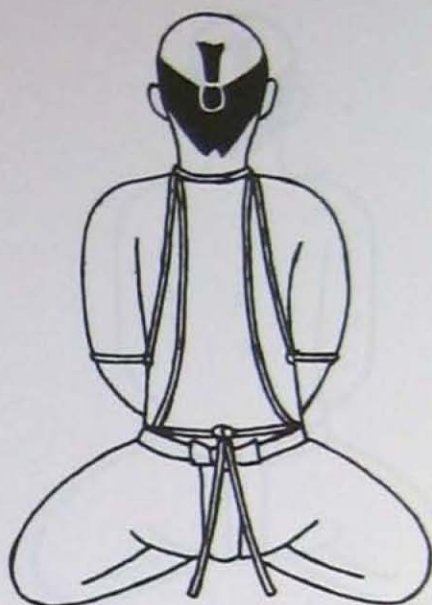
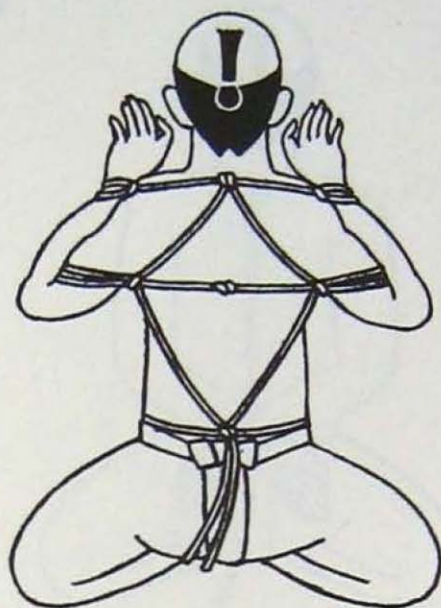
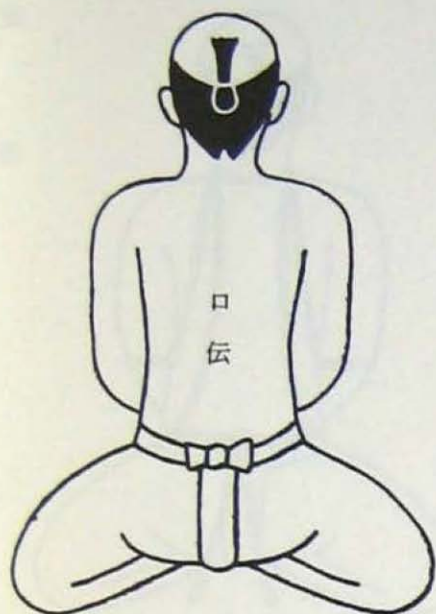
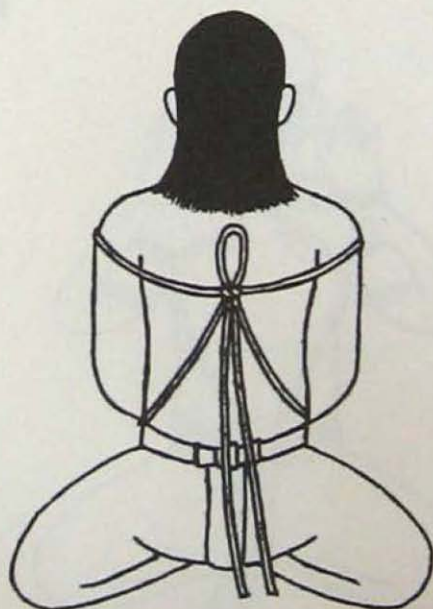
手梏索

禁縄

東流

東流

火責
不動加縄縛
胴搦 後前
天狗縄
口伝

二重菱
手組索
活縄 後前
禁縄

番不入
真之胴
早縄
手襁縄

火責

番不入

二重菱

不動加羅縛

手組索

胴捆 後

真之胴

胴捆 前

活縄　後

早縄

活縄　前

天狗縄

禁縄

手揺縄

難波一甫流　東流縄掛秘伝

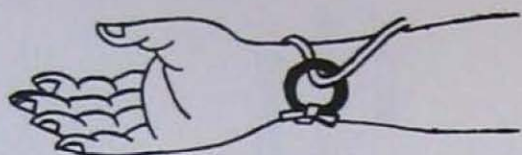
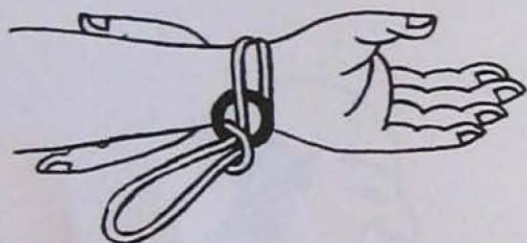
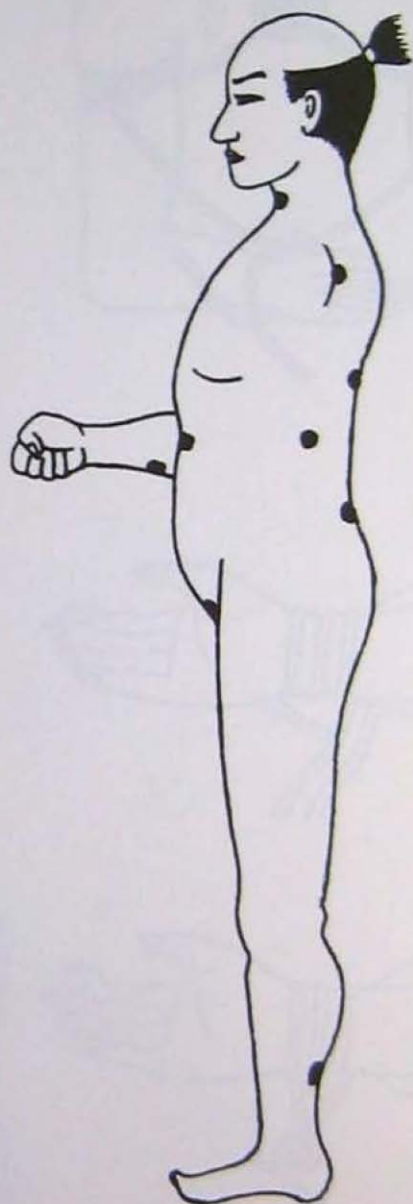
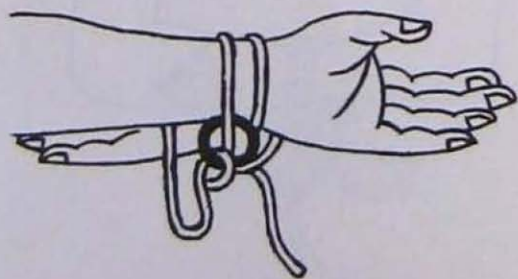
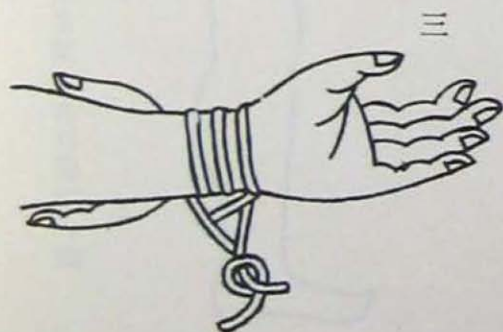
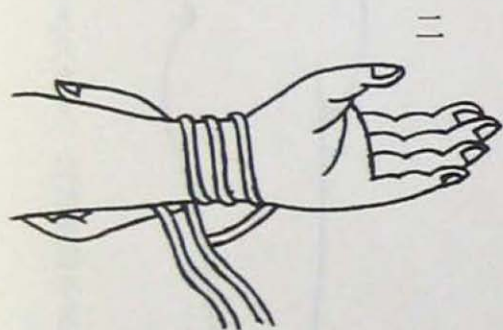
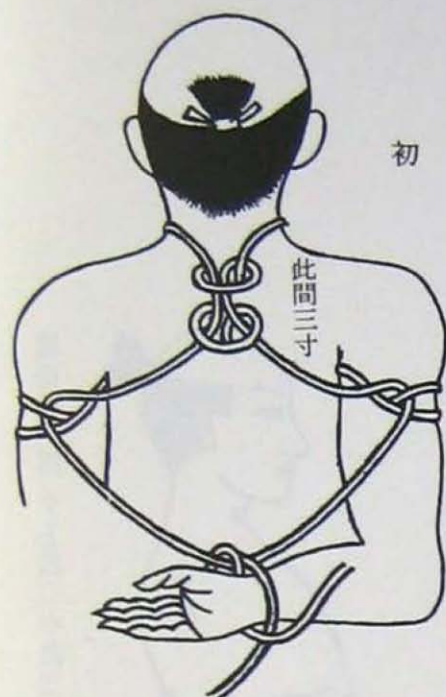
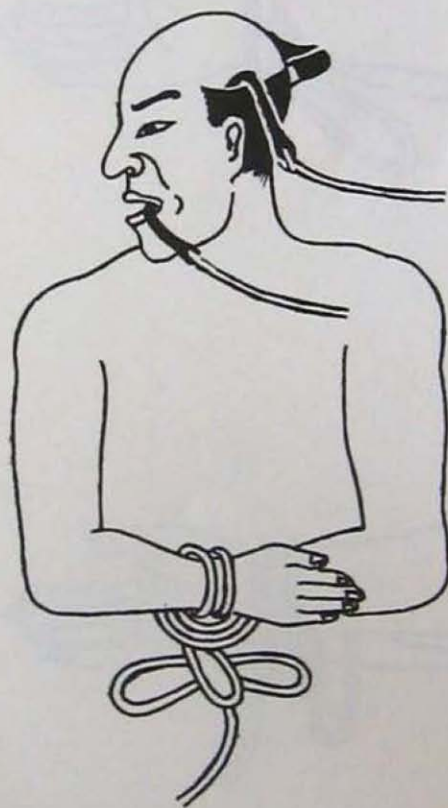
難波一甫流　東流縄掛秘伝

急所
追放縄
ハガイ〆ノ事
早縄之事
留縄留様
官僧正縄懸様留様
戒縄之事
八寸縄之事
無官出家等縄掛様
早縄ニテ本縄ノ懸様之事
小手付ノ事

早縄之事

初

二

三

縄掛前当所ヮ上段三中段三下段三ノ九穴有リ　口伝当様手足聞所品業ニ有口伝左ノ図

四留乱心酒狂等ニハ口ニ懸ルロ傳足ニテ留ルニメ有口傳　髻ニ懸ルモ口傳

戒縄ノ事

初

二

三

三留残縄留ニニメ有口伝

早縄ニテ本縄ノ懸様ノ事

初

追放縄楊枝ヲ
用事口傳楊枝無
キ時ヮ針ヲ用ウ
口傳

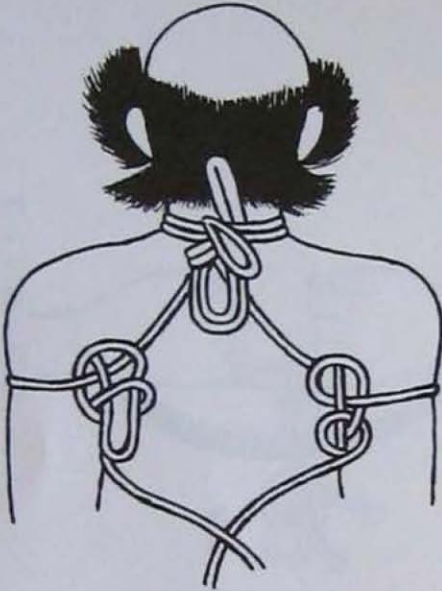
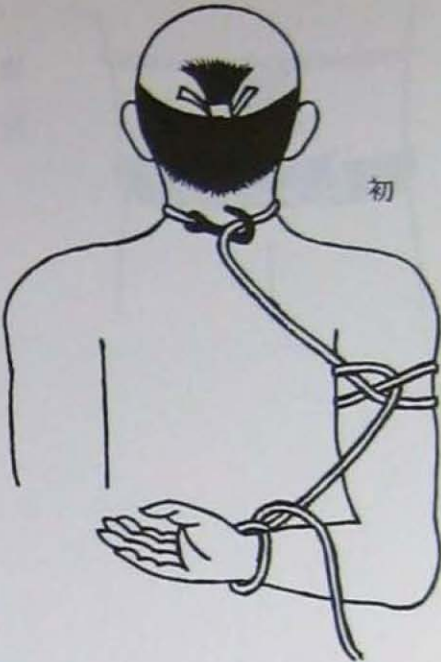
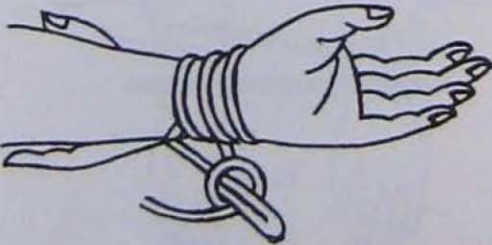
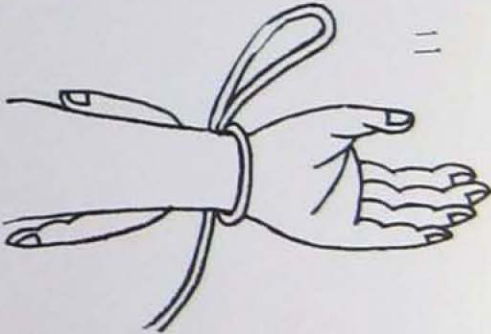
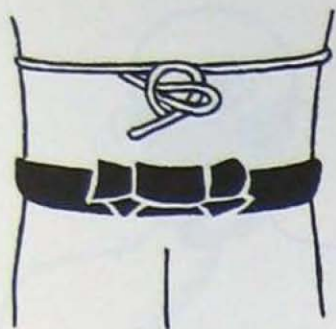
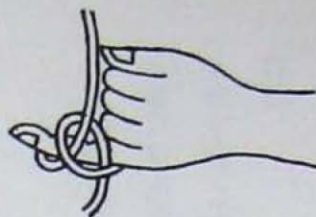
二

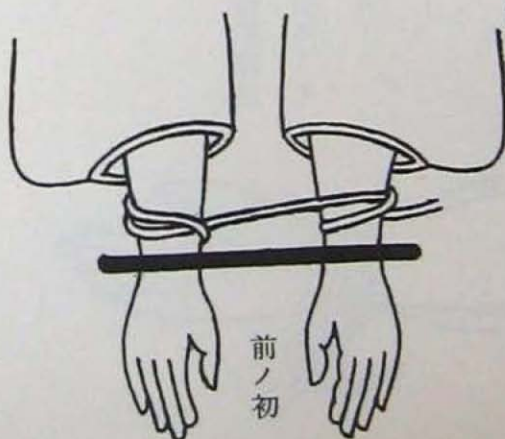
三

留

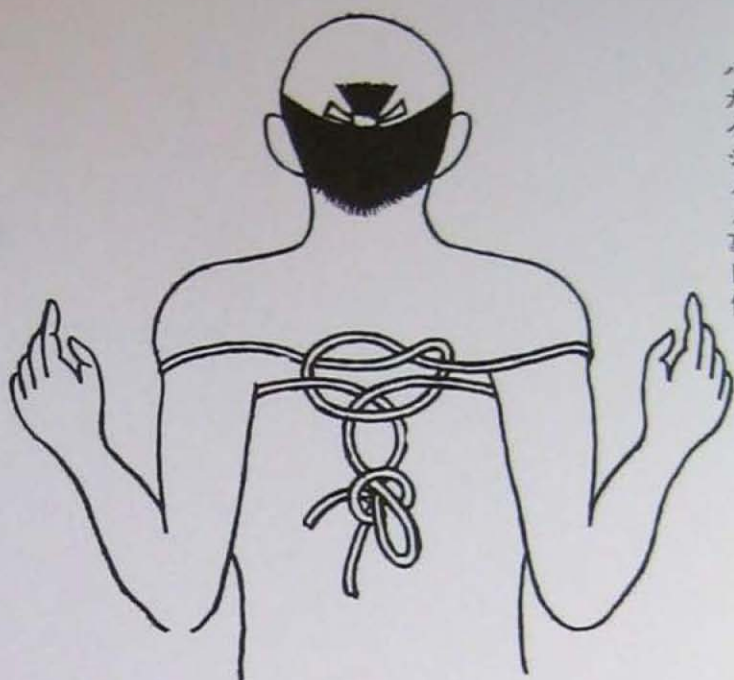
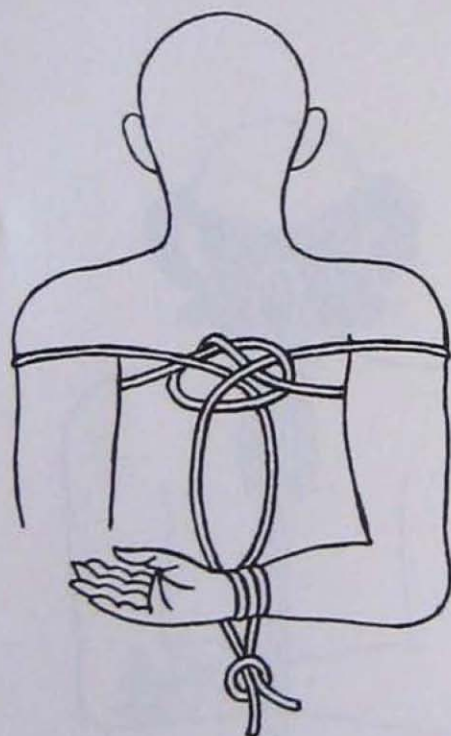
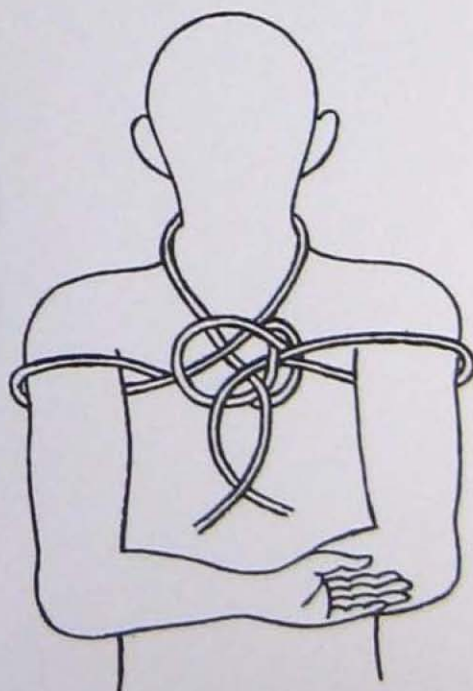
留縄留様戒縄
包無シ引ホトキ
ニククル

八寸縄之事

後留

帯ニテ留ル口伝

帯留

小手附ノ事

前ノ初

ハガイシメノ事口伝
無官出家等縄掛様
首ニ不懸無罪也本縄
ノ通口傳
官僧正縄懸様留様戒縄ノ通依略スニ〆口伝

死罪ヮ縄懸様高手
ニ不掛切時縄トクロ
傳　留ノ縄追放縄ノ
如シ

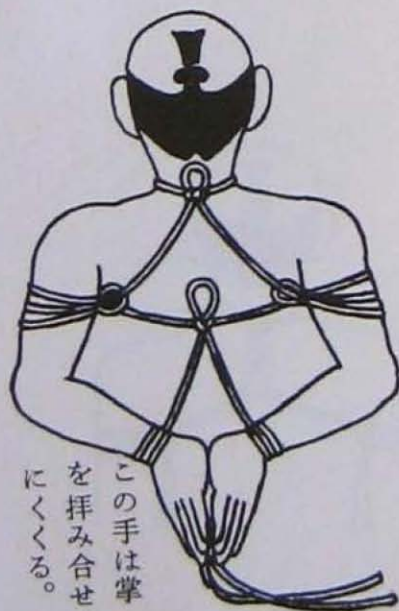
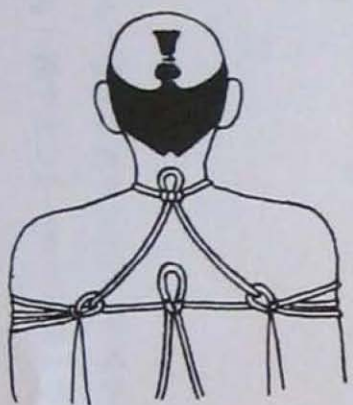
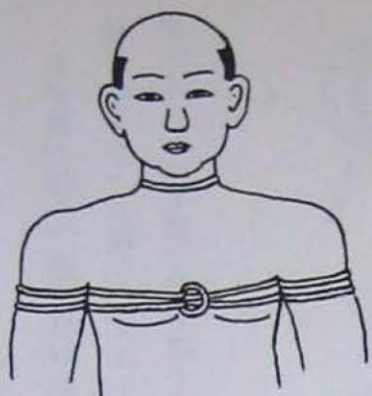
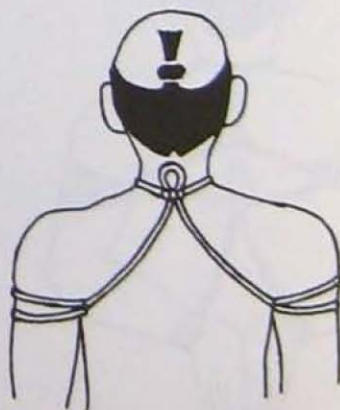
一傳流

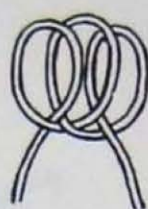
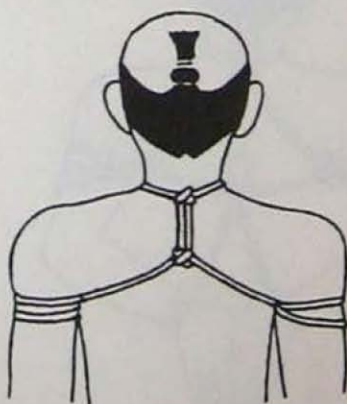
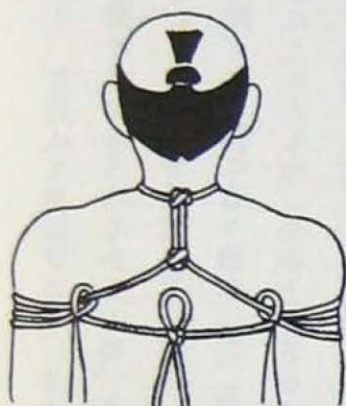
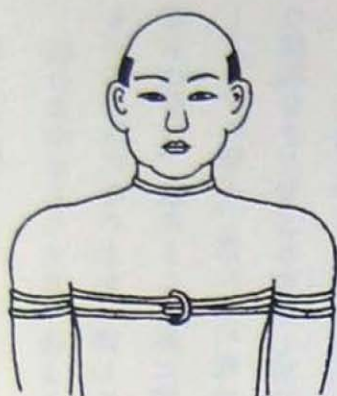
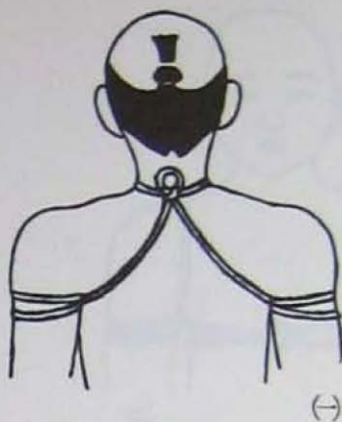
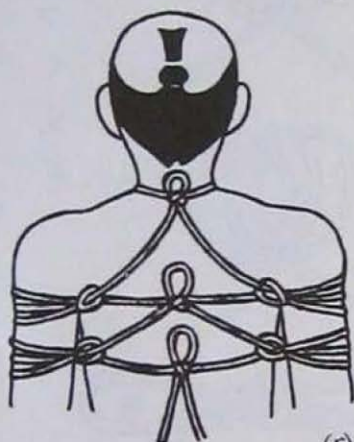
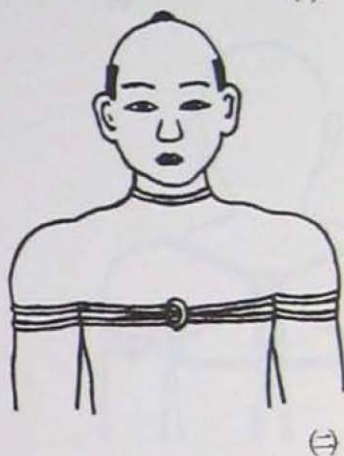
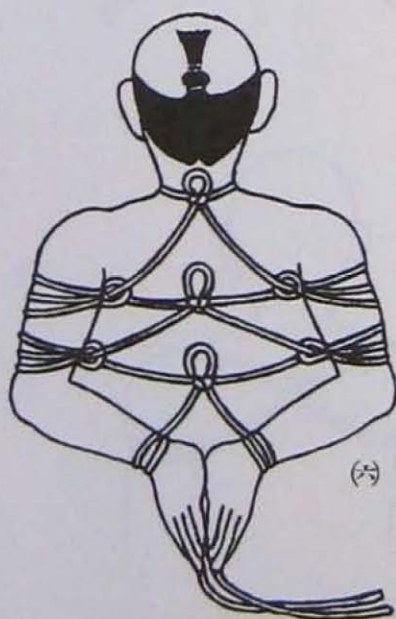
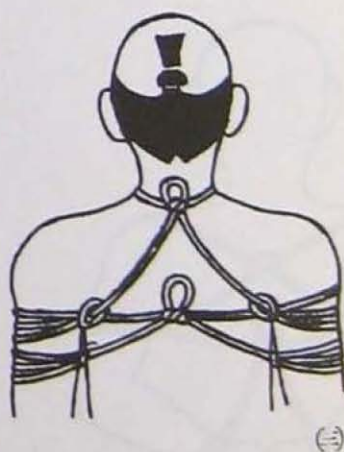
一傳流縄目録

一　草之本縄不入番
一　行之本縄不入番
一　真之本縄不入番
一　女出家縄
一　神速不思議縄
一　鍵針早縄
一　籠手釣速縄
一　斬縄
一　天狗羽懸縄
一　天狗羽縮縄
　　右十ヶ条当流表縄也
　一伝流極意五ヶ条
一　天結縄　二ヶ条
一　大小下緒縄
一　捕手之事
一　阿弥陀之胸割
一　微塵大極意

草之本縄不入番

縄の真中をとって首の後よりかけ、首元にて男結びにし、片方の一筋をもってさらにその上を一縛して空解けせぬようにしかとしめ、その縄端を左右に分け、腕のところ俗に膕というところを鴨甃（かもさぎは、しるし（印）付ともいう）に結ぶ。次にその縄端を腋下より胸に取り回し、図の如く結び、その縄端をまた背より取回し男結びにしかとしめ、その上をさらに空解けせぬように縛る。それより左右の手を合せ、三巻し（二筋なれば縄を一所によせ）背に当る手首の内に一筋の縄をかけ、しかとしめ、またその上を鴨甃にして空解せぬように縛す。

行之本縄不入番

まず図の如く、縄の真中をとって輪を三つつくり上になった輪の内より下の輪をつまみ上げると㈡図の如くなる。それを頭上よりかけて図の如く縛す。

真之本縄不入番

草の縄の縛法とかわることなし。ただ胸の結び二つ背に菱二つかけるなり。（縛り方一二三四五六の順序）

(一)

(二)

(三)

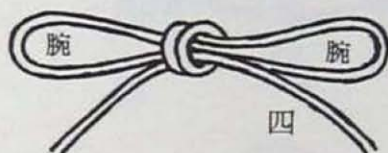
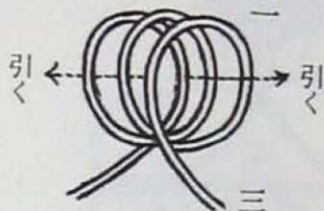
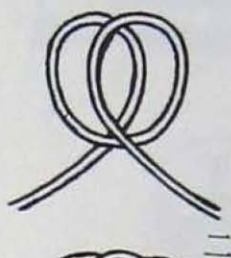
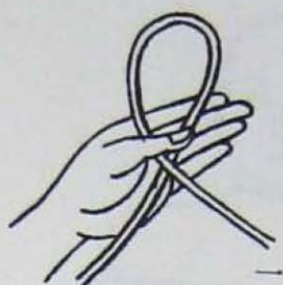
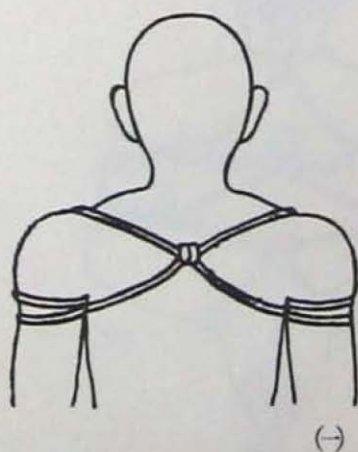
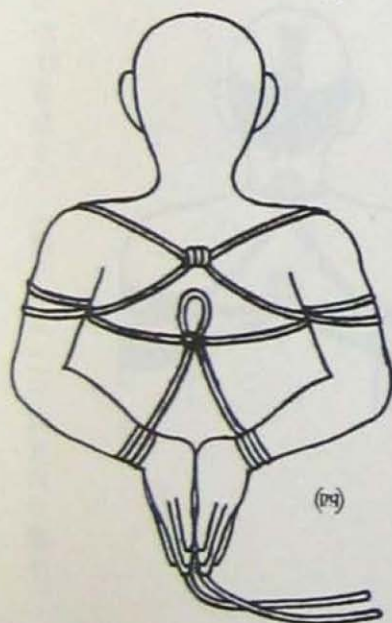
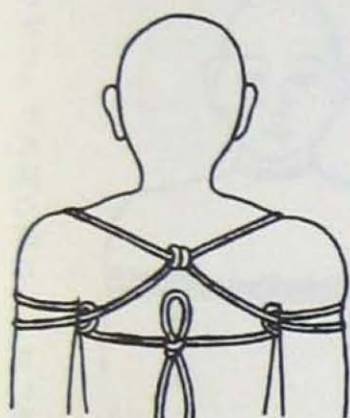
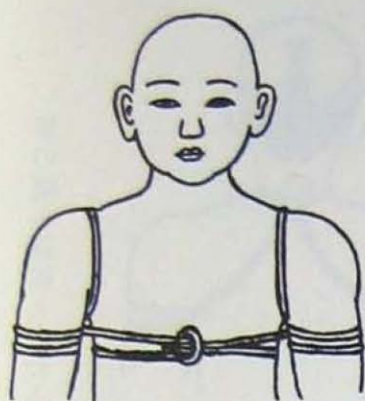
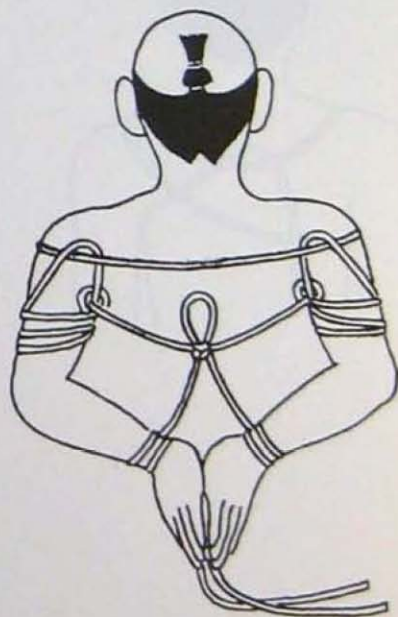
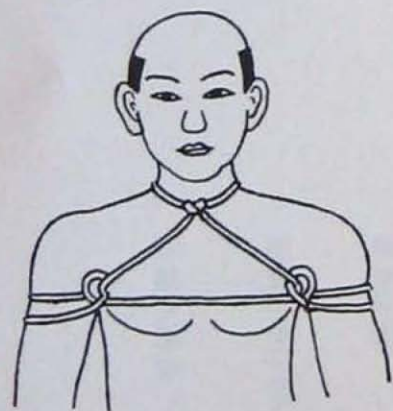
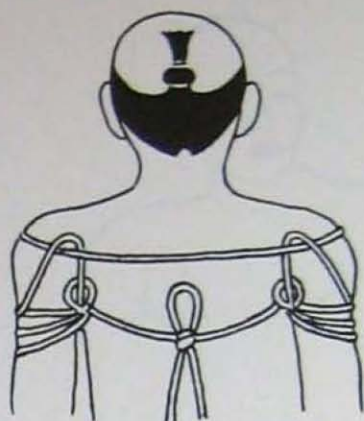
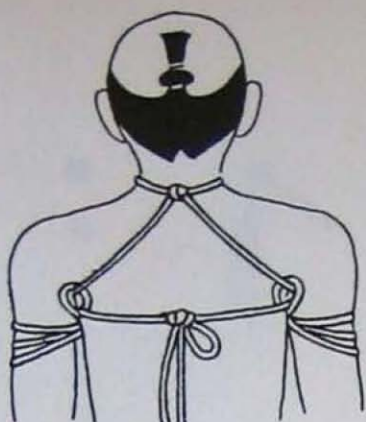
女出家縄

当流ではこの縄を以て女人と出家沙門を兼縛る。

襷縄つくり方

縛り方順序

神変不思議縄

一本には神速不思奇縄とも記せり

神変不思議縄は縄抜けの巧みな者でも抜けることならずといえり。縛りよう図を以て察すべし。

一傳流秘伝

鍵針（寸方口伝）

本縄七尋半

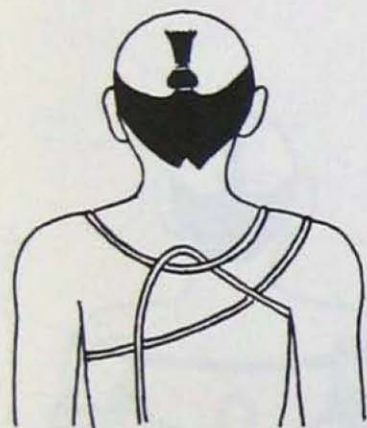
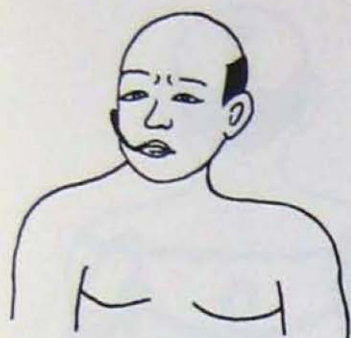
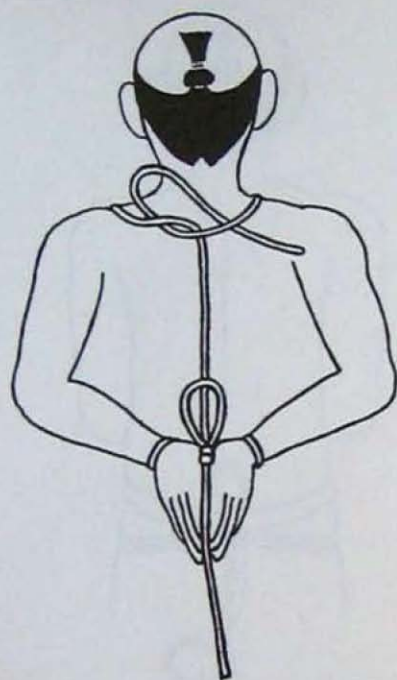
早縄一丈七尺　各口伝

鍵無早縄

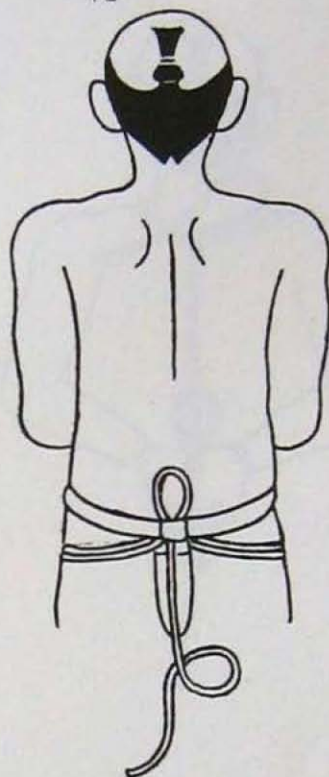
鍵針早縄

かけよう種々あり。

籠手釣早縄

縄を腕首に引かけ、その縄を首に回し、片方の手をとって先の手に重ねてしめる。

斬縄

この縄は打首の者にかける縄にて、打首の時、首の縄端を引けばすぐ解ける。縄を解くところは手計りなり。

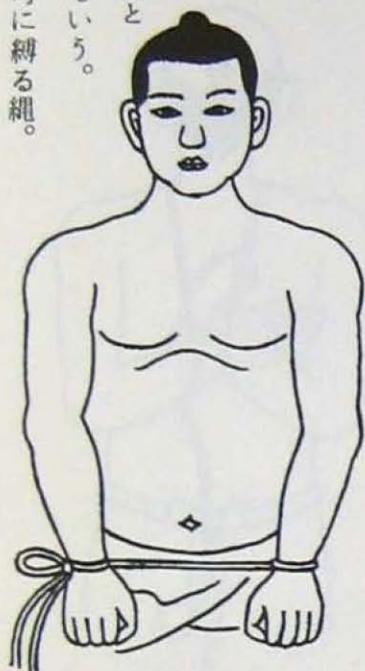
天狗羽縮縄

俗にいう腰縄

当流にては腰縄を帯にかけず、弱腰のところをしるし付けにくくるなり。前は手錠をかける。

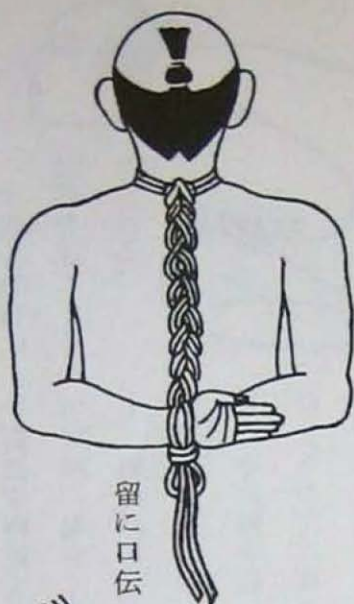
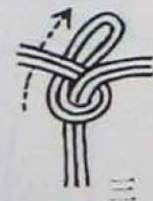
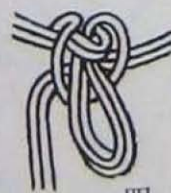
天狗羽懸縄

一名 渡し縄とも大赦縄ともいう。

囚人を渡す時に縛る縄。

この端を引けばすらすらととけるなり。

左手首をくくり、その縄端を前後二方に分けて右方腰辺にまとめ、腰を結び、直ちにその縄で右手首を縛る。

両の縄端をとって両手を縛り、渡す時は手を解き、肩上に一文字に当てた縄をとって引けばサラリと解ける。

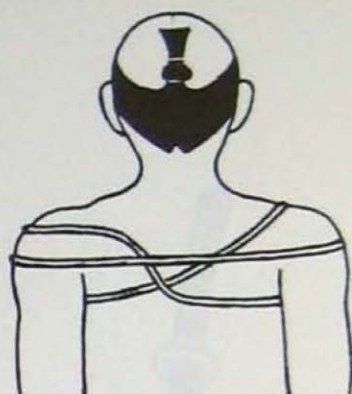
渡縄

この縄法は、当流のものにあらざれど、縄端をもてば動くこと叶はず。渡す時一筋の縄端を引けばさっと手際よく解ける面白き縄なれば記す。

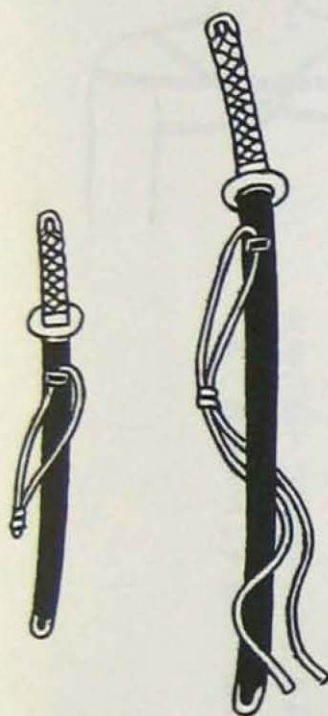
首筋の結び

一　二　三　四

鎖結び

留に口伝

元結縄

大指を袖口に元結を以てくくりつける。

紐無き時罪人を貴人の前に引き出す時は、髪をくくりたる元結を解いて、袖口のところに大指を出させ、小刀か髪搔にて大指根のところに刺し、その袖を巻いて袖口に通し、元結をその穴に貫き、しかとしめ結び、手の働き自由ならざるようにする。

左手を後に回して帯の間に通し、右手は後に回しただけにて大指と大指の根を元結にてしかとくくり留る。

大小下緒縛り

罪人動く時は柄頭を背に突き当てるべし。

縄なき時、大小の下緒を以て縛る術なり。強力の者はこのようにて下緒の水玉緒の内に両腕を差し入れさせ、下緒をねじりて、柄頭にて背筋を突くようにすると動くこと叶うべからず。また手を搦上げて、髪の結び目に脇差の反角をかけ置く時はまた動き得ず。

鞘を引き上げれば手上がる。その時髪に反角をかけ置く。

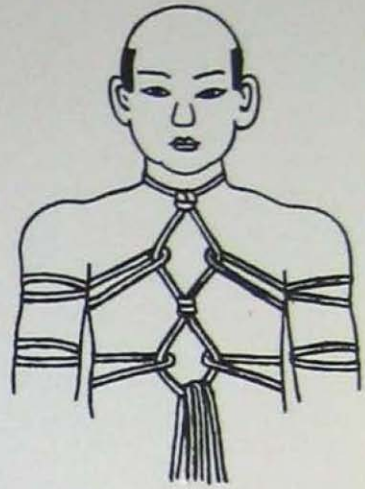
捕手之事

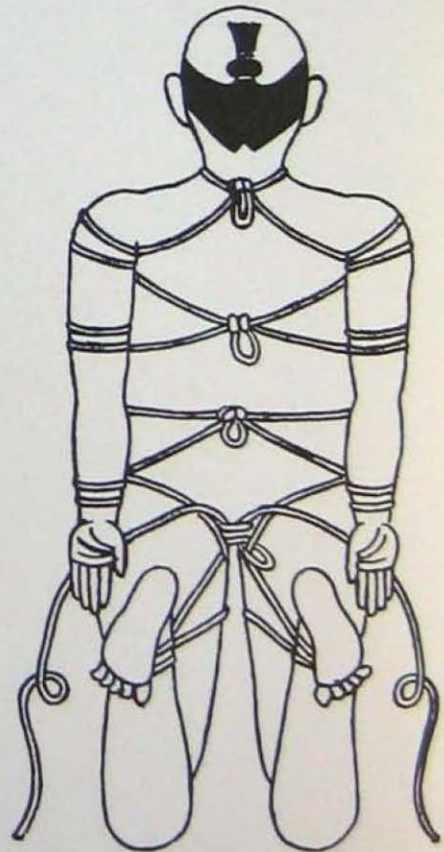
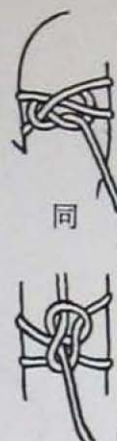
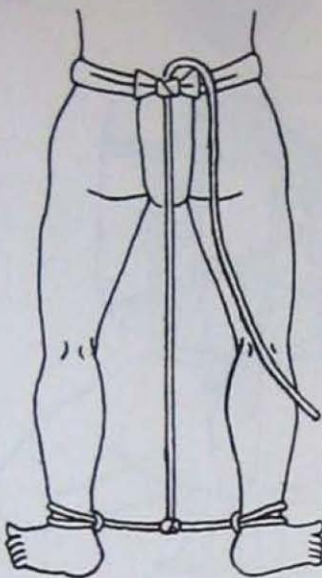
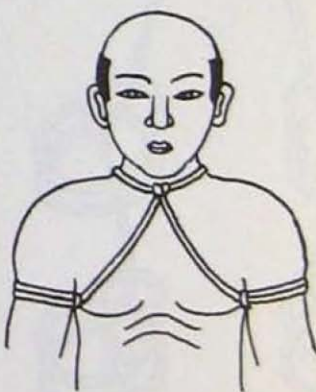
捕手は諸流に妙手あってもとより一定の法はない。時と所により、また、その人の技量によって搦め捕る事なれば、まず、当流にいうところの早縄を己が手首にかけ、敵の右手を取って、後背に回し、押しふせて敵の肩根を強く踏み、敵の手先を己が三里の灸の下通りに当たるごとく曲げてよし。その時我が両手あく故、縄さばき自由なり。能々当たりの利業には有之といえども、少し緩めばたちまち返すべし。必ず油断すべからず。

左右とも同じ。肩の踏どころ敵手を膕にて搦むようにする。

阿弥陀之胸割縄

当然極意の縛縄なり。

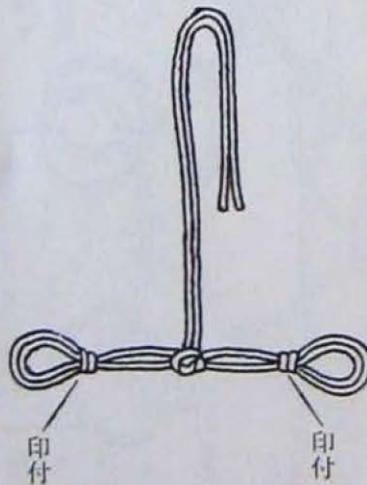
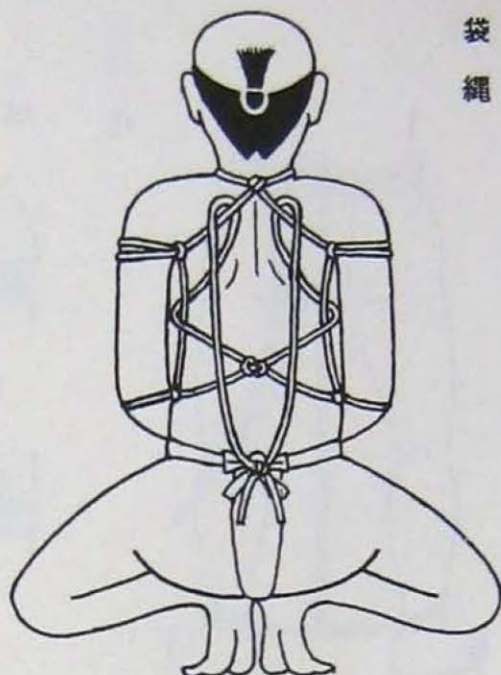
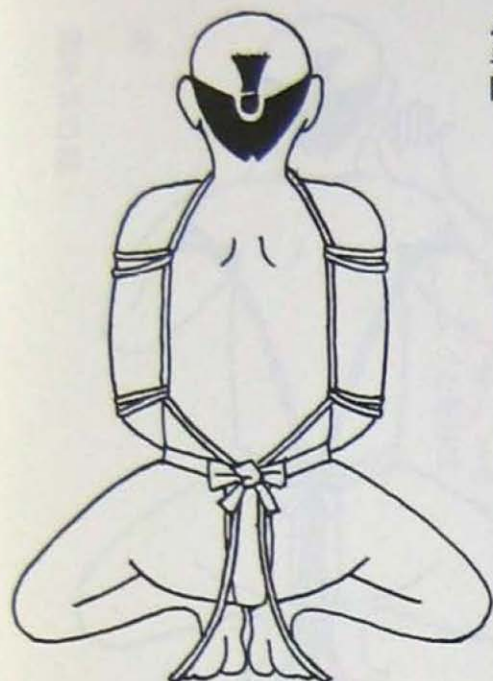
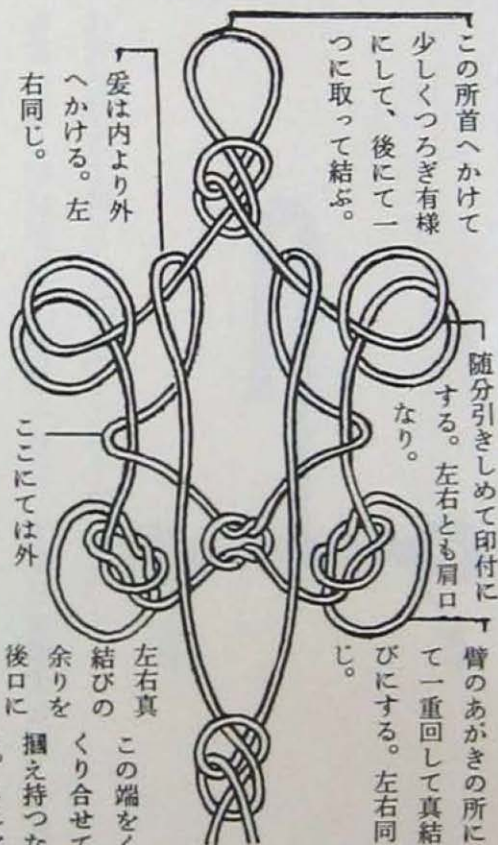
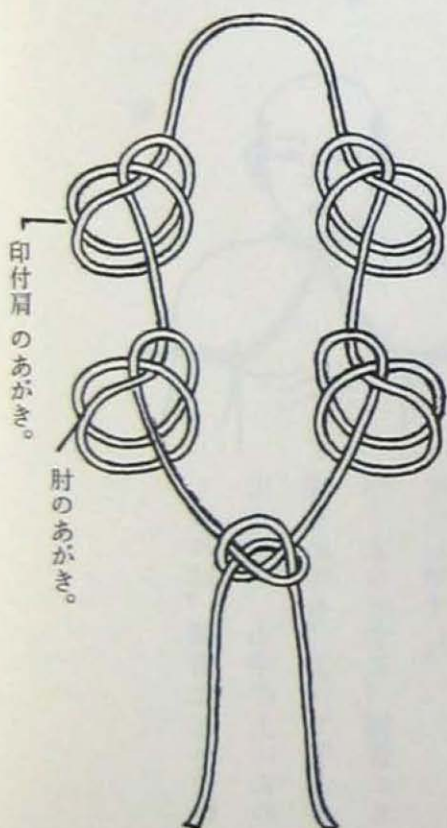
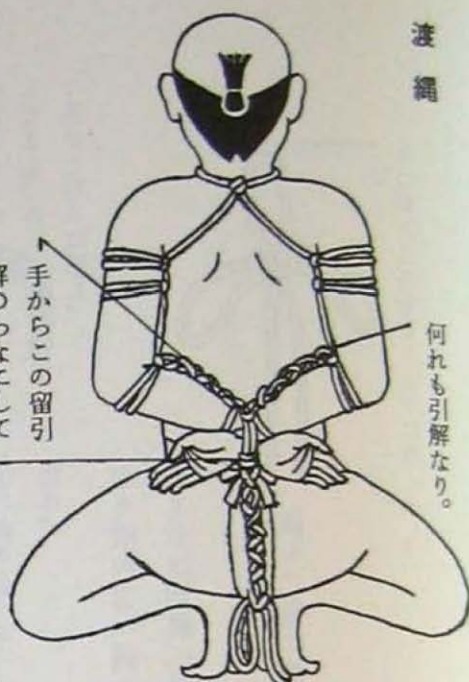
徹塵大極意

徹塵大極意というは当流捕手の極意なり。その場に有り合せたる何にてもとって敵に打ち付くべきなり。就中、灰などの類、火鉢、茶腕、火入れにても、眉間に投げ付けるなり。余は傚之。

須田流

これは、御前などへ連れ出す時に、小手の上にこの縄をかける。よって手はあがくようにする。御前にて礼もしやすし。

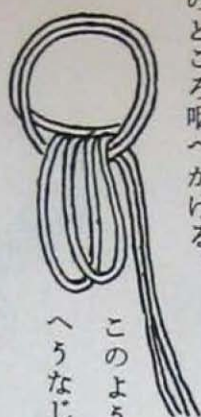
付の図

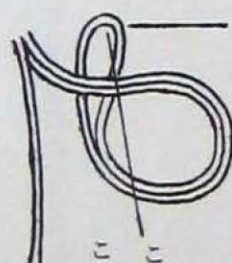
同

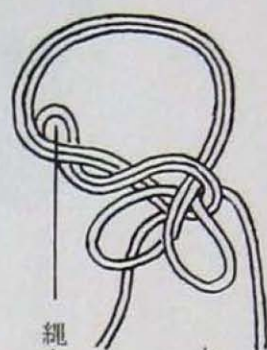
右は後の襟筋より肩を越させて一つ結び、両方へ取り、両臂の所にて印付にして、縄の余りを上帯へ通して、陣羽織を着せ召連れ出るなり。また略法には、左右の手首をくくり、両方とも帯へ通し結び留めて、常服の袖口にて縄目を隠すなり。これは常に用うる時か、時に応じてする事なり。

足取の縄

これは、袋縄を胴へかけ、足あがくによって両足に縄を印附にかけ帯に通す。

袋縄
小手附
この所首へかけて少しくつろぎ有様にして、後にて一つに取って結ぶ。
爰は内より外へかける。左右同じ。
随分引きしめて印付にする。左右とも肩口なり。
ここにては外より内へかかる。左右同じ。
臂のあがきの所にて一重回して真結びにする。左右同じ。
左右真結びの余りを後口にて両方へ取違える。
この端をくくり合せて摑え持つなり。これを引いてしめゆるめをするなり。
印付肩のあがき。
肘のあがき。

渡縄

この渡縄は解く手ぎわ悪しくては見苦しきものなり。敵へ渡す時、縄の端を摑へ、向ぅ突くとすらすらとほどけ行くさま手ぎわよくすべし。

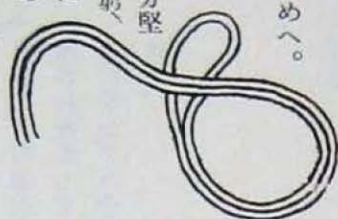
すべて縄目を堅くからみ付けるよぅにすれば抜けるよぅになるなり。その上か有者はしめきる理も有るなり。少しくつろぎありても、しめどころをよく堅むれば抜ける事ならぬものなり。

このところ咽へかける。

このよぅに締へ引かけ、両方へぅなじにて取分けるなり。

この締め随分引きしめて窮屈なるよぅにしてよし。

この締めへまわし、肩口にて左右ともこのよぅに取るなり。

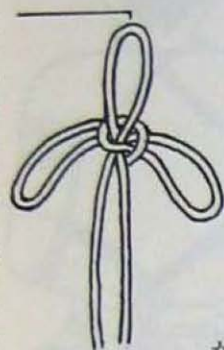
この緒を通し、また締めになるよぅに引かえしのところにて前の通りにしめ、また、手首のつかいのところにても一しめするなり。左右とも同然。さて左右の手首を一つに後手に取って左右の縄の余りを締めになるよぅに引かけてはしめしめしめして敵をひかえ持つべし。

かように締めへ引かけ、両方へ引き付けるなり。

縄を二つに取りたる端のところなり。本緒のところにもつひて外れざるようにすべし。

この締めへ。

肩口にて左右ともこのように臂へ回し、

この締め随分堅めるなり。窮屈なるようにしてよし。めり込ましむるは悪し。

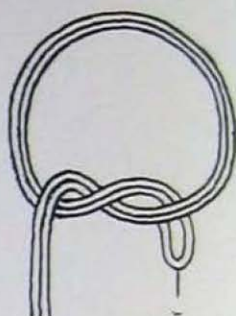
これを通し、また、わなになるようにして引かけしのところにて前の通りに堅め、また、手首のつかいどころにても一結び。左右とも同じ。

なお左右の手首を一つに後手に取って縄の余りをやはり締めになるように引かけて堅めおくべし。縄の余りを一つに取り掴ゆれば堅まるなり。端斗を引く時は皆引解く故すらすらととけるなり。

また喉の方へ縄を回すこと如何がという時は左の如し。罪も極らざるに縄を喉にかくるは切縄になる故用捨あるべし。

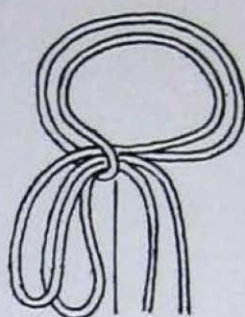
縄を二重に取って引解に如この結び左右に取り、あとは右に同じ。

ここのところをもとどりに掛くべし。

また師のいう

後うなじにてこのように結んで、

この締めへ

この縄を引解に引かけ、左右へ取り分けても可なり。

またいう

この様に引かけても可なり。

佐々木流　大學流　地間戸流

一乘不二流

佐々木流　大学流　地間戸流

一乗不二流捕縛術

第一法　第二法　第三法

第四法　第五法

請渡縄　四寸縄　十文字

船中縄　千鳥　前縄

剪縄　沙門山伏

敵を捕固て縄を捌き、縄口を腕にかけて首へ回し、腕口を二重に回しかり留めをして、左の方へ越腕を捻じ上げて仮留を解腕口をも二重に回して割縄を二重に回し、首より引いた竪の縄にて二重に留める。

敵を捕固て縄口を二の腕の下より引き出し、腕口にかけ首へ引き回して越えるところを押えて腕口に二重に回し、仮留めをして左へ越えて左の腕を捕え固める。

敵を捕固て縄口を袂より出し、縄口を腕にかけて首へ回し、腕口にて仮留めをして左へ越し、腕を留める。

敵を捕固て縄口を帯の下より上へ引き通して腕にかけ、首へ回し帯にて假留めし、左へ越し左の腕を二重かもさけて帯にて留める。

敵を捕固て縄口を帯の下より上へ引き通し、縄口を首にかけ、中にて縄口を二重に回し、帯にて假留めをし、左の腕を捻じ上げて二重に回して留める。

請渡縄

四寸縄

請渡縄

縄口を首にかけて右の二の腕へ上より下へかけ、左の二の腕へ下より上へかけて右の腕にかけたる縄の上より一つに引き締めて留める。

十文字

船中縄

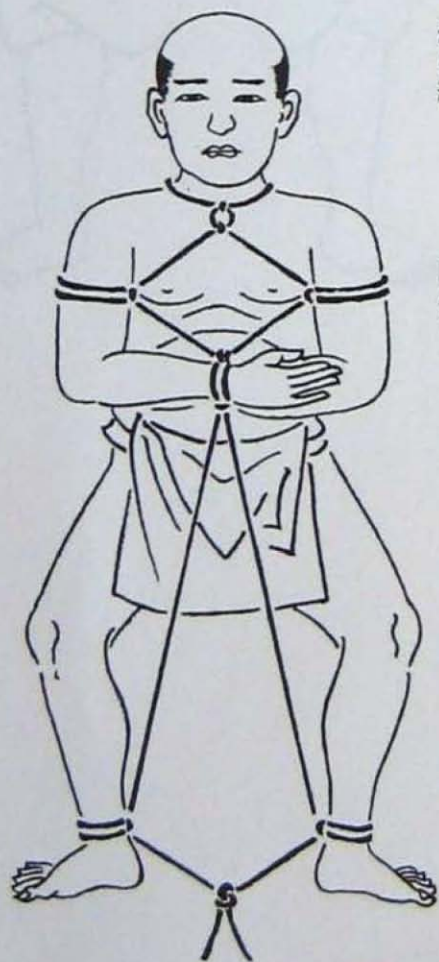
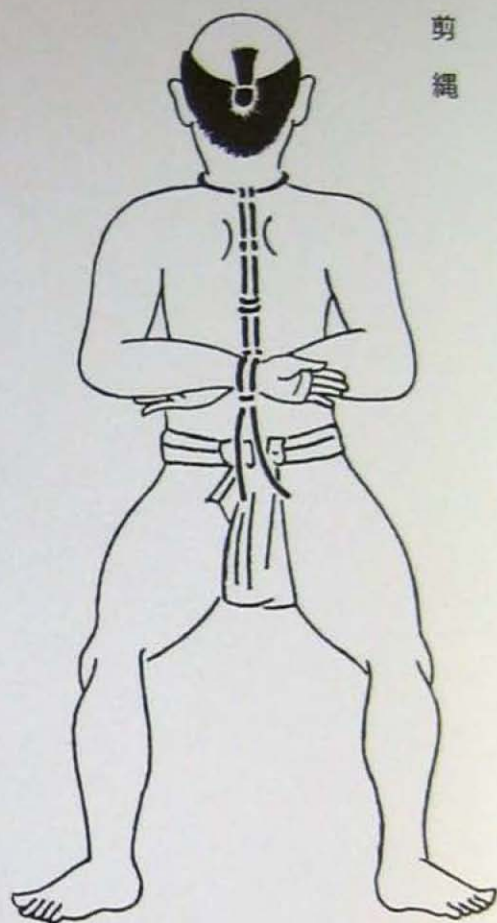
口伝

千鳥
剪縄

剪縄

沙門　山伏

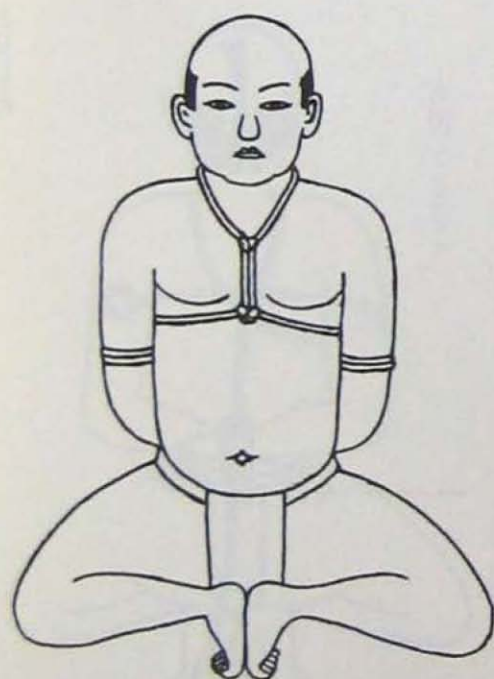
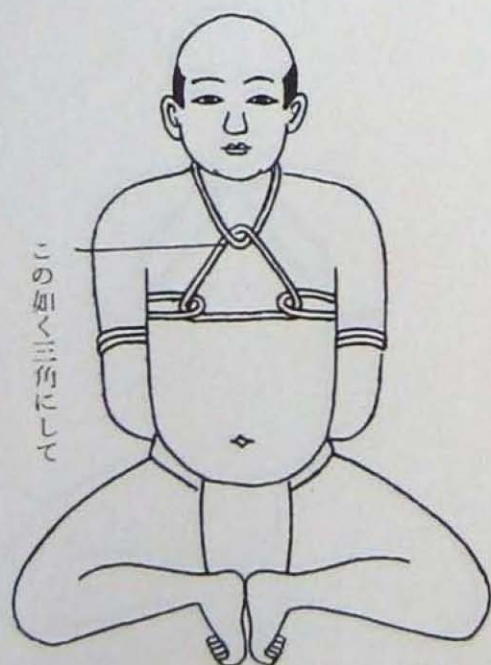
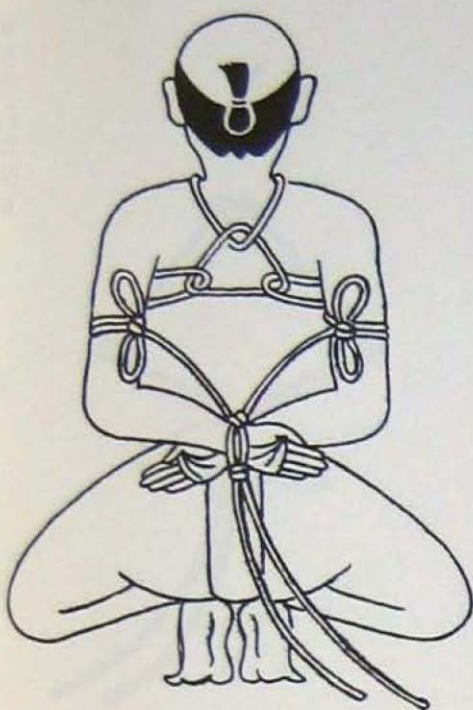
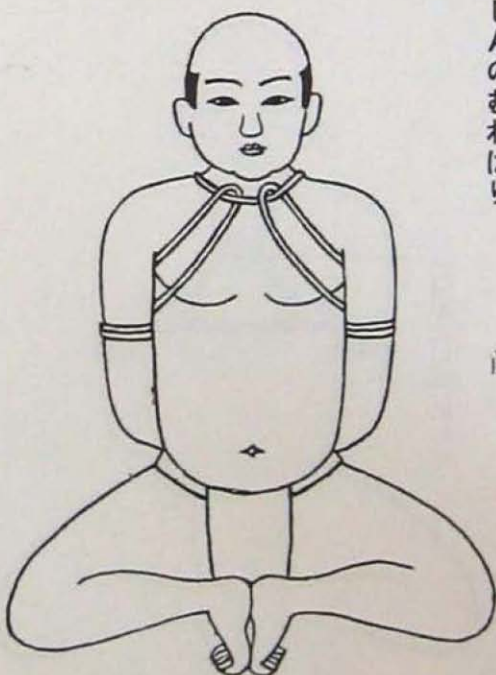
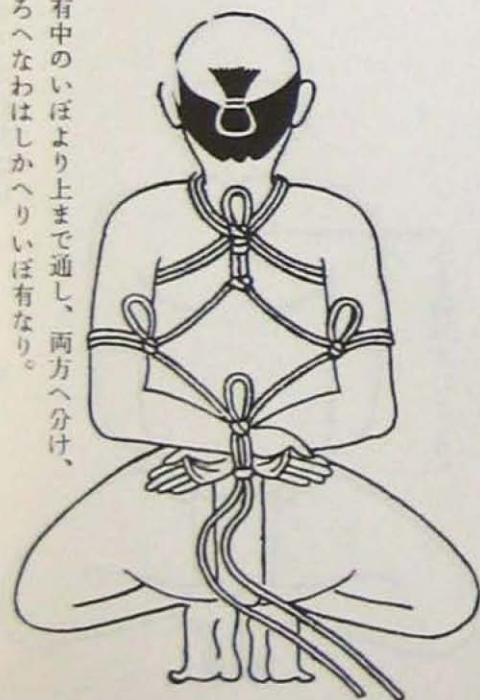
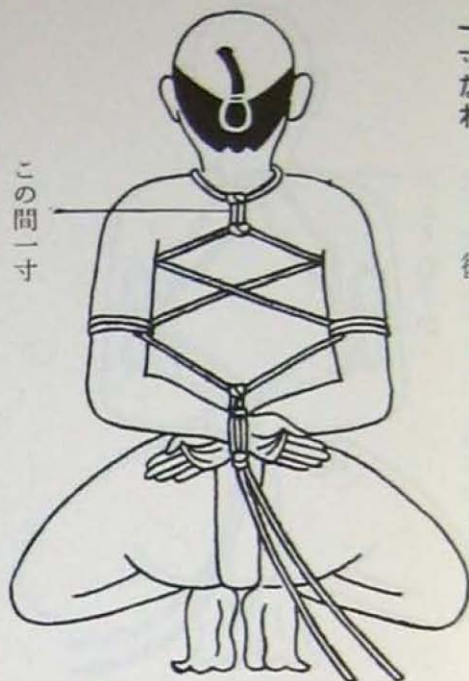
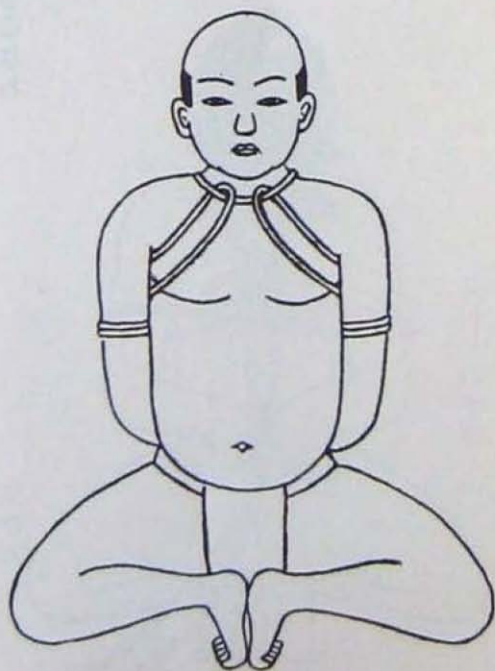
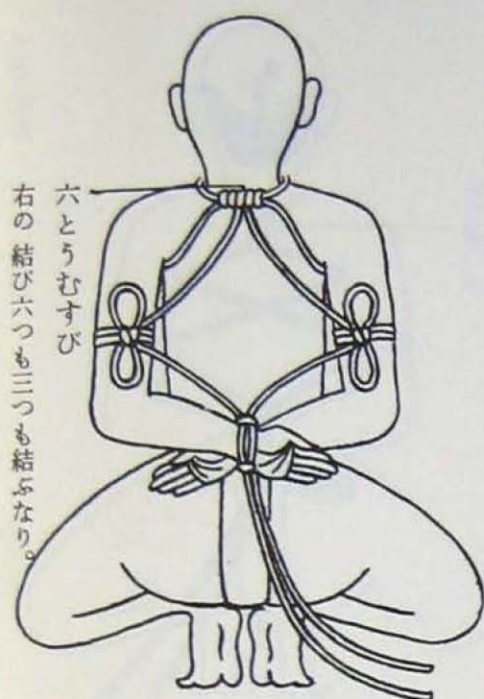
縄之伝極意

縄之伝極意

かきなわ
れんじゃく縄
まいなわ
しんのむねはり
一寸なわ
ちごなわ
わたしなわ
かいとうなわ
火付なわ
ねきなわ
ざとうなわ
くまさか

とりしめ
きりなわ
さうのむねはり
たいちつなわ
したいけ
禾(くゎ)うわなわ
けはなし
くゝり
ひつくわいなわ
やまぶし縄
わうはんなわ
くびんもとき

四寸なわ
きりなわ
きやうのむねはり
うんのなわ
女なわ
うけとりなわ
さらしなわ
はかいわけ
きう人なわ
こはんなわ
むさう

かき縄
本五ひろ　二ひろ半
右の五ひろは本なわにして、
五ひろなり。早なわにては
二ひろ半なり。
くでんあり。
四寸縄
五ひろ
なわのそく
くでんあり。
えりもとにくでんあるなり。
とりしめ
右同じことなり。
くでんあり。
れんじゃく縄
なわにては五ひろ
くつざしこ、かくれなり。
かくのごと
く書かへど
もまずはなわにてかくるなり。

きり縄
きり候節はくでんあり。
まい縄
後
五ひろ
きり縄
きり候節はくでんあり。
まい縄
前

さうのむねはり
後
五ひろ
きやうのむねはり
後
五ひろ
右このなわは大事のなわなり。
むねはりの内にても大事のなわなり。
さうのむねはり
前
きる物のまいことじ
きやうのむねはり
前
この如く三角にして

しんのむねはり
後
五ひろ
この間に両方のなわを通すなり。
この間四寸
たいちつなわ
五ひろ
しんのむねはり
前
ろんのなわ
五ひろ
ちしゃう縄有中のいぼより上まで通し、両方へ分け、もとのところへなわはしかへりいぼ有なり。

一寸なわ
後
五ひろ
この間一寸
つよきなわなり。
したひけ
後
七ひろ
この縄前に結ぶ。かけ
はじめとうよりかけるなり。
一寸なわ
前
なわふたへにして
かけるなり。
したひけ
前

禾うわなわ
六とうむすび
右の結び六つも三つも結ぶなり。

女なわ
かいむすび
五ひろ

うけとりなわ
右の縄は小手より先にかけるなり。
かへし縄とうすなり。
五ひろ

ちごなわ
あわしむすび
五ひろ

わたしなわ

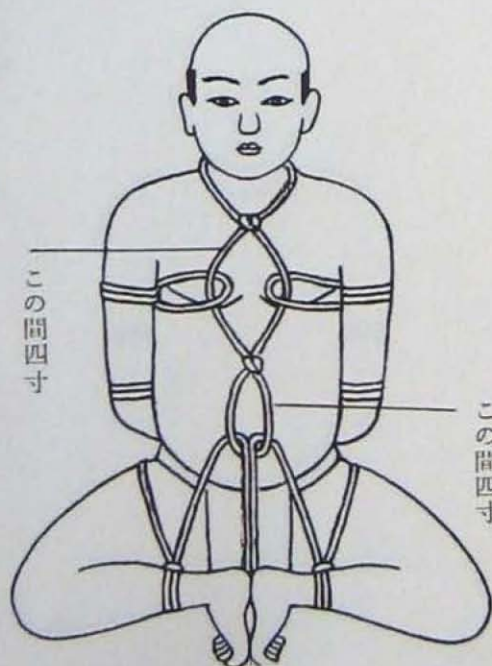
けしやう縄有　九ひろ

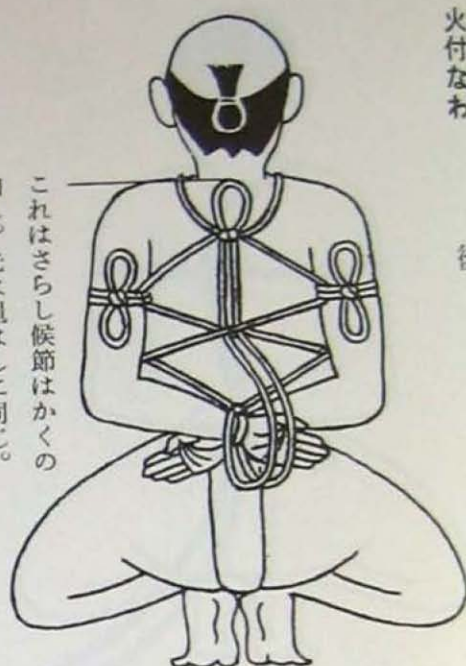
これは木七つ。右に同じ。

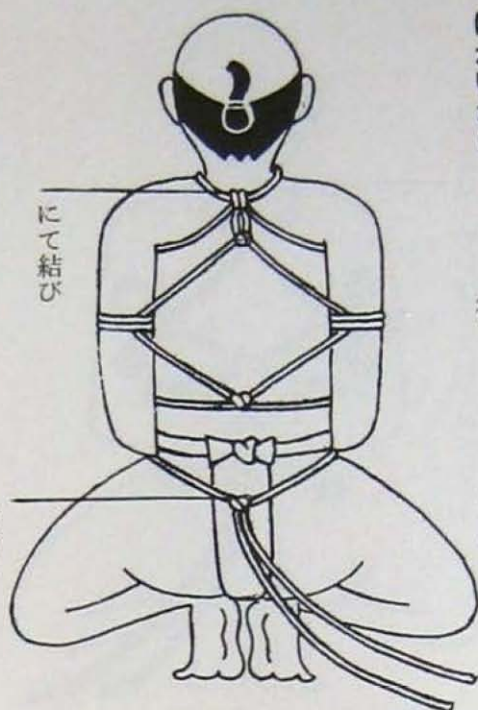
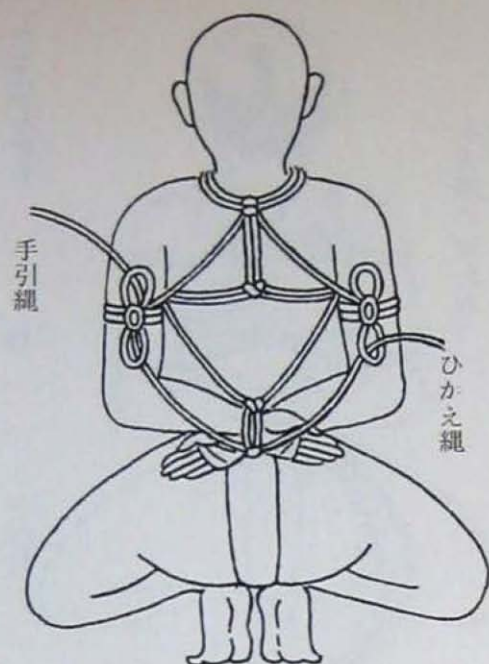
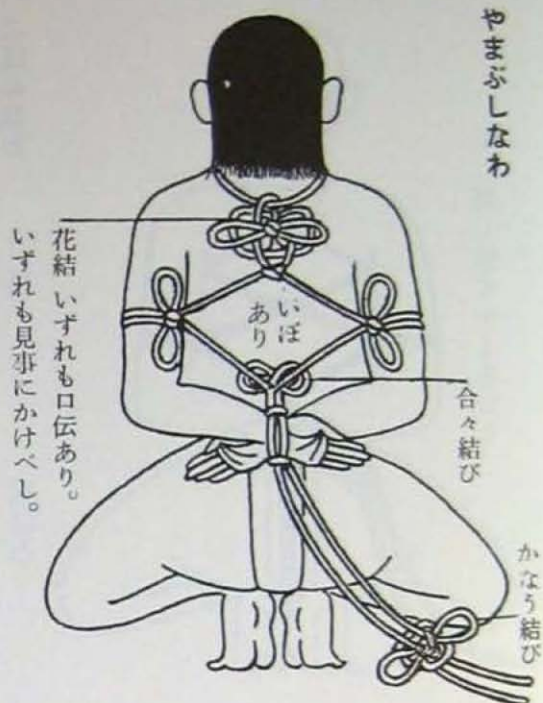
この縄は見ごと本にかくるなり。

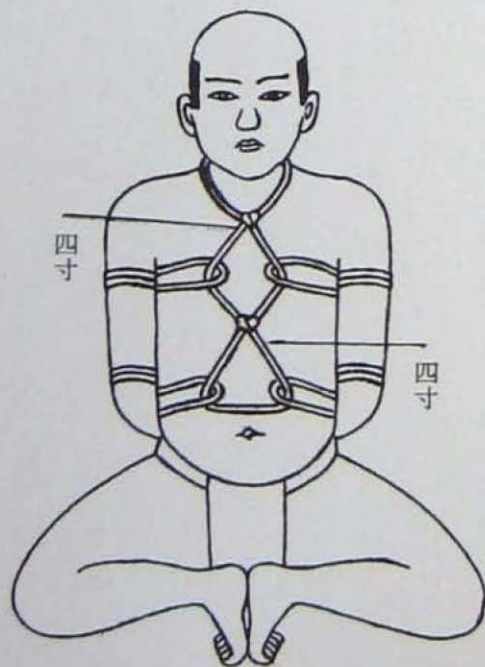
かいとうなわ　後　十一ひろ

右の縄は道中致す候間、つよくなくよわくなくかけることなり。

ふねいたのいぼ

くぐり
後
七ひろ
右見事にかけるなり。
さらしなわ
後
五ひろ
この輪はさらし棒にゆいつくるなり。
くぐり
前
さらしなわ
前
この縄前を見事にかくるなり。

火付なわ
後
七ひろ
これはさらし候節はかくの如し。先は縄はしに同じ。
ひっくわいなわ
後
五ひろ
さらす節はこのいぼになわとおすなり。
火付なわ
前
みつの火結ぶなり。
ひっくわいなわ
前
右の結び見事に
いんした結び

はかいわけ
後
にて結び
いぼなり
五ひろ
ねぎなわ
後
五ひろ
はかいわけ
前
ねぎなわ
前

やまぶしなわ
花結 いずれも口伝あり。
いずれも見事にかけべし。
いぼあり
合々結び
かなう結び
ざとうなわ
後
手引縄
ひかえ縄
五ひろ
きう人なわ
五ひろ
ざとうなわ
前
このはしさけるなり。

わうはんなわ
後
七ひろ
右大事のなわなり。
強くかくるなり。
こはんなわ
後
五ひろ
右に同じ強くかくるなり。
わうはんなわ
前
四寸なり
こはんなわ
前
四寸なり

くびんもとき
後
右の縄大事のくでんあり。
十三ひろ
くまさか
後
右大事のくでんともあり。
五ひろ
くびんもとき
前
四寸
四寸
くまさか
前

むさう
縄なしにかくるなり。

縄之記

縄之記

早縄
切縄
陰縄 前
高手縄
一国大将生捕縄
位上之縄
位下之縄
軍陣之縄 後
船中之縄 前
花結縄 後

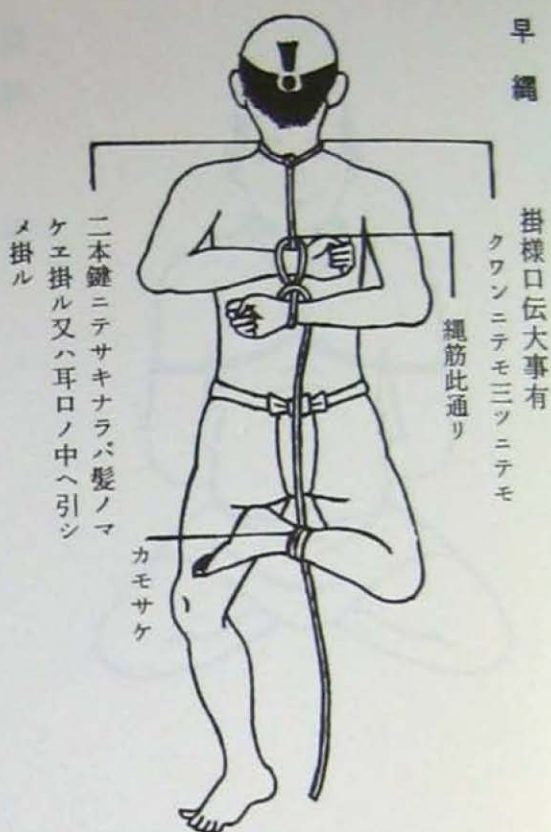
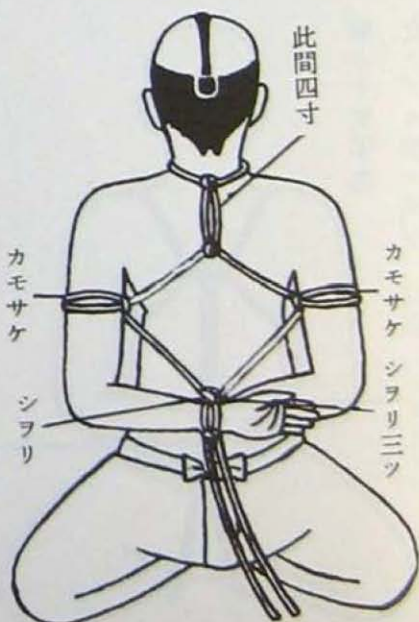
雲走縄
陽縄
出家縄
割縄
分見縄
位中之縄
紫縄 後
軍陣之縄 前
武羅小籏武者 後
花結縄 前

四寸縄
陰縄
三尺縄
小手縄
大将縄 前
位中之縄 前
紫縄 前
船中之縄 後
武羅小籏武者 前
羽武者縄

早縄
掛様口伝大事有
クワンニテモ三ツニテモ
縄筋此通リ
二本鍵ニテサキナラバ髪ノマ
ケエ掛ル又ハ耳ロノ中ヘ引シ
メ掛ル
カモサケ
雲走縄
クワン又ハ三ツ
帯ニテモトメル
四寸縄
伝に曰縄掛ヲキユルミ候ハ、結目へ塩水を吹ベシ
此間四寸
カモサケ
シヲリ三ツ
カモサケ
シヲリ
四寸上下の玉ハ天地陰陽之口伝
切縄
此所引コケ
ハ首の縄ト
ケル也
首切様ニ口伝
有縄ニ疵ヲ付
ベカラズ 勿
論血モ付ヘカラザル様ニ心得ヘシ
カモサケ
シヲリ
カモサケ
シヲリ三ツ

陽縄

前ヲハ十文字
ニカクルベシ

陰縄　前

此所ズヒブン
高ク左右同シ

シヲリトメ

シヲリトメ

陰縄　後

此間四寸

此所高ク
左右同断

シヲリトメ

シヲリトメ

出家縄

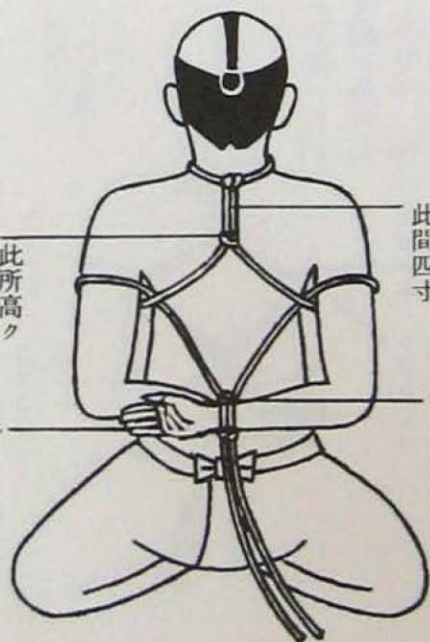
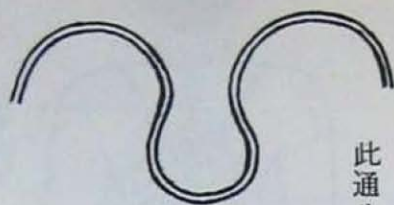
前ハ十文字也
女ナドニ掛ル同シ　口伝

シヲリトメ

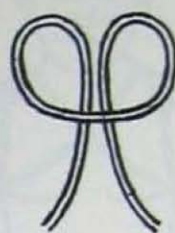
シヲリトメ

三尺縄

輪入チガヘニ子
チリ割ヘシ

割縄

此通リ子ヂリ
手カ子指此縄ニテ割
也縄ノ余リニテ帯ニ結
付手ヲ上ニ上ケサセ間
敷也　抜ノ時ノ為也

高手縄

小手縄

此玉筋テモ同シ
然レドモ天地陰
陽ノ玉ナレバ有テモ可ナリ

一国之大将生捕縄
紫
此間四寸
花結び
三寸
大将縄之前
如此
分見縄
此縄ウシロニテシヲリトメ
親指をカモサケニシメル　但シ親指ハ帯ノ下ヘノ縄見エザル様ニ帯ノ下ヘ入ル　左右同断
左右トモニ縄カケシト見ヘザル也
位上之縄
首
腕
腕
三寸トメ
シヲリトメ

位中之縄 紫

紫縄

位中之縄 前

位下之縄 黒

紫縄

前

軍陣之縄

前

軍陣之縄

黄

船中之縄

浅黄

船中之縄

前

武羅小旗武者

黄

武羅小籏武者

前

此間八寸上ルベシ

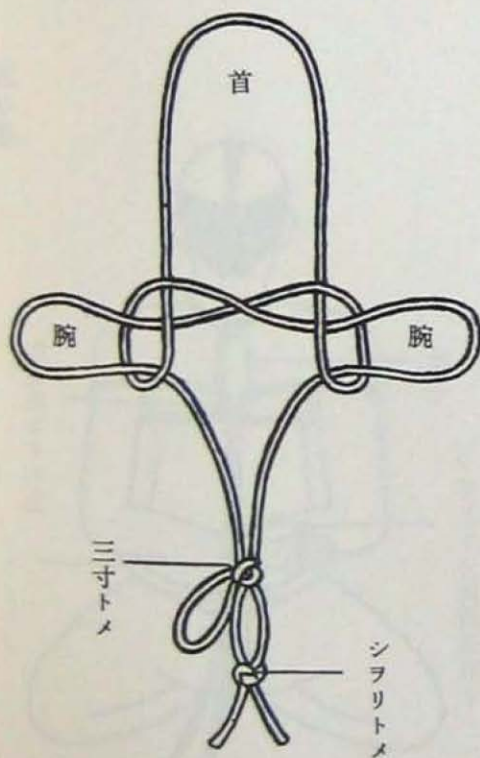
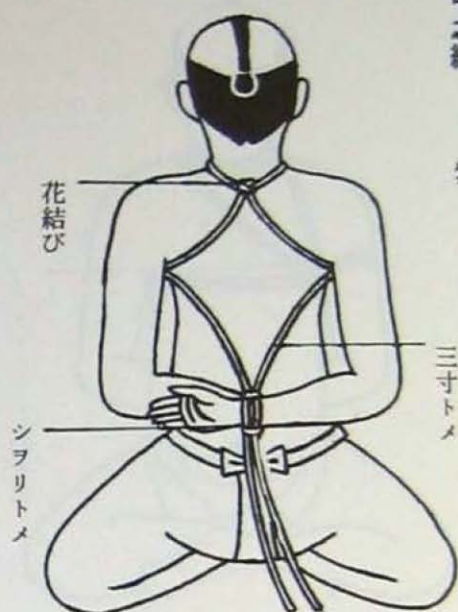
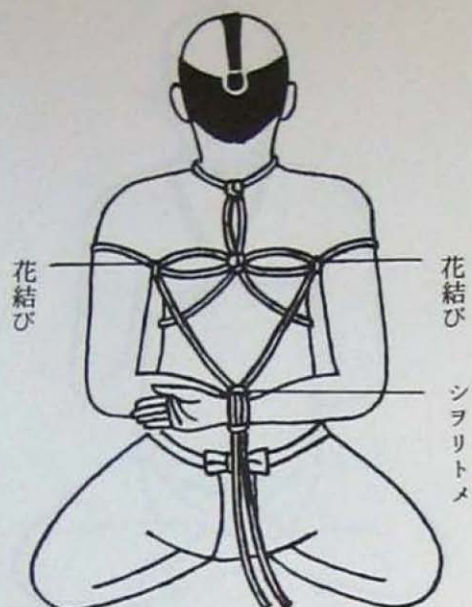
三寸

此縄前ヘトル

花結縄

前

花結縄

左右入チカエ引コキワヘトヲス

左右入チカエ引コキ輪ヘ通シ　下ヘトルベシ

花結ビ

三寸トメ

シヲリトメ

羽武者縄　青

前ハタテニ子ヂル也

上ヨリ下ヘトリワキエ引出シ上ノ縄ノキノニテ花結ビニスヘシ夫ヨリ下ヘトル也

三寸トメ

シヲリトメ

大正流　劒徳流

大正流剱徳流

評定縄（諸中縄）
不動空縄（番不入）
女　縄（真行草）
行人縄（真）
真諸縄
盲女縄
桔梗縄

村　渡
道中縄
出家縄（真行草）
小姓縄（真行草）
真片縄
捨　縄（真行）

国　渡
遠嶋縄
山伏縄
非人縄（真草）
座頭縄（真行草）
亀　縄（真草）

大正流は劔徳流より出で改名したものである

一　早　縄　引すへ　大渡　藤の実　取鉤（小糸口て指を結ぶ類皆此内なり）

二　評定縄　諸中縄　この縄は何れへかけてもあやまりなし

三　村渡（後前）　四　国渡（後前）　五　不動空縛（番いらずともいう）　六　道中縄

七　晒　縄　これは晒す時の事なり　たとえば三日晒す時は三品、七日晒す時は七色にかけ替るなり
其縄は皆秘伝なり　何様ともきやにかけべし　前後にはをり有様にかける事也

八　免　縄　国渡しの縄と同じ　只手を留る所を留ずしてひかへ置くなり　とき様口伝秘事

九　指　渡　二人にてかくる惣名なり　相縄　千鳥縄の類なり

十　遠嶋縄　十一　火罪縄　十二　女縄（真行草）

十三　出家縄（真行草）　十四　山伏縄　一山之山伏に懸

十五　行人縄（真）
社人の類を縛るには鳥居懸なりとも又行人縄なり共かくべし　只前へ手をする様にするなり　何れも手の留の余り所を華曼にするなり

十六　小姓縄（真行草）

十七　非人縄（真草）　同じく非人の女悴　盲目の男女の縄

十八　真諸縄　十九　真片縄

二十　座頭縄（真行行）

廿一　拾　縄（切縄の事なり）

廿二　亀　縄（真草）　廿三　ききやう縄

廿四　士縄　首と手へ紙を巻く事なり

右何れも真行草有りとあれども此三段に別れたる有　別れざる有一品も有　二品づつも有也

口伝之巻

一　頭きんとめ　二　けさとめ　三　けさんとめ

四　註連留　五　舟はしり　六　仏留

七　花結　八　両眼　九　運之留

十　成仏留

此の留より後の六ヶ条は伝巻目録になけれど常に用ふるなり

十一　とんぼう留　十二　逆蜻蛉　十三　筒留

十四　組留　十五　蝶留　十六　海老形　極意四箇条

一　筓縛　一　揚技縛　一　針縛　一　袖縛

評定縄　諸中縄ともいう。この縄はいずれにかけてもあやまりなし。

前

村渡

前

評定縄　諸中縄ともいう。

後

村渡

後

国渡　前

不動空縛り　番不入ともいう。

国渡　後

道中縄

遠嶋縄

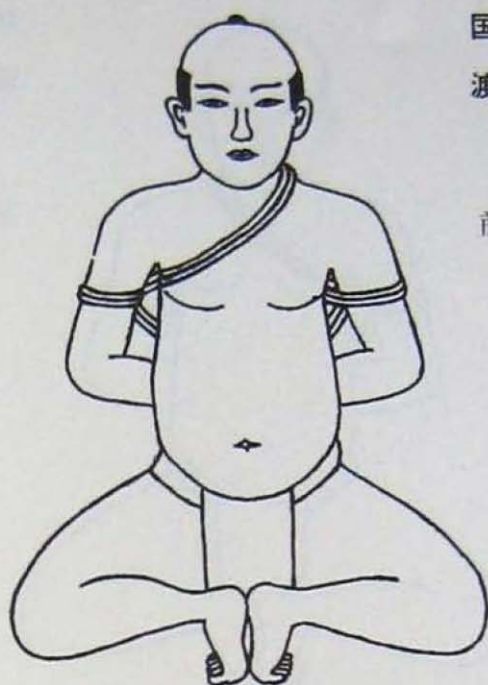
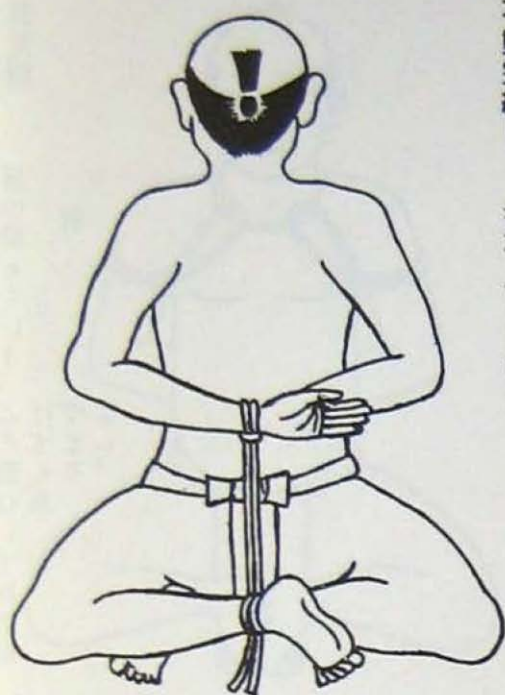
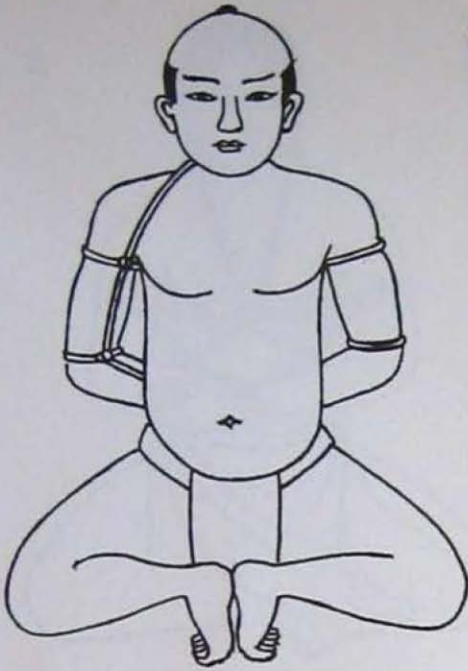
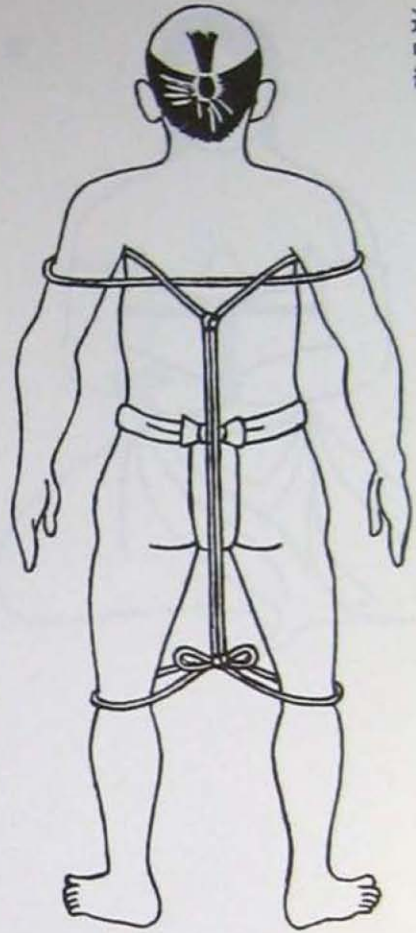
前

遠嶋縄

後

女縄　真

女縄　草

女縄　行

出家縄　真

出家縄　行　前

社人の類を縛るには、鳥居懸なりともまた行人縄なりともかくべし。ただ手は前にするようにし、手の留の余り所はけまんに結ぶことなり。

出家縄　行　後

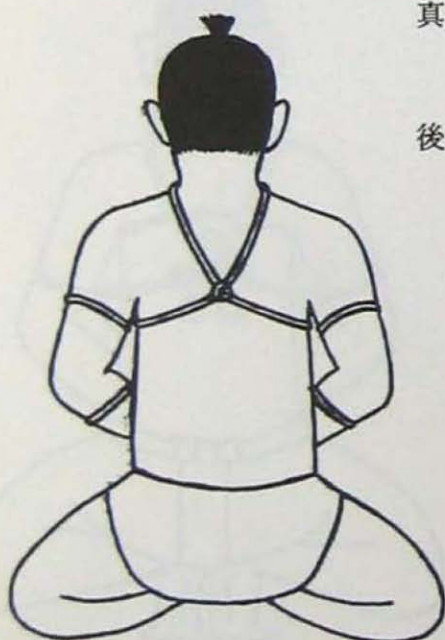
出家縄
草
前
山伏縄
前
出家縄
草
後
山伏縄
後

行人縄
前
一山之山伏にかける縄
前
行人縄
後
一山之山伏にかける縄
後

行人縄
真
前

小姓縄
真
前

行人縄
真
後

小姓縄
真
後

小姓縄　草　前

小姓縄　行

小姓縄　草　後

小姓縄　行　前

小姓縄

如此も草の内

前

非人縄

真

小姓縄

草

後

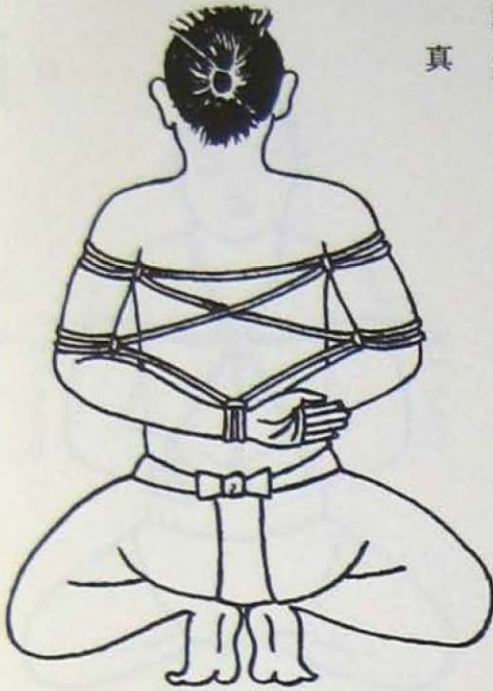
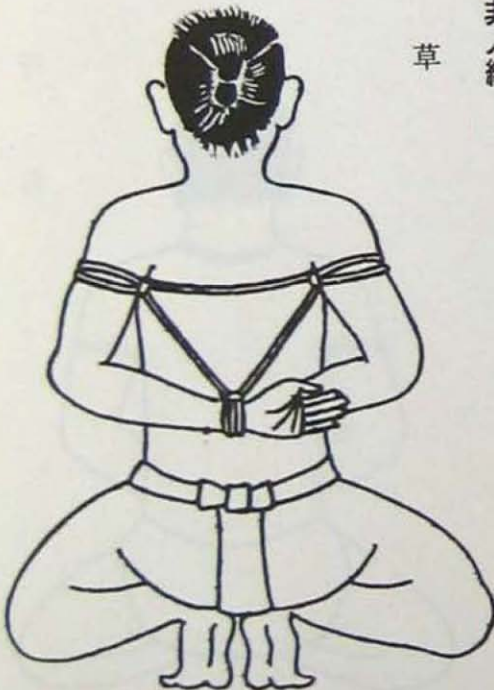
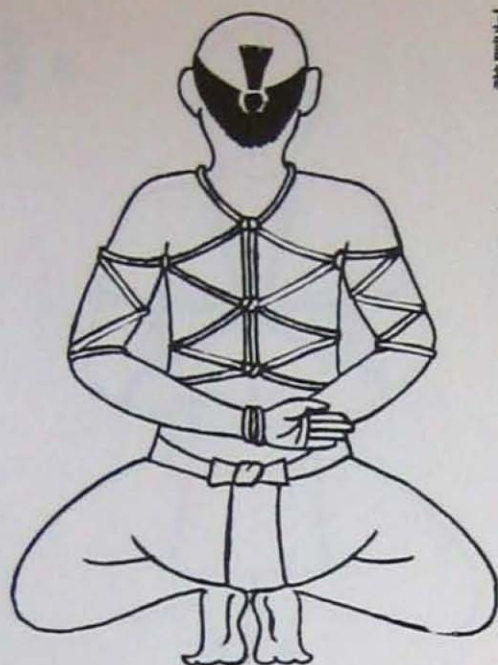
非人縄

草

真諸縄

前後同じ

非人の女倅にかける縄

真片縄

前後同じ

非人盲目男女

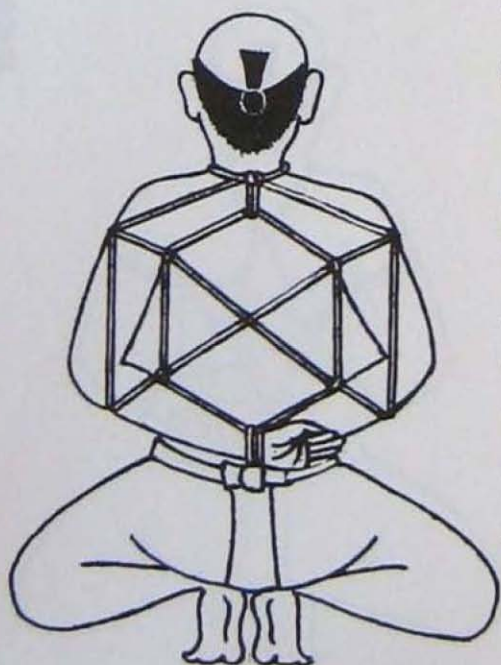
座頭縄　真

座頭縄　草

座頭縄　行

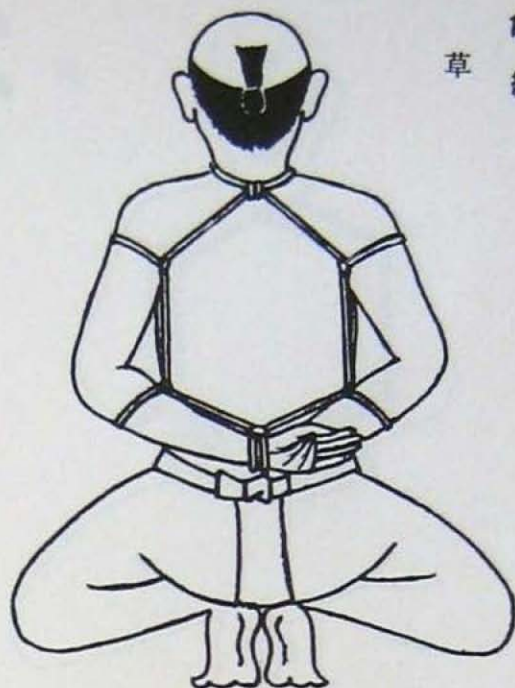
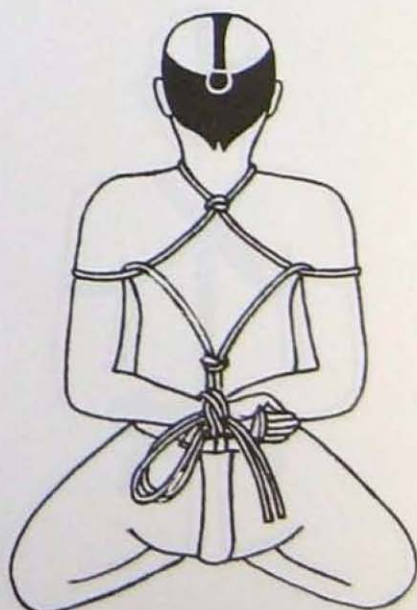
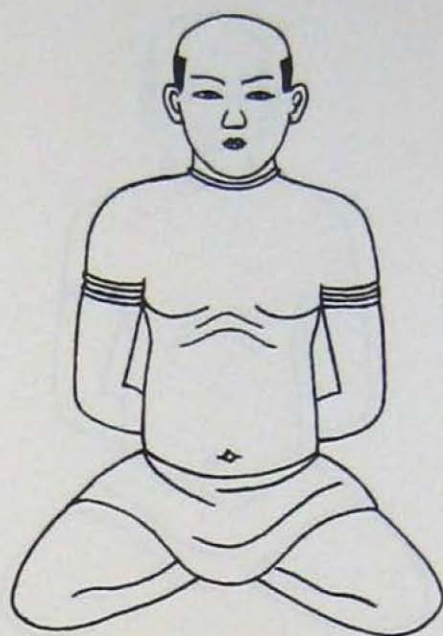
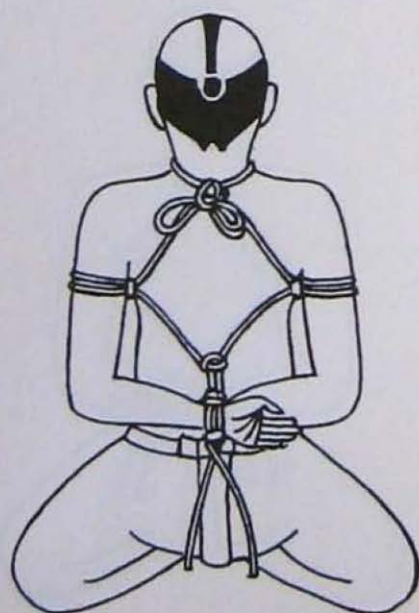
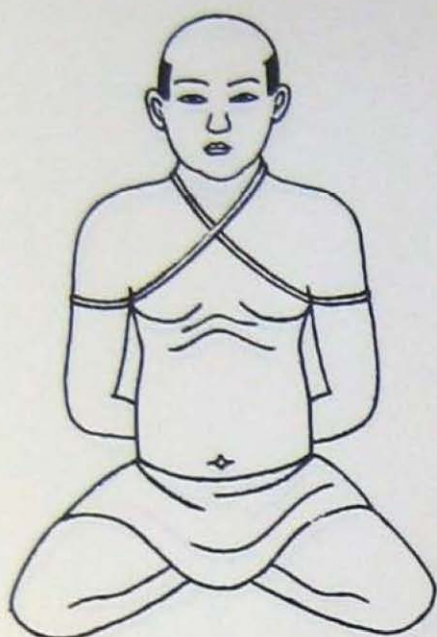
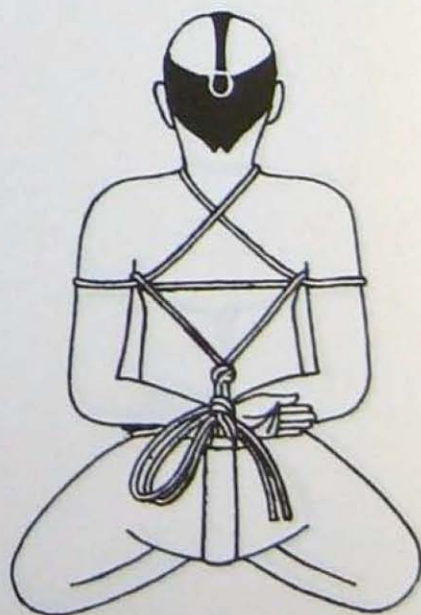
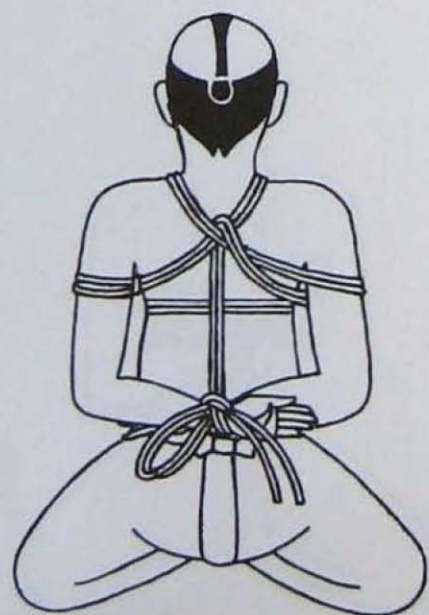
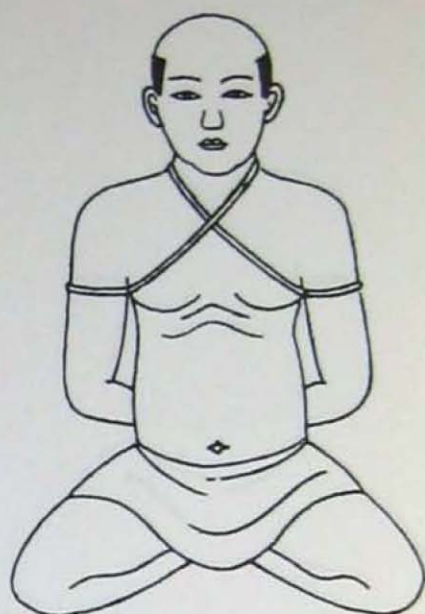
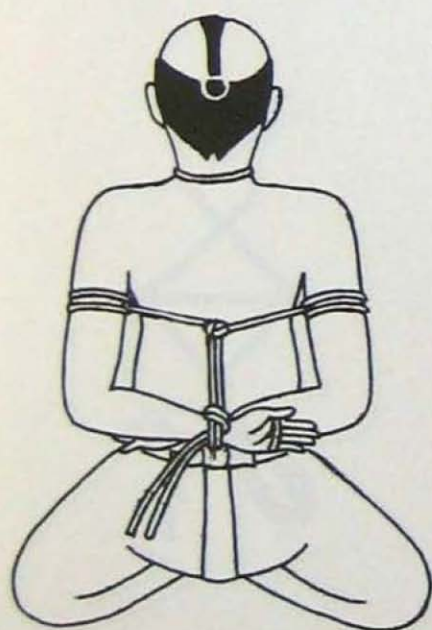
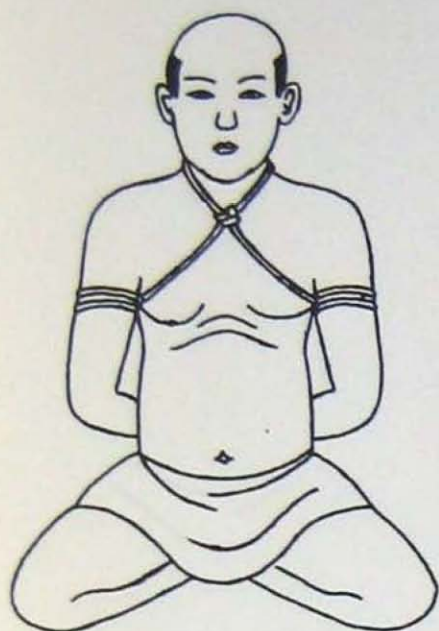
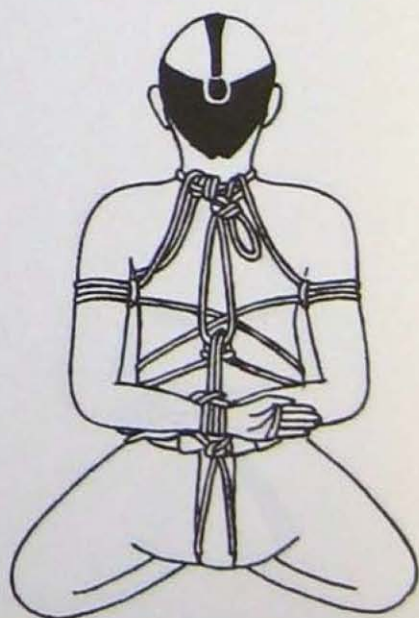
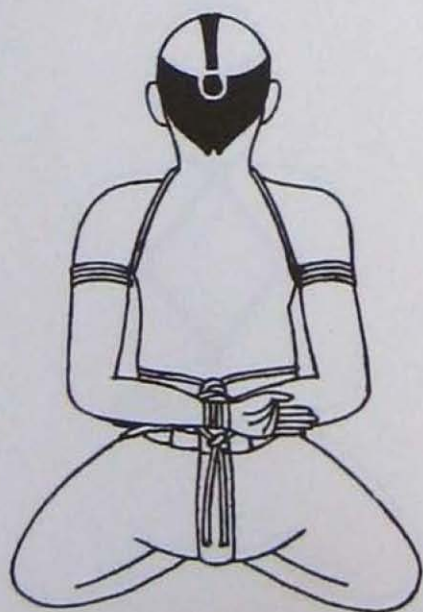
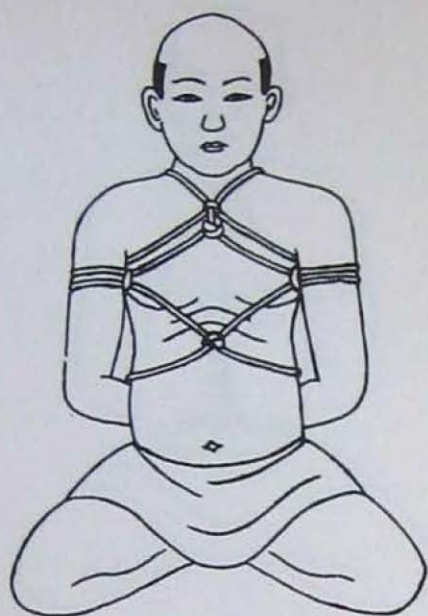
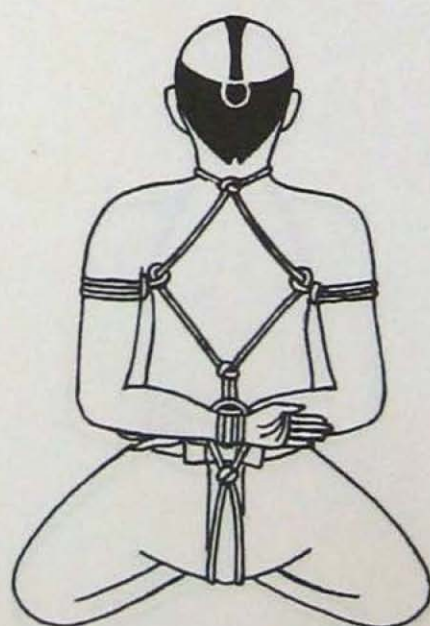
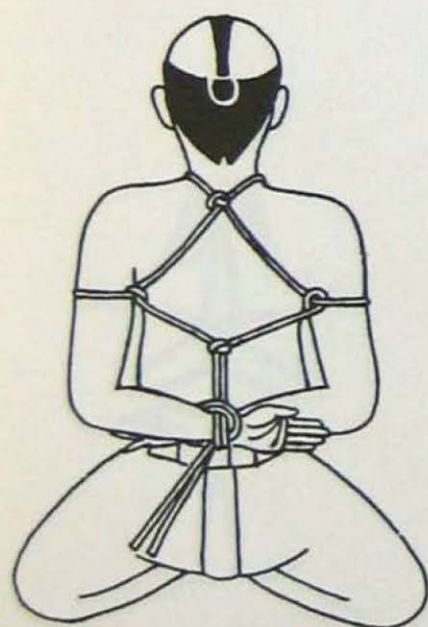
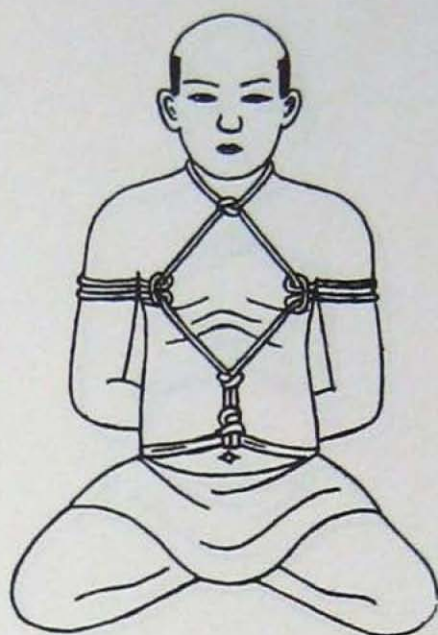
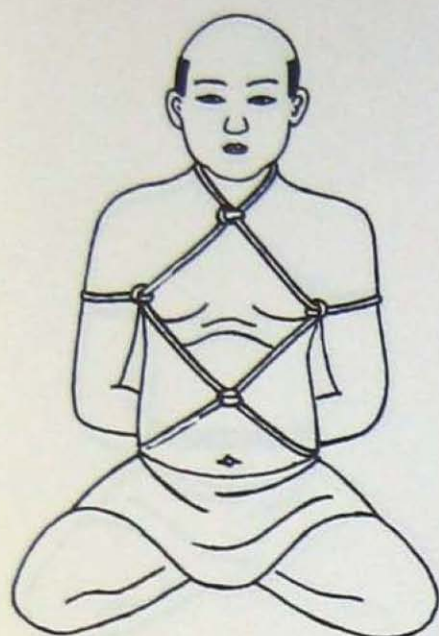
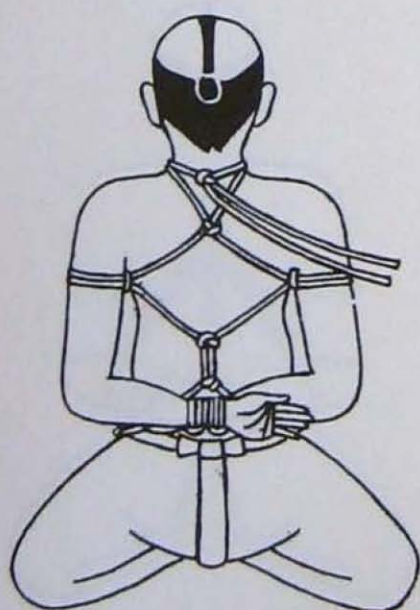
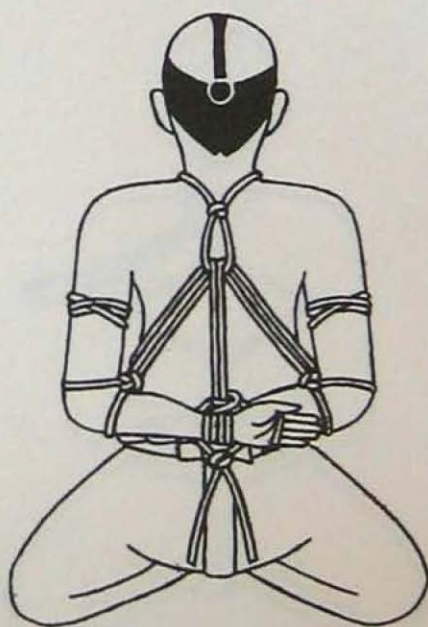
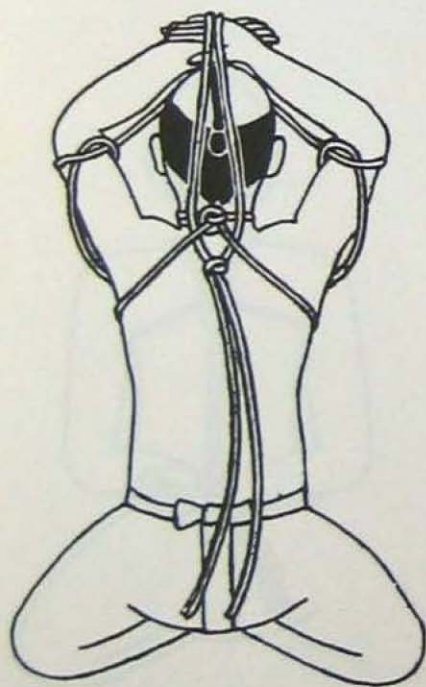
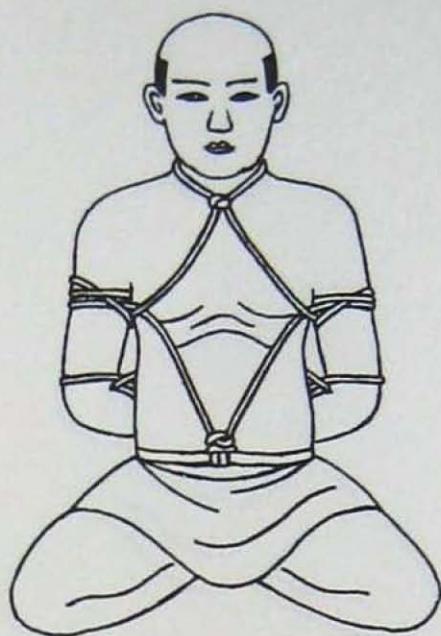
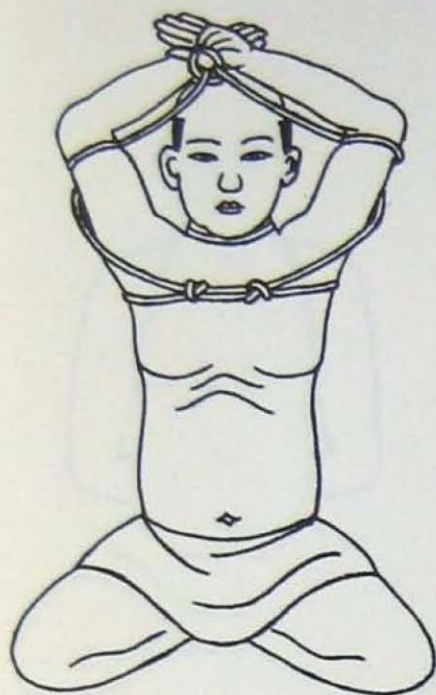
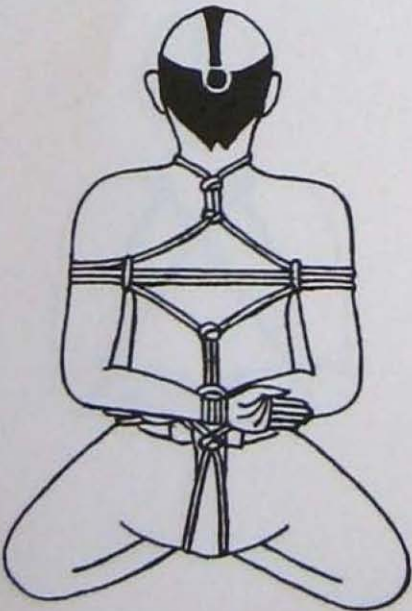
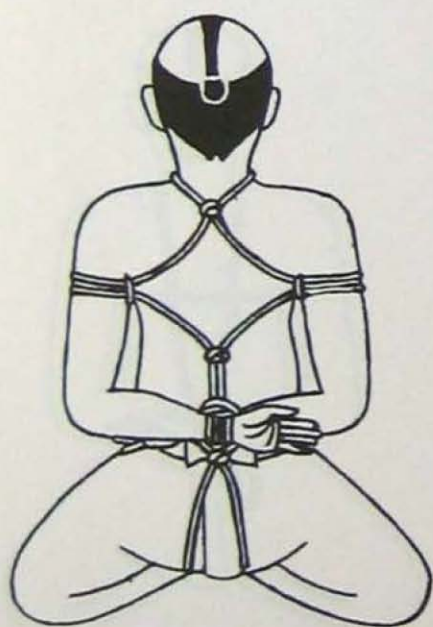
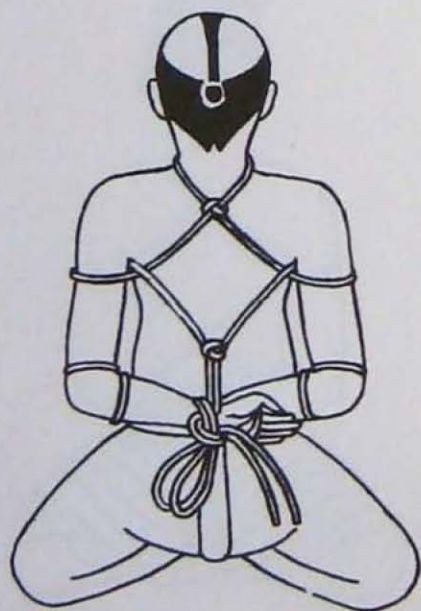
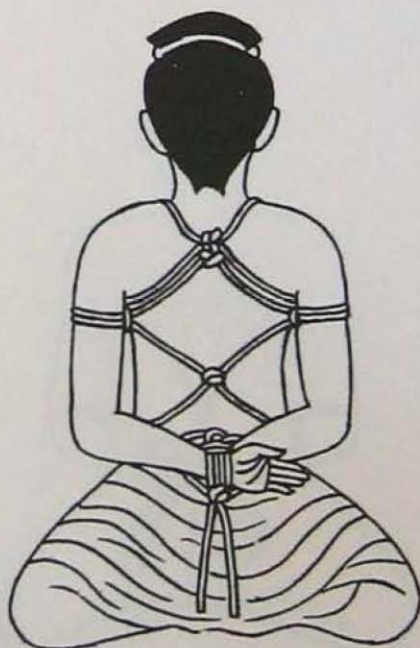
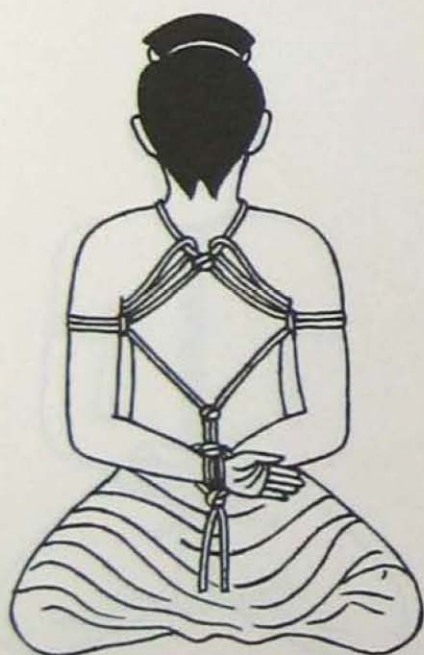
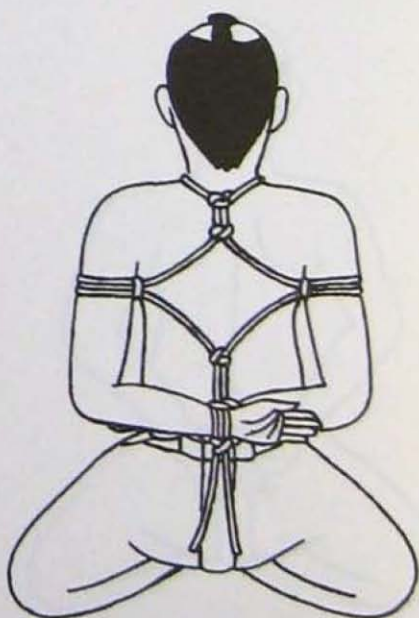
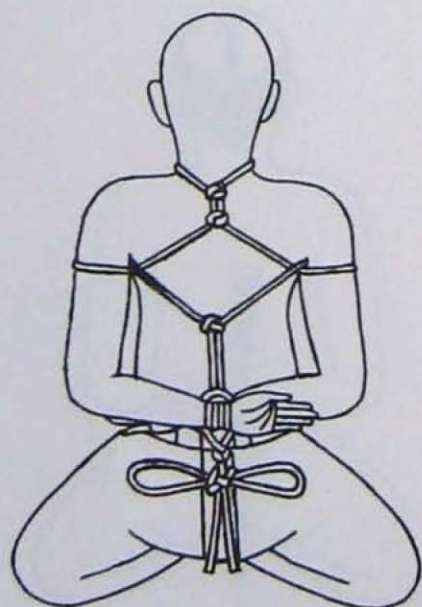
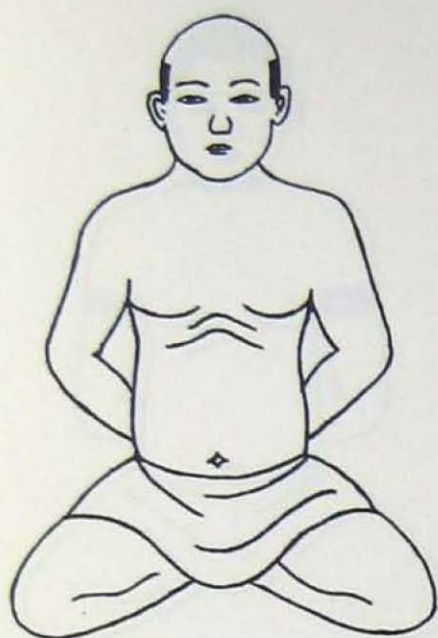
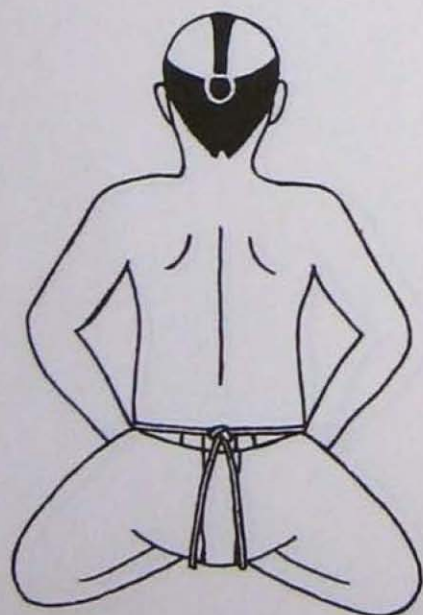
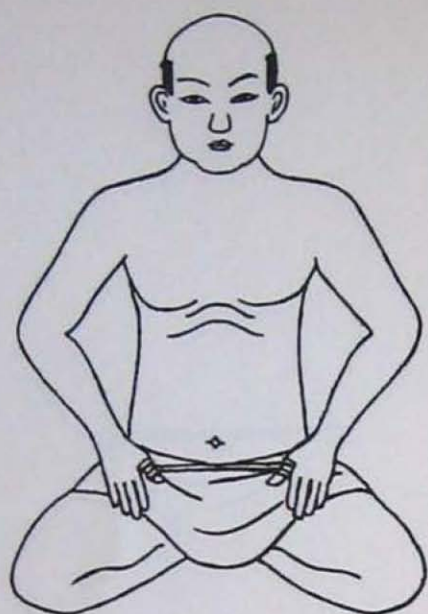
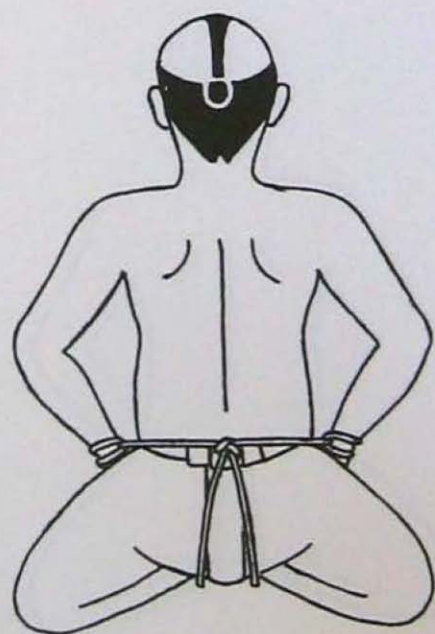
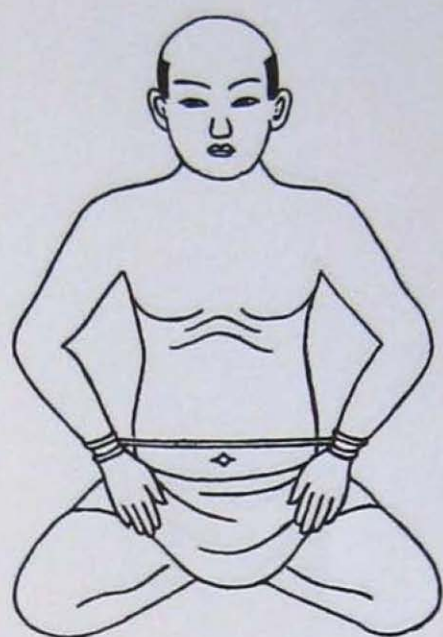
盲女縄

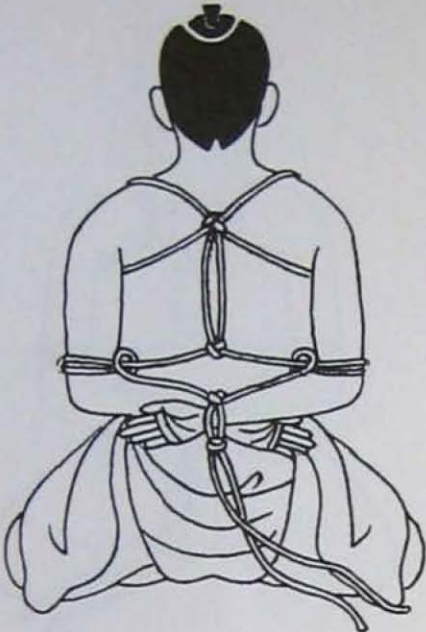
盲女いかようにかくるとも、両眼に留ることなり。

捨縄
真
切縄のことなり。
切付このところをときて縄の余りと一つにひかえる。
このところひかえるなり。
亀縄
真
かへくくしの上またよく留めるなり。
捨縄
行
さっと留めて置くなり。
ひしととけぬようにいぼによく留める。そのまま捨てる心なり。
亀縄
如斯なるを真という伝もありなり。

亀縄
草

桔梗縄（ききょうなわ）

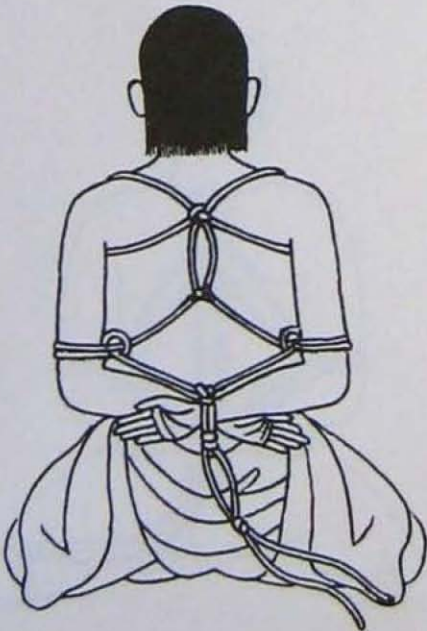
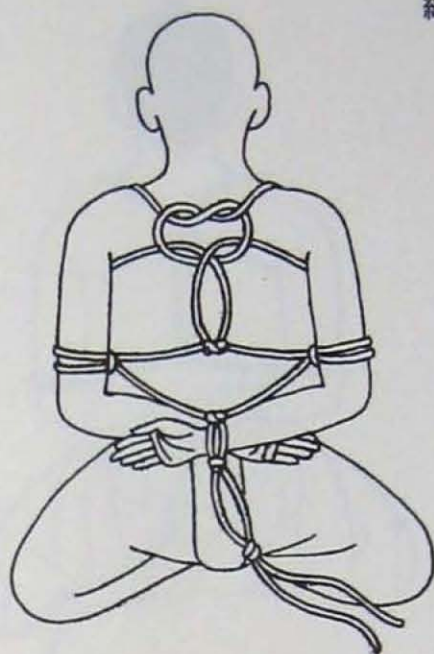
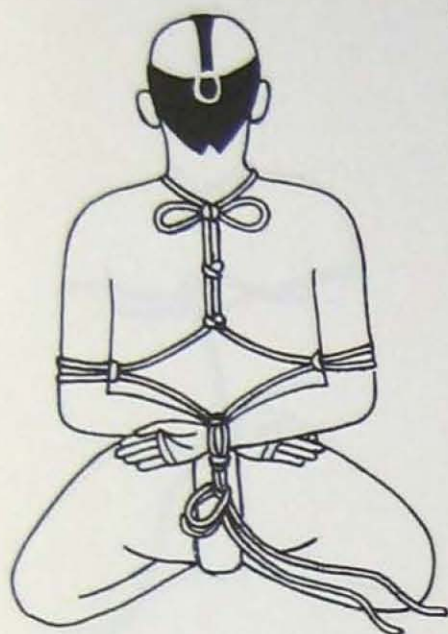
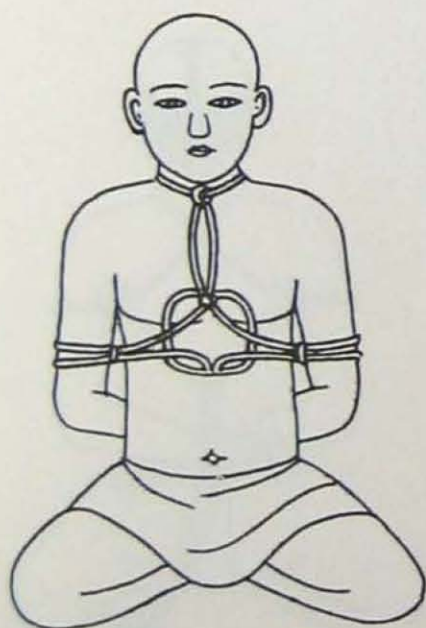
新影治源流

新影新抜流

新影新抜流

早縄くわん縄　かぎ縄　ひっかけ縄　長　縄　児童女縄　社人山伏縄
出家縄　スミ矢倉　対決縄　出家社人晒縄
伏　縄　高　上

早縄

児童女縄

長縄

社人山伏縄

スミ矢倉

出家社人晒縄

伏縄

高上

縄之伝極意

縄之伝極意

縄九箇極意

早　縄	拾三ヶ傳
本　縄	七ヶ傳
腰　縄	二ヶ傳
吟味縄	九ヶ傳
女　縄	三ヶ傳
僧　縄	三ヶ傳
贈　縄	九ヶ傳
道中縄	一ヶ傳
切　縄	二ヶ傳

縄九箇之開図　四拾八筋左記

早縄

前

腰縄

前

後

後

同
前

切縄
前

後

後

早縄

前

同

前

後

後

同
前

同
前

後

後

同

鍵早縄

同

同
前
同
前
後
後

早留
前

同
前

後

後

本縄
前

道中縄
前

後

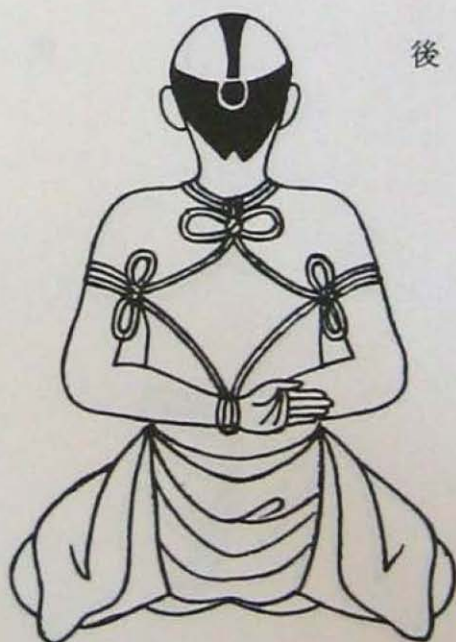
後

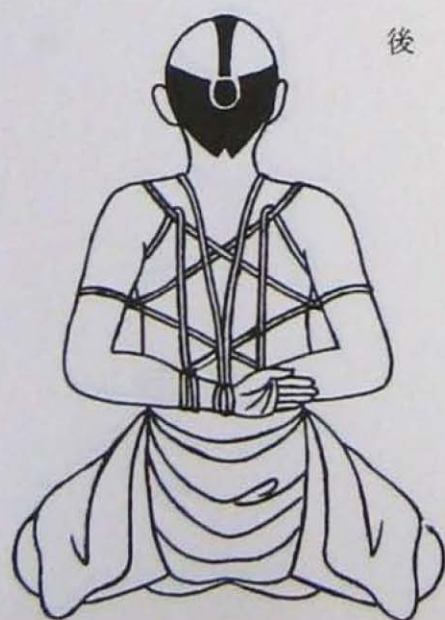
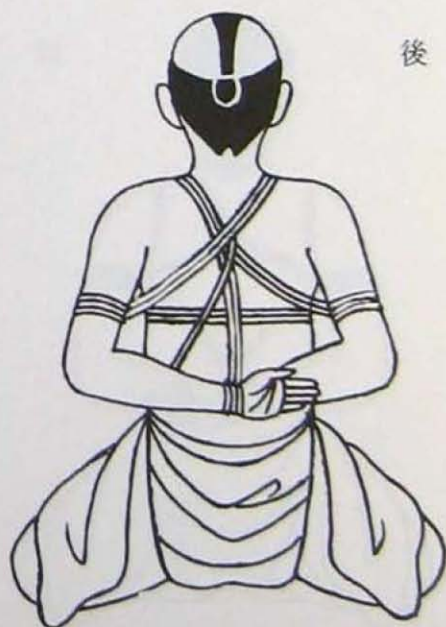
同

前

隠二口授

前

後

後

本縄

前

同

前

後

後

同前

同前

後

後

同
前

同
前

後

後

吟味縄

前

後

同

前

後

同
前

同
前

後

後

吟味縄翅じめ

前

同

前

後

後

逆縄翅じめ

前

後

同

前

後

女縄

前

送り縄

前

後

後

同 前

同 前

後

後

僧縄
前
同
前
後
後

贈縄　渡し縄ともいう

前

同

前

後

後

同

前

後

同

前

後

同
前

同
前

後

後

同前

同前

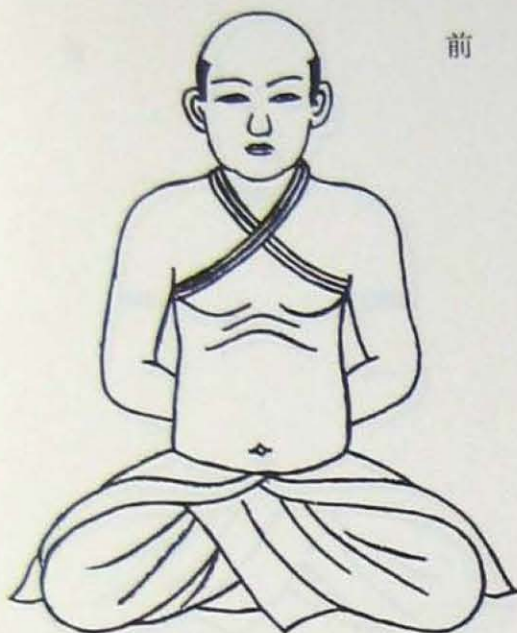
同後

後

道中縄

前

後

縄之古術

夫れ縄之儀は　天神七代　地神五代を表して本縄の長尺を定め七尋半を定尺と極む　是蛇口は日月星を以て三つ指韮を尺として五行を表し不動の神力を以て悪魔たりとも比縄を以て不止事なし　かるが故に五行とす　一尋半を早縄とす　二尋半中の早縄　三尋半上の早縄半上の早縄とす　五尋より以上本縄に近し　何れ不動の神明を受けいましむるといへ共無心無限の身として臍下に満る事第一に執行なすべし

本縄封印は是軽からざる故口授可秘

笹井流縄縛図

笹井流縄縛図

大用縛陰之真行草之事
大用縛陽之真行草之事
大用略縛六様之事
惣略縛六様之之事
惣縛陰之真行草之事
惣縛陽之真行草之事
攤縛陰之真行草之事
攤縛陽之真行草之事
攤略縛六様之事
要縛陰之真行草之事
要縛陽之真行草之事
要留縛六様之事
縮縛陰之真行草之事
縮縛陽之真行草之事
縮略縛六様之事
伸縛陰之真行草之事
伸縛陽之真行草之事
伸略縛六様之事

大用縛陰之真行草之事

大用縛陽之真行草之事

草

行

真

大用略縛六様之事

惣略縛六様之事

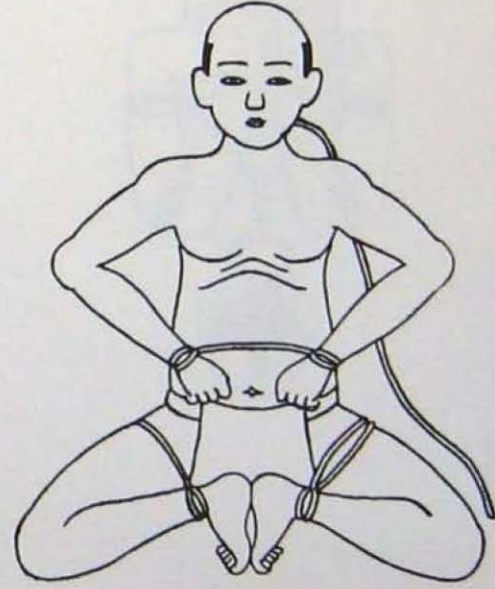
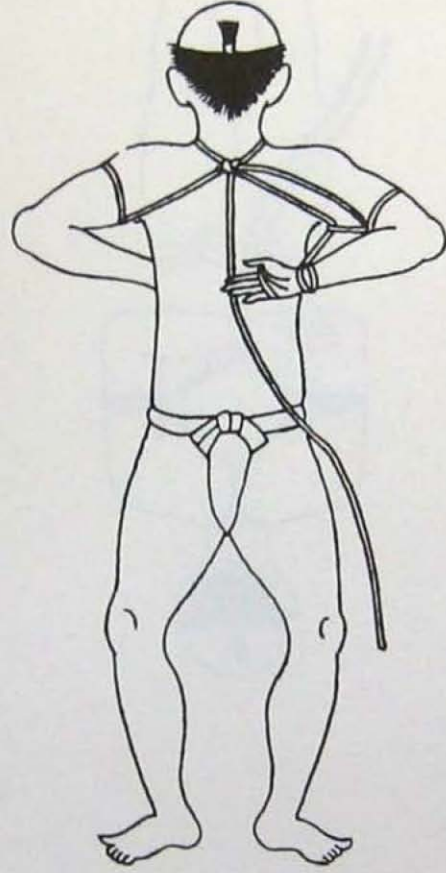
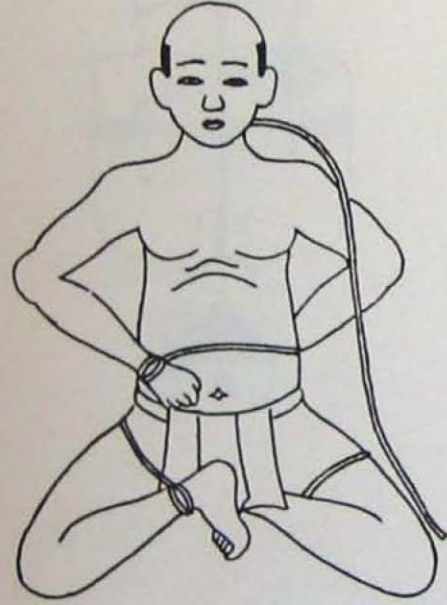
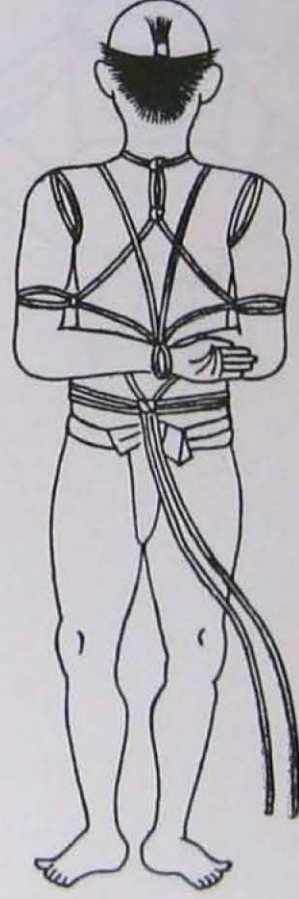
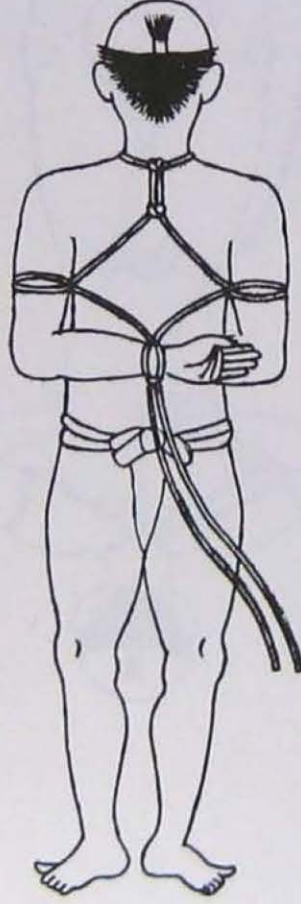
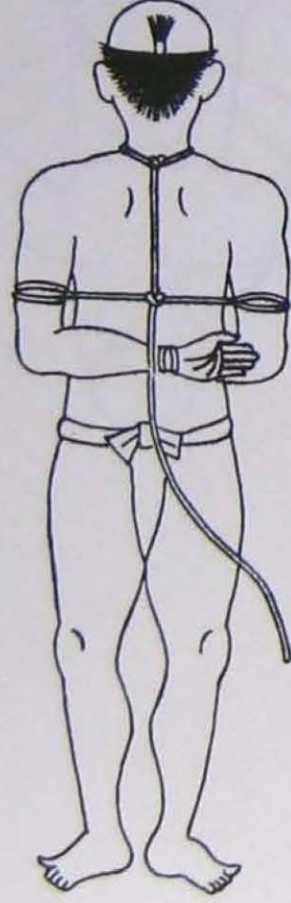
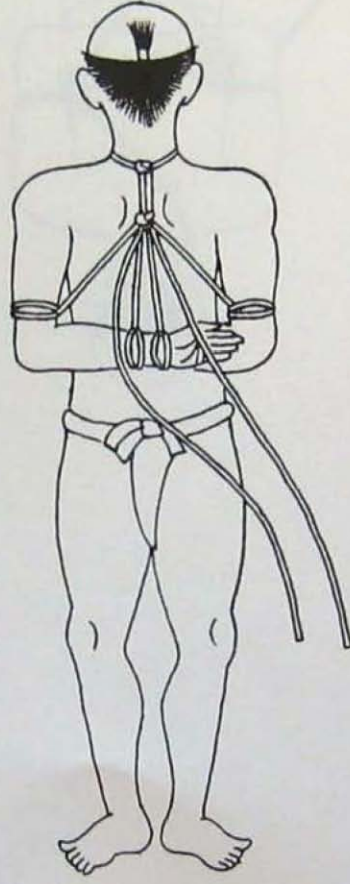
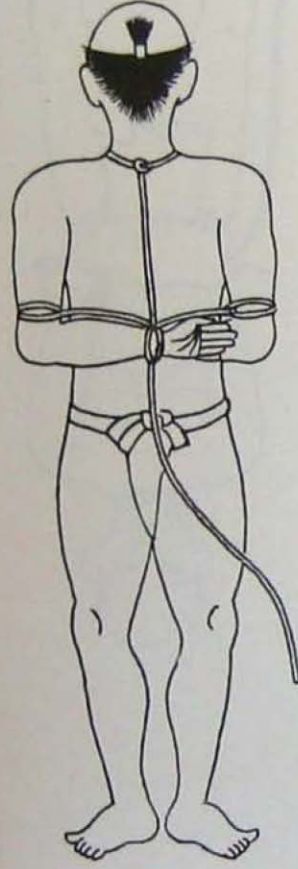
惣縛陰之真行草之事

惣縛陽之真行草之事

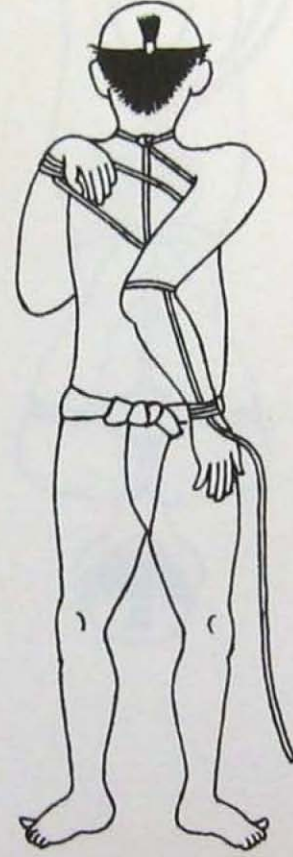
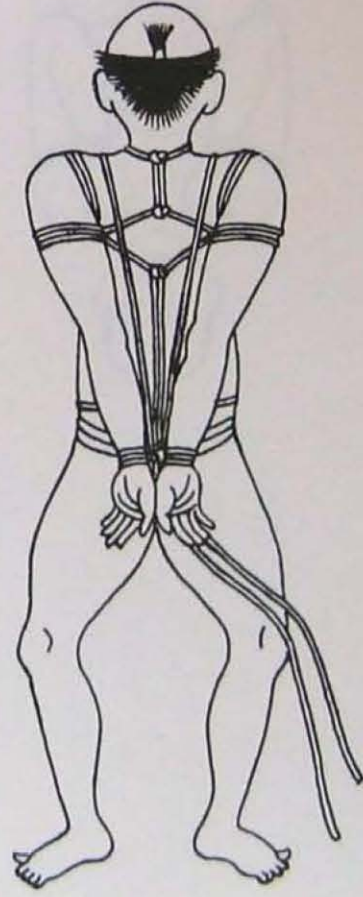
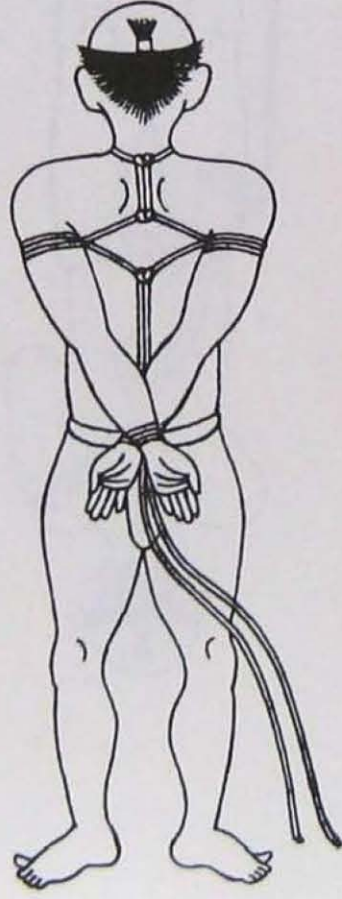
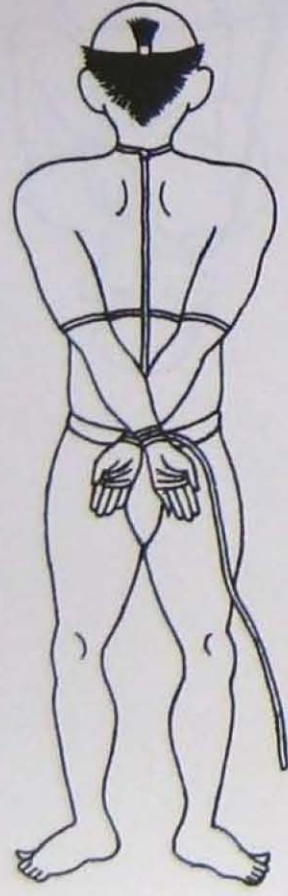
攤縛陰之真行草之事

攤縛陽之真行草之事

攤略縛六様之事

簑井流縄縛図

要縛陰之真行草之事

要縛陽之真行草之事

要略縛六様之事

笹井流縄縛図

縮縛陰之真行草之事

縮縛陽之真行草之事

縮略縛六様之事

荏井流縄縛図

伸縛陰之真行草之事

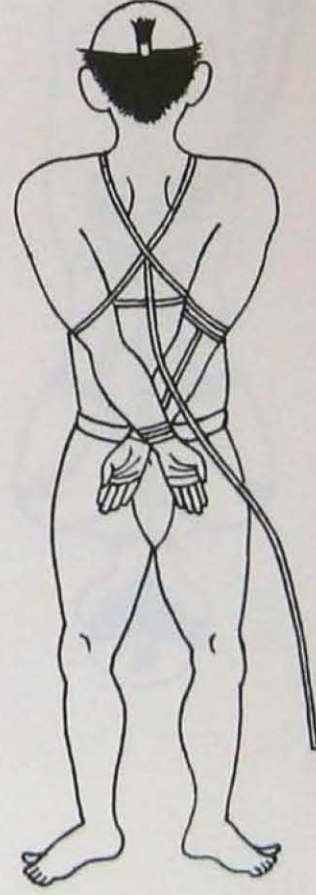
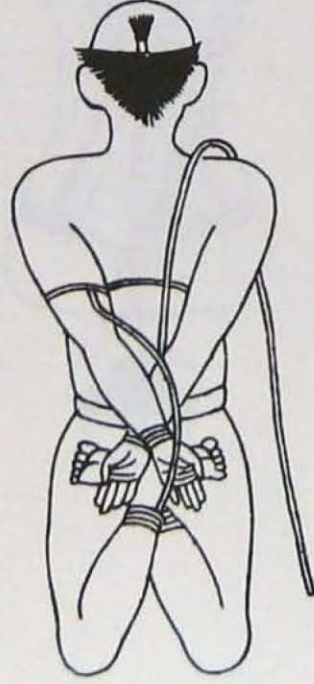
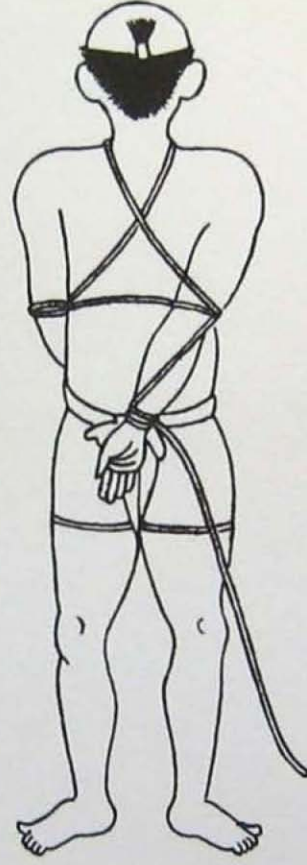
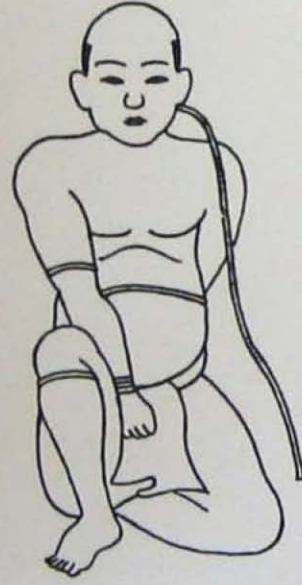
伸縛陽之真行草之事

伸略縛六様之事

捕縄術流名録

捕縄術流名録

藤田西湖　調査

あ

淺山一傳流　慶長　淺山一傳齋重晨
跡見櫟流
荒木流　天正　荒木夢仁齋季綱
安藤流

い

池田流　池田八左衛門成祥
猪谷流　元禄　猪谷忠蔵
一乗不二流　山田彦内信直
一傳流　天正　丸目主人正
一達流　松崎金右衛門重勝
一刀流　松崎金右衛門重勝
今川流　今川久太夫

え

円流

お

御家流　石黒勘七

小野流　佐々木忠蔵孝信

か

海道流

梶原流　延宝　梶原源左衛門尉直景

香取流　影山善賀入道清重

上柄流

眼心流

き

扱心流　宝暦　犬上郡兵衛永保

気楽流　天明　飯塚臥龍齋興義

く

楠流　清野勝左衛門

日下流　日下一甫

日下真流

日下新流　石山七郎右衛門道厚

日下夢想流　三谷左衛門尉吉次

け

源海流　吉川左門助信

謙信流

劔流　芝田劔立

劔徳流　大森仲左衛門尉元陰

こ

講神館流

さ

榊山流
笹井流　明暦　笹井卜也忠行
佐々木流　佐々木大学高正
三抜謙信流　高塀平内

し

至心流　寛文　小泉利心齋
師心流　師心小三郎
志真古流　森住優圓景弘
四心古流　森住優圓景弘
紫山流
常慎流　大須賀文右衛門信清
諸賞流　明和　伊藤庄五郎祐高
沙門流
神流　沼沢甚五左衛門長政
新海流　樋口南海茂廣
心外無敵流　享保　大野茂左衛門家次

新影治源流　橘内膳正家久

新影新抜流

心極流　宮川夢仁齋秀正

真極流　直極夢仁齋入道藤原清定

新心流　関口八郎左衛門

心照流　宮崎只右衛門重職

新撰流

神道無想流　無想権之助勝吉

真之神道流　山本民左衛門英草

新無双流　元禄　比留間万之助尉正茂

す

随変流

鈴木流

須田流

せ

制剛流 慶長 水早長左衛門信也
清心流 寛永 森霞之助勝重
関口流 寛永 関口八郎左衛門氏心
関口新心流 関口八郎左衛門氏心
禅家一流 真山刑部
禅家明傳流 真山刑部

た

大学流 佐々木大學高正
大正流 天保 山崎源太左衛門郷誼
大征流
高尚流
瀧本流 瀧本傳八郎
宅間當流
竹内流 天文 竹内中務大輔久盛
竹之節流
立身流 立身三京

ち

直指流　天野天和守
直至五傳流　中野正勝
地間戸流　佐々木大学高正

て

天流　天正　斉藤判官傳鬼坊
傳心流
天神真揚流　明治　松平柳関齋源正足

と

戸田流　天正　戸田越後守源高興
東流
富澤流　富澤甚内

な

長岡兼流　長岡刑部左衛門尉源時之

難波一甫流　難波一甫齋藤原久長
南蠻流　三浦隼人喬連

に

日流　清野勝左衛門
日新流

は

長谷川流　長谷川内蔵之助
八幡新當流
原流　中村勘兵衛義忠

ひ

日域無雙一学流　佐藤一學
平松天流

ふ

武衛流　武衛市郎左衛門義樹
福島流
藤原流　藤原鎌足
藤元流
佛體流　元禄　梶原源左衛門尉信景
不變流　岩谷外記義統

ほ

方圓流　直守一
寶山流　天仙　堤山城守寶山
武尊流　武尊右衛門
本覺克已流　寛文　添田儀左衛門貞俊

み

水鳥流　水鳥見誉言之
水野流　正保　水野新五左衛門重治

む

無究玉心流　長谷川内蔵之助
武蔵三徳柳生流　阿部忠慶義秋
無雙流 慶長　櫻場采女正藤原廣正
無双流
無相流　夏原八太夫武宗
夢想流　坂房久左衛門尉正久
無双一身流 寛政　藤田八右衛門
無雙神鳥流　宮本無二之亟藤原兼光
無双直傳揚心輭殺流　羽根清太左衛門義忠
無人斉流 天正　荒木無仁齋源秀綱
無邊要眼流　斉藤亦右衛門尉勝久

も

森流　森九右衛門

や

山田流　元禄　山田淺右衛門
山田新心流　中西龍雲安久入道
山本無邊流　山本無邊齋宗久

よ

揚心流　慶長　秋山四郎左衛門義時
養心流　秋山四郎左衛門義時
養心坪井流

り

力信流　天正　宮部蟻峨入道家光
理極流　森川理極

捕縄術流名録　終

参考文献

藤田西湖所蔵

一、荒木流捕手再延之序　一巻
一、荒木流目録之巻　一巻
一、荒木流捕手目録　一巻
一、荒木流捕手免許　一巻
一、荒木流捕手縄目録前書　一巻
一、荒木流縄奥儀目録　一巻
一、荒木流捕手免許状　一巻
一、猪谷流縄目録　一冊
一、傳流縄目録　一巻
一、傳流縄目録解　一冊
一、傳流縄免状並目録　一巻
一、傳流縄許状　一巻
一、達流縄秘奥　一巻
一、達流縄極意之巻　一巻
一、達流早縄早練口傳　一巻

一　御家流和儀目録　一冊
一　笹井流縛縄圖秘傳書　一冊
一　常慎流縄之巻　一冊
一　心外無敵流傳書　一冊
一　新影新抜流縄之巻　一巻
一　新影治源流縄之巻　一巻
一　新影治源流取縄術三十五型
一　真之神道流中段之巻　一巻
一　新無双流秘術　一巻
一　志真古流捕手目録印可免状　一巻
一　須田流縄之巻　一冊
一　制剛流俰之書　一冊
一　制剛流縄之巻又玄集　一冊
一　制剛流俰五身傳　一巻
一　制剛流縄之次第　一巻
一　制剛縄之巻　一巻
一　清心流俰秘鑑　一冊

一　大正流縄免状之巻　一冊
一　直至五傳流縄之巻　一冊
一　関口新心流柔術縄之巻　一冊
一　気楽流柔術目録　一冊
一　縄之巻　一巻
一　縄之記　一冊
一　縄之巻免許　一冊
一　縄之傳極意　一冊
一　縄之法傳　一巻
一　縄一流之秘術　一巻
一　縄かけ傳書　一巻
一　難波一甫流目録　一巻
一　難波一甫流免状　一巻
一　難波一甫流縄之巻　一巻
一　縛圖之次第　表縛行草之巻　一巻
一　原流早縄免状　一巻
一　藤原流拳法縄之巻　一巻

一　藤元流縄起證文　一巻
一　方圓流縛縄圖秘傳書　一冊
一　無雙神鳥流傳書　一冊
一　無想流極意秘書　一冊
一　理極流縄之巻　一巻

一　兵法要務武術圖解秘訣
一　柔術剱棒圖解秘訣
一　撃剱と柔術圖解
一　撃剱柔術指南
一　早縄活法挙法教範図解
一　捕手術解説
一　警察武道逮捕と護身
一　捕縄教範
一　現行捕縄術
一　捕縄術講話

図解　捕縄術
藤田西湖著作集四―四
平成七年九月二八日　印刷・発行
著　者　藤田西湖
発行者　西澤泰義
発行所　名著刊行会
東京都千代田区神田神保町二―二〇
ISBN4－8390－0297－5